
RAN&JUMP【光】

月明かり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R A N & a m p ; J U M P 【光】

【Nコード】

N 3 1 5 0 D

【作者名】

月明かり

【あらすじ】

主夫じみた主人公に『平穏』という文字は許されない。そんなお話です

第1話（前書き）

頑張っています！（ ・ ）
ゞ

第1話

朝：意外にも目覚めがよかった

まあ、昨日練習なかったからだろうけど……

時計に目をやると7時7分と微妙な時間だった

まあいつも通り3人分の朝飯を作り、先に食べる

歯を磨き、着替えて鞆を持つ前に俺の宝物を左手首に身につけて……

「2人とも！起きないと遅刻だぞ?!」階段下から叫ぶように母親と弟を起こしドアを開け学校に向かう

明らかに普通の高校生が朝からやることではない
故に少し悲しい……

「いつてきます」

隣の家から元気な声がした

てゆうか約束も何もしてないのによく毎朝同じ時間に家を出てくるな（汗）

「奈緒…おはよう」

「おはよう 螢」

あ！申し遅れました

俺の名前は火野螢^{ひの ほたる}

17歳の高校2年生だ

つで今隣で一緒に歩いてるのは下田奈緒^{しもた なお}

年は違うけど同じ学年

てゆうよりただ単に俺の誕生日がもうすでに過ぎただけなんだけどね
ちなみに俺と奈緒は幼馴染で……腐れ縁だ

生まれた時からお隣さんで幼稚園から高校まで全てが同クラスという偉業を成し遂げている最中だ
おお怖い……

「ほ……………る……螢！」

「はい！」

隣では心配そうな目で俺を見る奈緒がいた

「ボーとしちゃってるけど大丈夫？」

「ああ…ただ説明してて？」

「へ？誰に？」

沈黙

「……………。」

さらに沈黙

「さあ……」

「新学期早々バカにならないでよ……」

「へい……」

とまあ仲はいいですよ！

どうこうしているうちに俺の通う光輝学園に到着

21Aが俺等のクラスだ

1つ言い忘れていたが隣の席は奈緒だ

椅子に腰掛け2人で話をしていると例の如く奴が現れた

「火野夫婦は今日もラブいったああああ！」

なぜ叫び声がしたかつて？

そんなの決まってるじゃん

相手の顔面に飛び膝蹴りをかましたのよお！！

「朝から挑発すんな！」

「美帆…ホタルンがイジめる〜」

一緒に俺等の側まできた女子に愚痴る

つてホタルン？

それは俺のこと？

俺のことなのか？

ふ…そうか………

「くらええええええ！」

当たれば悶え苦しむであろう程の威力を持つ蹴りを顔面めがけてか
ます

「くらってたまるかああああ!!」

それを右手でガードする
表情からして必死みたいだ

「何で蹴るんだよ?!」

まだ言うか?!

「さっきの『ホタルン』は宣戦布告とみなした!」

足をおろして右ストレート

「冗談にきまつてるだろう?!」

ギリギリで交わす

左フック 右手でガード

踵落とし 両手をクロスさせてのガード
回し蹴……

《ミシ!》

「いったああああ!」

隣からは骨に異常が起きたような音と叫び声が聞こえた
目をやると地面でもがき苦しんでいるバカがいた
彼の頭付近には黄色いチヨークが落ちていた
前方に目を向けると黒板の前に美帆がいた

「ナイス判断だ」

「でしょ？」

ハイタッチをする

奈緒ともハイタッチをしていると

「彼氏にチヨークを投げるってどうよ?!」

復活しやがった

てゆうかそんな事美帆に言っても無駄だろ？

「なら別れる？」

笑顔で言う美保がちよっとばかり恐ろしい

「え?!なんで?!!!」

このくらいの脅しに驚きすぎだぜ

2人について軽く触れておこう

男の名は佐藤隼人さとう はやと

同クラスで親友

顔は良いのでモテる

女の名は松本美帆まつもと みほ

同クラスで奈緒の親友

美人系

中学3年生の時からこの2人は付き合ってます
ちなみに俺と奈緒とは同じ中学出身だ
とまあ仲良し4人組だな

「ホームルーム始めんぞ」

とホームルームが始まったと思いきや気づけば昼休みになっていた

「さてと……」

「行きますか？」

微笑む奈緒を素直に可愛いと思った
だがあくまでも思っただけであって特別な感情を持ち合わせてはい
なかった

そう……

この時はまだ……

第2話

「憂くんと紫織。迎えに来たわよ」

現在1ーCのドア付近から奈緒が我が弟と奈緒の妹を呼んでいる

なんか外野がウルサイけど……

「「はあい」」

うむ

いい返事だな

弟の名前は優^{ゆう}

文字通り優しい性格なのだがガラが悪い

髪なんて金だし……

耳にはピアスが3つほど……

つで奈緒の妹の名前は紫織^{むすめ}

奈緒に引けを取らないくらいの可愛い系

「なあ兄貴……」

「なんだ弟よ？」

その不機嫌そうな顔はいつたい何事？

「…何でもない」

顔を逸らし早歩きで奈緒達のもとへ行く
何だよ？
今のは

現在中庭

ここには満開の桜が数本あり結構人気のある学園スポットの1つだ

「ほゝたゝる！こつちこつち！」

1本の桜の木の下にブルーシートをひき座っている隼人と美帆を発見

「いい場所じゃん」

「だろ？」

笑顔でハイタッチを交わす

チロリン

螢と隼人の友情値がアップした

「螢。はい」

「サーンキュ」

奈緒から弁当をうけとる

平日は毎日奈緒の母上様が俺の分のお弁当を作ってくれるのですよ
主婦の鏡ですよ

隣に目をやると優が紫織ちゃんから同じく弁当を受け取っていた

「ほんじゃ……」

「……………いただきます……………」

蓋を開けまず目にとまった唐揚げくんをパクリ

「うまい」

「ほんと?」

瞬間的に笑顔になる奈緒

なぜか奈緒は俺が弁当を褒めると喜ぶ

「マジマジ。てゆうか花見してるみたいだよな」

「私もそれ思った」

奇遇だな……

「はいはいイチャツかないの」

「…………イチャツいてない!…………」

あのー紫織ちゃん……

なぜ貴女も否定してるのかな？

「マッズ！何コレ！？」

「……え？」「……」

振り返ると優が苦しんでいた
箸には唐揚げが……

って同じ弁当だぞ？！
なぜそんな反応になるよ？

「はい…お茶」

紫織ちゃんからお茶を受け取り一気飲み
試しに優の唐揚げをパクリ

！！

「奈緒！」

「はい」

不覚にも弟と同じ道を歩んでしまった
おいコラ……

そこのカップル笑うんじゃねえ！

優と目を合わせる

『なんだコレは？』

『わからん…兄貴のよこせ』

『ざけんな！俺にはあと百年の余命があるんだよ！！』

『はあ？余命？って弟が苦しむ姿がそんなに見たいか？！』

『ふ…世の中そんなにあまくないんだよ……』

「薄情もの！」

以上アイコンタクトでの会話でした
時間にしてみれば約2秒

結局優は苦しみながらも完食

《キーンコーン》

「」「」「」「」「」

昼休み終了のチャイムが鳴った

《キュツキュツ》

シューズの音と

《ダムダム》

ボールが床に当たる音がする
ここは体育館

「螢！うて」

「あいよ！」

俺の放ったボールはリングをすり抜ける

「よし！」

「ナイスシュート」

隼人に向かってグッドサインをだす
隼人も同様にしてくる

つて何をしているかって？

バスケ部の練習だ

みんな息を乱しながらも必死にボールにくらいついていく

キャプテンが笛を鳴らした

「よし今日はここまで！」

キャプテンの声により練習は終わりになった

「2人ともお疲れ」

「美帆こそ」はい2人の世界へ行っちゃいました
2人の顔はだんだん近くなっていき……

「アホくさ……」

2人に背を向け歩き出すのであった
着替えて校門まで行くいつものように奈緒が待っていた

「お疲れ様」

「どうも」

奈緒は部活に入っていないが図書室で本を読んでいるらしい
そのため同じ時間に毎日一緒に帰るのだ

「今度の公式戦勝てそう？」

「勝ちたいけど……」

ぶっちゃけ弱い

先輩方がね

俺と隼人は選抜メンバーとして招集されるほどの実力だが先輩達は
弱すぎるのだ

「まあ頑張りなよ？応援するからさ」

「ああ……」

左手首に視線を送る

赤のリストバンド

憧れの人から貰った大切なもの

「あゝあ！いつになったらコレを身につけるだけの価値がある人になれるんだろ？」

「もう十分にあるじゃん」

少々ムカッとしたのは此処だけの話

「まだまだなんだよ」

つい声が怒り混じりになった

それには奈緒も気づいたようだ

「そう……」

沈黙

いくら何でも気まずい……

「また明日」

「え？」

「え？って…もう家だよ？」

横に目をやると我が家があった

「もう…」

と言うワリには微笑んでいますね

「また明日な」

「うん」

奈緒と笑顔で別れるとなぜかいつも気分が良い

この時2人は影から見られていたことに後々気づくハメに……

第3話

「おはよう」

今日は朝から違った光景を見ることになった

「ああ……紫織ちゃん…奈緒は？」

毎朝同じ時間に家を出てくるはずの奈緒じゃなくて紫織ちゃんが今横にいる

「寝坊ですよ」

と言うなりスキップし始めましたね

「ご機嫌だね…何かあったの？」

「え？…まあ……」

なぜ赤くなる！？

「あの……」

あ、その上目遣い反則ですから止めましょうね？

「なにかな？」

「今度の日曜日…暇ですか？」

「日曜日？…ちよつと待ってね」

今日は水曜日だから……

日曜日は……部活休みだな
なんでかって？

バスケ部は2日練習1日休みなんですよ

「暇だよ？」

とたんに明るい笑顔になる紫織ちゃん

「じゃ映画に行きませんか!？」

「映画か……」

そういえば最近見てないしなあ……

「いいよ」

さっきの倍以上の輝きが……
眩しい

「やったあ!約束ですよ!？」

「はいよ」

そしてまたスキップですか……

「じゃまた昼な」

「はい」

靴箱で紫織ちゃんと別れて教室に行くついでに隼人と美帆が来ていた

「めづらしく早いな」

そう言った俺を見て隼人が目玉が飛び出るんじゃないかと思えるくらい目を開く

「めづらしいのはお前だ！なぜ隣に奈緒がいない?!」

「なぜって…紫織ちゃんが言うには奈緒は寝坊だそうだ」

「え？紫織ちゃんに聞いたって事は一緒に通学したんか？」

「そうだが？」

隼人は机から立ち上がり俺の両肩を掴み激しく揺らす

「浮気か?!浮気してがばあ!!」

俺の右パンチが隼人の鳩尾をとらえた

まあこんだだけ近けりや避けれねえのは当たり前か……

「あゝ…美帆悪いな。隼人寝ちまった」

床に崩れ落ちた隼人に向かってとりあえず拝む

「気にしなくて良いわよ？それより……」

え？

何でいきなり真剣な眼差しになられるのですか？

「今日は奈緒の機嫌ぜええったいに悪くなるわよ」

予言ですか？！

でも美帆の場合当たるだからタチが悪い

「ってなんで？！」

「螢？朝練は？」

この声は……

振り返ると奈緒がいた
てゆうか何の話？

「朝練？？」

「え？！違うの？」

驚きたいのこつちだ

誰に聞いたんだか……

「そついうお前こそ寝坊なんてめづらしいな」

「は？寝坊？？」

え？
違うの？！

「だって紫織ちゃんがそう言ってたぞ」

「紫織が？……アイツウウ」

奈緒の後ろから怒のオーラが……

「なな奈緒…さん？何キレてるんですか？」

笑顔になる奈緒

だが…長いつき合いだから分かる

この笑顔の奈緒はキレてます

「気にしないで。螢は悪くないから」

いやいや気になるから

視線を横に向けると美帆はあちゃーってな感じでこっち見てるし……

隼人は寝てるし……

誰か助けて！

1日中こんなキレた奈緒の隣で過ごすのは勘弁です……

朝からため息を吐かずにはいらなかった

—————

「それに対抗するために幕府は」

「

今は日本史の時間なんだけど……内容が頭に入らない
これも全部我が妹である紫織のせいだ

なにが『螢さんなら今日は朝練だつて昨日優が言つてたよ』だ！
オマケ……に私が寝坊ですつて！？

嘘ついてんじゃないわよ

しかも美帆の話によると一緒に登校したらしいじゃない
許せない……

今朝こそ螢とあの約束しようと思つてたのに
あ………そうだ！！

《キーンコーン》

「はい今日はここまで」

先生が出て行つた後にすぐ私は美帆のもとへと向かつた

「美帆！」

「なななに?!」

何で怯えてるのかな？
まあいいや

「あのね…今日」

第4話

「はい」

「どうも……」

奈緒から弁当を受けとる

これはいつも通り…なんだけどど

「いただきます」「」

なぜ屋上に2人つきりなわけ!?

「螢? 食べないの?」

くっ!

この状況では聞けない

「食べるよ……」

卵焼きをパクリ

……うまい

「どう? 美味しい?」

そんな目をキラキラさせなくても……

「うまいっす」

「よかった」

この際どうでもいいや

奈緒の機嫌も良くなっただけだし

「螢…あのね…日曜日ヒマだね?」

この姉妹の上目遣いは一発退場ものですよ
しかもヒマと決めつけちゃってますね

「ヒマ…じゃない」

「え?!なんで??」

そんなに驚かれても……
こっちも困る

「紫織ちゃんと映画観に行く約束が…って奈緒!?!」

なんで?!

再び奈緒から怒のオーラが……さっきと違い全快です(泣)

「アイツウウウ!」

「あ?おい!奈緒さん!」

屋上から走って出て行く奈緒を追いかける

てかメチャクチャ速いな……

距離が縮まらないんですけど……

そしてあつという間中庭に到着

そこには例の4人がいた
若干1名苦しんでるけど…

「紫織！アンタちよつときなさい！」

ここまでブチギレた奈緒を見るの久しぶりだな

「わかった…」

紫織ちゃん冷静だね…

ん？

美帆が俺に向かって手招きをしてる

「なんだよ？」

「今朝に紫織ちゃんとデート…しかもあの映画観に行く約束したんでしょ？」

デートではないからね…

ちなみにあの映画とは今話題の恋愛小説をもとに作られた映画のことだ

「したけど？」

後ろに振り向くとあの姉妹はいなくなってるし

「はあ……一時奈緒の機嫌の悪さ続くわよ」

えええ？！

何ですか？！

だが美帆の言うとおりだった
土曜日になった今も機嫌が悪い
一緒に登下校するこっちの身にもなってほしいものだ

「よし！号令」

日直の号令により授業は始まった

暇だ……

いつもなら奈緒と話しているんだが…今は無理っす
携帯を開くと1通のメールが……

美帆か……

『まだ機嫌悪いでしょ？なんとかならない？』

すぐさま返信

『いや無理！逆に俺がお前に頼りたいぐらいです』

『とにかく今日中に何とかしないと明日を過ぎたらもつと悪くなる
かもしれないわよ？』

なんで？

と聞いても無駄だろうな……

しかも今日中かよ！

無理無理無理（泣）

チャイムの音が鳴り授業が終わった

はあ……とりあえずトイレにいくべ

――

「はあ……」

この数日間だけで何度ため息を吐いただろうか

「奈緒…もう正直に言っちゃいなよ」

美帆は唯一私が落ち込んでいるワケを知っている

「でも……」

言ったところでどうにかなるような気がしない
むしろ悪化するような

「いつまでこれバッグの奥に入れているつもり？」

美帆は私のバッグから2枚の紙を取り出した

「なんなら優でも誘って4人で行けばいいでしょ？」

「でも……」

「あ！それ映画のチケットじゃん」

出た……

と私は心の中で呟いた

「なになに？俺誘ってくれんの？」

私はこの人…五十嵐くんが苦手だ

見るからに不良だし軽いつて有名なんですよ

普段は話しかけてこないくせにこういうときに限ってくるんだよな
あ……

「誘うつもりはありません……」

「だってよ？失せな」

実を言うと美帆はこの不良が大嫌いなんだ

「ハハハ！ちよつと恐れいぜ？それより一緒に映画行こうよ」

もうホントやだ！

「他に行く人いますから」

「嘘だあ！さっきのしんみりした空気からして断られたんでしょ？
だったら俺と行こうよ」

肩に手を置かれた

美帆を見てみると殴る体制に……

あれ？

手が離れていく

「おい五十嵐…汚い手で奈緒にさわんな」

「螢?!」

内心驚いたと同時にほっとした

「うんだよ…映画に誘ってただけだろ?」

「は?映画?」

ここで螢は私の机にあるチケットの存在に気づいた

「これはテメエが持ってきたんか?」

「いや…そのお」

螢に睨まれる五十嵐くんが惨めに見えてきた

「違うんだな…だったら失せろ」

ここで五十嵐くんが逆ギレした

「何でお前に命令されなくちゃいけないんだよ!?!下田の彼氏でもないくせによ!」

彼氏でもない

その言葉は私の心に突き刺さった

「コラア!お前達なにしとるか?!」

先生の登場によりなんとか騒ぎは終わった
着席して授業は始まった

「奈緒」

隣から私を呼ぶ声がした
振り向くと螢は私の大好きな笑顔を私に向けていた

「映画一緒に行こうな」

わかつちやつたんだと確信した
でもわかつてくれて嬉しい気持ちになったのは事実だ

「うん」

だから今回は4人でいいや

第5話

やってらんねえ……

それが今俺が口に出したい言葉だ

兄貴に頼まれたから映画に付いてきたのだが……

奈緒さんと紫織の兄貴争奪戦で俺は完璧はぶられ者

「優？元気なくね？？」

「別に……」

兄貴は鈍感だから気づいてないんだろうな……

この姉妹の気持ち

そして俺の……

やめやめ

考えるだけ無駄だ

「兄貴もうそろそろ行かないとヤバいんじゃない？？」

上映まで残り5分

皆さんあのさあ……

時間ぐらい見ようね？

なんかもう……帰ってもいいですか？

――――

さつき映画を見終わっただけと……

「お前等泣きすぎ……」

ラスト20分間俺と兄貴は泣かなかったがこの姉妹は泣きっぱなしだった

「ほら帰るよ」

兄貴が泣いてる奈緒さんの手をつかみ歩き出した
うんお似合いだね
奈緒さんビックリして泣きやんでるし（笑）
てゆうか笑ってる……

「なんでお姉ちゃんばっか……」

嫉妬しすぎだ

紫織……目がヤバイよ？

「なんなら俺が」

「いない！！」

一般的に言われる八つ当たりですね
スタコラと早歩きで2人の所につて手を引き離れた？！

「しし紫織ちゃん？」

兄貴……

顔が引きつつてんぞ

ああまた奈緒さんの後に般若が見える

「何す」

「だいたい何でお姉ちゃんがいるのよ?!」

今頃それを言いますか?!

あ、メツチャ俺も睨まれてる

「だって…ワケは昨日話したよね?」

ああ聞いたぜ兄貴

筋の通ったワケをな

「だってお姉ちゃん火曜日の帰りまでに約束できなかったたら私に譲るって言ったよね?!」

コラコラ兄貴は物じゃないぞ?

「優は黙ってて!!」

「はい!」

え?

何で?

俺何も言っていないぜ?
ん?

兄貴が俺の横に

「口に出てたぞ。まあ確かに俺は物じゃねえわな」

「なるほどね」

もう俺達兄弟にあの2人は止められません

「だから約束したって帰ってから言っただけ……」

ここで奈緒さんは何かに気づいたようだ

「アンタ確かその日私のすぐ後に帰ってきたわよね？ まさか……」

「そうよ！2人のあとをつけたのよ！」

「ええええええ！」

兄貴と奈緒さんの声がハモる
もう俺帰ってもいいですか？

「兄貴：すまん！」

走り去るつもりが兄貴が俺の服の襟をつかんでた

「ま・さ・か俺を置いて帰ろうとした？」

「まさかあ……」

笑顔に笑顔で返す
でないとかの世行きだ

「とりあえず…どうする？」

「だな…ここまだ店内だし」

うん

実際２人して顔に出てないけど内心メチャメチャ恥ずかしいから！！

「はあ……兄貴その袋かせ」

「え？ああ……なるほどね」

さすが兄弟

なにも言わずに分かるとは

袋を受け取り膨らまして結ぶ

紫織の後ろに回り込んで

《パアン！！》

案の定音に驚いて２人ともこちらを見る

と同時に兄貴が奈緒さんの手をつかみ全力疾走

「何してんの？」

「これ以上店内で騒がれたら恥ずいから止めろ」

「え？あ……」

顔真っ赤っか

うん

可愛い

「ほら帰るぞ」

「待ってよお」

この10分後に兄貴がいないことに気づいた紫織が再び暴走したの
は言うまでもない

第6話

「おはよう」

朝教室に入ると2日前の落ち込みようが嘘のように元気な奈緒がいた

「おはよう…我が親友螢よ……どうした？」

奈緒とは正反対に月曜から疲れてますオーラ全快だな

「隼人……聞いてくんろ」

なぜ田舎者風な言い方なのかな？

説明

終了

「ってことは優もこんな感じ？」

「アイツはもつと酷い感じだ……もうダメ」

ああ…可哀想に……

まあいいや

俺はそんなことより早く愛しの美帆のもとへ

「螢…大丈夫そう？」

「部活の頃には復活してるよ」

「単純バカ助」

昼間までのオーラはどうした?!
ホントにバスケしてる時に復活するとは……

「隼人!ボオーっとしてんな」

「うつせい!わかってらあ」

とか言いつつ俺も楽しんじやってまあす

「隼人!」

「そら!」

俺の絶妙なパスでボールは螢に渡りそのままシュート

「ナイスパス!」

「当然!」

ハイタッチを交わす

「でも螢が Dank できたらなあ……」

「無茶言つなよ」

苦笑する

まあ仕方ないか……

螢の身長は177センチで俺はそのマイナス2
もっと伸ばしだい……

「よし今日はここまでだ！」

――――

「悪い遅くなった」

「別にいいわよ」

まさかジャンケンで負けて片づけをやらされるとは……

隣で歩いてる奈緒は急に立ち止まり後ろを見る
何やってんだ？

「ストーカーか？」

半分冗談で半分本気で聞いてます

「違う違う。紫織につけられてないか確認したの」

「あ、そういうことね」

そついやツケられてたんだっけ？

「ねえ螢…もし私がストーカーの被害にあってたらどうする？」

「え?! やっぱりされてんのか!？」

なんだ!？

この怒り混じりのなんとも表現できようのない気持ちは!!

奈緒は横に首を振り苦笑する

「もしもの話」

なんだ……

よかった……

「そりゃ……助けるよ？奈緒は幼馴染なんだから」

俺の言葉に奈緒は急に悲しい色をした瞳になった

なんだ？

普通に何か言葉返せよ

「……幼馴染？」

「え? ああ」

それから会話なしで帰宅

別れの挨拶もなしに奈緒は魂が抜けたかのように家に入っていった

俺何かした？

そのことをお袋（本名：和子^{かずこ}）に言つと……無言で台所に行き……
フライパンを持って……
俺の目の前で振り上げ……
振り下ろしたああああ？！

《グワン！》

「いったあああああ！」

頭が！

頭が割れる　　！

「あんた少しは奈緒の気持ち考えな！」

「それどういう意味？」

辛うじて喋れます

辛うじて……

「自分で考えれ！！」

再度フライパンを振り上げる

もう一発？！

ダメだ……

避けれない！

覚悟して目を瞑る

あれ？

フライパンがこない

「優…やるじゃない」

え？

なにが起きてるんだ？

恐る恐る目を開くと…

「優……」

涙が出そうになった

目を開くと優がまな板でフライパンを受け止めていたのだ

「優に免じて今日の所は許してあげる」

と言い残しお袋は寝室へ行った

「優…ありがとう」

俺は心から感謝する

「別にいいよ…兄貴前に廊下で言おうとしたんだけど……」

記憶リピート中

完了

「うん、してたな。っでなに？」

息を思いっきり吸い込んでますね

「紫織に手え出したらぶつ殺す！！」

「へ？！」

あまりに突然なことで変な声を出してしまった

「だから！」

「わかったわかった！だいたい俺は紫織ちゃんを妹としか見てないから安心しろ」

「紫織はそうじゃないから言ってるんじゃない……」

「は？なに？」

聞き取れなかったです

うつ……

そんな睨まなくても

「とにかく手え出すなよ？」

「はいよ」

まさか優が紫織ちゃんを好きだとは……知ってたけどね（笑）

まあ本人の口から言われたのは初めてだけど行動でわかるから

「優。頑張れよ？」

「兄貴がいなければ頑張れたよ」

それどついう意味？

第7話

次の日から奈緒とは登下校は別々に、会話はほとんどナシとなったべつに喧嘩をしたわけでもないのにまともに話をしなくなって2週間がたった

「螢…いつになったら仲直りすんだよ〜?」

隼人もいい加減この空気に耐えられなくなってきたのだろう

「喧嘩したワケじゃないし……」

それはこの2週間俺が4人に言い続けてきた言葉だ

「そんなこと言ってもさあ……だいたいお前寂しくないわけ?」

「そりゃ……」

ぶっちゃけ寂しいです

とてつもない寂しさと同時に自分でも分からないモヤモヤ(?)とした気持ちでいっぱいです

「寂しいんだ?」

「……まあな」

ここは正直にいうじゃないか

「おはよう……」

「お…はよう」

奈緒との朝の挨拶は毎日家の前だったのに……
元気な挨拶だったのに……
何でこんなことになったんだろう？

「美帆：今奈緒はどこだ？」

「え？なんで？？」

「いいから！」

「お手洗いだけど？」

「……あのバカ……美帆と隼人には悪いが俺と奈緒の帰る用意して
いて」

そう言い残して俺はトイレの前で奈緒を待ち伏せるため移動した
2分後に奈緒はでてきたが……目を逸らし教室に戻ろうとする

「ちょっと待って！」

呼びかけても止まらない

しかたないので手を掴んで歩くの止めさせ顔をこちらに向けさせる

「なによ？ 離して！」

イラッとしたが抑える

奈緒の額に手を当てる

やっぱり

「……帰るぞ」

「え？ なん」

最後まで奈緒の言葉を聞かず手を引つ張り教室に向かう
いったん席に戻り2人分のバッグを右にからう

「螢？ 何してんの？？」

おっと礼を言わなきゃな

「バッグ…サンキューな」

教室から出て行こうとする俺達に隼人が声をかける

「おい！ どうしたんだよ？！」

「……奈緒が風邪だ」

「「は??」」

それだけを言つて教室をあとにする

明らかにペースも落ちてるし体のふらつきが目立つ

だが何度声をかけても大丈夫の一点張りだ

タクシーひろいたいけど……

運の悪いことに机の中に財布忘れてきてしまった

「はあはあ……」

苦しそうに歩く奈緒を見ていられなくなつた俺はある行動に出た

奈緒の前に出て片膝をついて後ろに手を広げる

「……………何してんの?」

何って……………おい!

見ればわかるだろ?

「乗れよ」

「…いいわよ」

「…たくこの娘は!!」

「いいから乗れよ! 苦しそうにしてる奈緒を見てられないんだよ!」

「恥ずかしいことを言ってるのはわかってる」

「ただ本音を言わないと奈緒は聞き入れてくれそうになかった
背中に重みを感じられた」

「手で奈緒が落ちないようにして、足に力を立ち上げる」

「……ありがとう」

「おう……」

「俺の服を掴んでる奈緒の手に力が入る」

「何で…気づいたの?」

「今更聞くなよな……」

「まあ恥ずかしいけど…ここも本音でいきますか」

「行動でわかったよ。それに」

「幼馴染……だから?」

「奈緒が俺の言葉を遮る」

「ただ奈緒……」

「少し間違ってるよ……」

「オシいな。大切な”が抜けてた」

「え……………」

この後に会話はなかった
だけど居心地は悪くなかった

「着いたぞ……………」

「……………うん」

ゆっくりと下ろす
つて！！

なんか頬に柔らかい感触が……………

「な……………お？」

まさか今……………キスした？
でも奈緒の表情は普通だし……………
手だな……………

当たったのは手だ！

うん、そうに決まってる

「ありがとう」

久しぶりに奈緒の笑顔を見た
風邪のせいで力無くだったけど、この2週間ずっと見たかった奈緒
の笑顔……………

それを見ただけでこの2週間の寂しさを忘れられた

そしてモヤモヤ感がないにか気づいた

俺は奈緒に恋をしている

第8話

ヤバイ……間に合わない

これは今の私の心の声だ

時刻 7 : 3 0

もうとつくに螢は家を出て学校に向かっているはずだ
風邪がようやく治ったと思いきや寝坊しちゃうなんて……

自分自身を呪いそうです

時刻 7 : 3 4

走れば追いつく

「いつてきま……」

ドアを勢いよく開け……
固まった

てゆうか……なんで?!

「おう!おはよう」

「おはよう……」

私が寝坊しても待つことのなかった螢が……

「なんだよ?何か付いてる?」

と言つて着ている服のあちらこちらを見て回る

「……なんで?」

いきなり私からの疑問の声に螢はキョトンとする

「なんでって…何が?」

本気でわかっていない様子の螢に落胆する

「いつもは私のことなんて待たないじゃない?この間だつて……」

この間だつて……

紫織の言葉を信じて私を置いて先に行つたくせに……まあ私も紫織に騙されゆっくりしてたけど……

「ああゝそうだったなあ」

シラツとした顔で言う螢にイラツとした
だがその苛立ちも次に発せられた言葉によって

「今日から先はずっと待つよ」
跡形もなく消え去った

だがすぐに新たな疑問が浮上する

「なんで急にそんな事言い出すの？」

もちろんそのこと自体は嬉しいよ？
だけど急すぎるでしょ？

「なんで…か？」

螢は私の大好きな笑顔で言葉を続ける

「俺がそうしたいからだ」

私は嬉しくて飛び跳ねたかったが自重しようとなんとか抑える
「遅刻するぞ！」

走り出した螢を追いかける

もう朝から嬉しい気持ちでいっぱいいっぱいだ

「待つてよ」

今日はニヤケないように頑張った
だけど……

ずっと待つよ

俺がそうしたいから

その言葉を思い出すだけで頬が緩みそうになる

「奈緒……」

「ん？あ、美帆 なになに？」

なんで引きつった笑顔なの？

空いている前の席に座り今度は悪戯な笑みになる
なに？

怖いよ？

「螢と何かあったでしょう？」

ストレートな質問にとっても驚いた

「え？！何で分かったの？！」

「今日の奈緒を見たら分かるわよ」

うそ！？

気づかれないように頑張ったのに……

「気づかれないとも思っただの？」

「うん」

私が正直に応えて美帆にも正直にも応えてもらおう

美帆はクツクツクと意味ありげな笑い方をする

「何で笑うの？」

ムカツとしたので少し怒り口調になっているのに美帆は未だに笑っている

「クツクツク…じゃ話すわね？朝からアンタ超が付くほど元気だったし、授業中はずっとニヤツいてたし」

ニヤツいてた？！

しかも…ずっと？？

私の頑張りは何だったのよ！？？

「それにね…いつもはそういうトコに螢がツツコムのに当の本人はニヤツいてる奈緒を見て微笑んでたのよ！」

『よ』を強調すると同時に人差し指で私の額を強く押す

でも私はただただ啞然としていた
螢が私を見て微笑んでいた？
なんで？

「少しは期待しても良いかもよ？」

最後に美帆は軽く私の頭を撫でて隼人のもとに行ってしまった
売店から戻ってきて椅子に座った螢と目があつた

「ん？なんか用？」

いつもの態度にしか見えない螢に心で問い掛ける

ホントに期待しても良いの？

第9話（前書き）

皆さんよいお年を！！（*^|^*）

第9話

「あ あ 本日は晴天なり」

ステージの上でマイクの点検をする教頭へ述べたい

アンタの頭も晴天だよ…ってな

そう思った矢先に後ろに立っている隼人が背中を突っついてきた
首を横に向け目で隼人を見る

「…なんだよ」

周りに聞こえないくらい小さな声で聞く

隼人は声を押し殺して笑っていた

「あの教頭の頭も晴天だよな」

最悪だ……

期末テスト学年4位の俺が学年94位と同じことを考えていたとは

……

怒った俺は思いっきり踵で隼人の足を踏んだ

「いつ………」

我慢してなんとか声が出るのを抑えたみたいだな
偉い偉い

あとでナデナデしてあげよう

「…絶対に後で奈緒にバラしてやるからな」

訂正します

ボコボコにします

「これで終業式を終わります」

生徒会長さんご苦労さん

そして隼人君…

「え？なにその手は？…ねえ……さっきの冗談だから…ね……すい
ませんでした！」

いくら身のためだからって人前で頭を下げるお前に感心するよ
言わないなら許してやるか

「はやく教室に戻ろうぜ？」

「え…ああ」

隼人と美帆には奈緒を好きなことはすぐに知らせた
その時の隼人はバカ面で

「今頃？」

って言うてきたのに対して美帆は

「へえ……」

と意味ありげな笑みを浮かべていた

ちなみに優と紫織ちゃんには言っていない
何か余計なことをしそうだからだ
だから言っていない

でもそれは大きな間違いだったとずっと後になって俺は気づく

「今までありがとうございました！」

「「「「「ありがとうございます！」」「」「」

俺の言葉に続いて部員が3年生に頭を下げる

ついこの間のインターハイ準決勝で負けてしまったため今日で先輩
とお別れだ

言っとくけどべつに俺は寂しくはないからね！

「今日は解散！」

監督の命によって今日は解散となった

部室に戻り急いで着替えて図書室に向かった

静かにドアを開け中にはいるとヒンヤリとした空気が俺の火照った体を冷ました

目標を捉えた俺は近づき隣に腰を下ろす

「……終わるの早かったね」

奈緒は周りに迷惑にならないように声を出す

「今日3年生の引退日だから」

「そう…じゃ帰ろっか？」

「おう」

奈緒が本を戻すのを待ってから2人で静かに図書室を出る

「あつい……」

パタパタと手で仰ぐ奈緒を見て可愛いと思ってしまった
つくづく惚れてるな

「コンビニでアイス買っべ？」

「」「異議なし」「」

驚いて振り返るといつの間にか美帆と隼人がいた

「おい…いつから居た？」

「」「さっきから」「」

お前ら気をつかえよ

何のために話したと思ってやがる！！

落胆する俺の横を女2人が通り過ぎ次に隼人が通りすぎ……ないで立ち止る

「ふ…朝の仕返しだ」

そう囁き再度歩き出した

仕返しだと？

小癪な！

前を向いて歩いてる隼人の背中めがけてスピードのった跳び膝蹴りをかます

「がはあ！？」

吹っ飛んだ隼人は倒れたつきり動かなくなった

我が親友であつた隼人

享年17歳でした

彼はその明るい笑顔で誰とでも分かち合い

「勝手に殺してんじゃねえ！」

ガバッと起き上がってそう言ったと思いきやすぐにパタンと倒れてしまった

何がしたかったんだコイツ？

そんな隼人を置いて2人のもとへ走っていったのは言うまでもないだろう

外に出ると日差しが強く部活後の俺にはちょっとキツかった
そう思っているとき美帆の提案により急遽ファミレスに避難することになった

昼ちよつと過ぎのため客は俺等含めて4組しかいなかった

「ねえ今年は祭りどうする？」

美帆さん……

パフェをガッツキながら喋んじゃねえ！！

「行くだろ？」

俺としては奈緒と2人が良いんだけど視線を美帆にブツケる
それに気づいたのか美帆はニヤリと笑みを浮かべる

「私と」

《カランカラン》

出入り口から音がしたと思いきやものすごい速さで隼人が俺等に近づいてきた

「置いていくなよ！」

「いやいや…お前何で俺等が此処にいと分かった？」

普通にお前そこおかしいから！

「ああ？！んなもん愛の力に決まっとるだろうが！」

どうだ？！とでも言いたそうな表情の隼人

てゆうかそんなの決まってるから

愛の力？

ありえないから！

「コホン！」

美帆はワザトらしく咳き込む

「今年私は隼人と２人で行くからアンタ達も２人で行ってきなよ」

「行ってくてどこに？ねえどべし？！」

隼人がウルサくて話が進まないのので悪いが眠ってもらった

「奈緒…どうする？」

「埋めちゃえば？」

「いや隼人のことじゃなくて祭りのこと」

しかも真顔で埋めれと言うとは……

お前将来大物間違いなシだな

「わ私は…いいけど」

顔を赤くして上目遣いで俺を見る奈緒を抱きしめたいと思ったのは
内緒でお願いします

「じゃ決定だな」

うまく事を運んでくれた美帆には今度何か奢るとしよう

第10話

毎年夏休みは部活に出て終わると家に帰り休む

暇な日は昼過ぎに起きてダラダラと過ごすといった感じのモノだったが今年は違った

何かと用があるように装って奈緒と接触していた

今日もそのつもりだったんだけど……

「ヘッ クシヨイ」

朝から怠いと思ったら風邪かよ……

マジでダセエ……

……今日は奈緒に会うのは無理……か

気分はブルーで一色です

《ガチャ……》

もしかして!?

何て思ったりしたんだけど人生そう思い通りになどいかない

「兄貴…何だその不機嫌面は？」

「べつに…何か用？」

自分でも分かる程の不機嫌そうな声だ

「お粥作ろつか？」

「腹減ってないんだ…悪いな」
体起こすのもダルいときたか……

「腹減ったら言いなよ？」

そう言った優は部屋から出ていった
優の階段を下りていく音がした

「……………」。

暇だ

病人が何を言うか！？と言われそうだが実際のところホントに暇だ

「ふあゝ……………」

仕方ないさね…………
最終手段

…………おやすみ

なんか頭に当たってるんですけど？
ってな感じで目を覚ました
目は開けてないけど起きてますから！！

…………あれ？
これ撫でられてんじゃない？

しばし神経を頭に集中

うん、撫でられてる
でも優やお袋がするわけないし……
隼人……やりそうだな
いや『やりそう』といったレベルじゃない……
奴なら100%する！
そして起きた俺の反応を楽しむはずだ

ふ…………
覚悟はできてるんだろうな？

隼人さんよ!!

勝手に今俺を撫でているヤツを隼人と決めつけてしまっていた

手を相手に気づかれないうちに握りしめて……
目を開き相手を確認して……………

あで？

「あ、起きた起きた」

視界に入っただのは微笑む

「……………奈緒？」

「そっだよ」

俺はバカだ……

もっと早く気づいていれば……
撫でられ続けていられたのに……

「優君に聞いたよ。昨日ずぶ濡れで帰ってきたんだって？」

「ああ……」

さっきまでの笑顔は消え怒り混じりの表情になった

「それが原因よ…たぶん」

「たぶんじゃなくて間違いなくだな」

そう言った後に微笑んでみせると急に奈緒が俺の額に手を当ててきた

sonだけでドキドキする俺って意外にウブ？

……うん、この考えキモイね

額から手が離される

少し……残念だ

「熱…下がったみたいだよ」

「あ…そういえば体が軽くなった気がする」

菜緒に言われて気づいたが先程まで重かった体がかなり軽くなって
いた

と同時に

《ぐう》

腹減った……

「クスクス…お粥作ってくるわね」

この発言に驚愕した

「お前料理できんの!？」

これはかんに障ったらしく目つきが鋭くなった
こわ……

「私だって料理くらいできますうー!」

いやアナタ前科がありますから!!

「いやだって中2の時の調理実習でお前が作った唐揚げ食べた班員
が気絶したじゃん」

紛れのない事実だ

意識の戻ったそいつは震えながらこう言っ たらしい……

『アレは食べ物じゃない…毒物の一種だ』

今の俺が聞いてたら死線越えてたよ?

まあそいつの語りを幸いなことに奈緒は知らない

っで……そんなことがあったのに何か作って俺に食べさせるって……
僕ちん風邪ひどくなっちゃうよ?

「ああれはちよつと失敗しただけ!あの後修行して人並みに作れる
ようになっ たんだから!!」

そんな必死な目で見られると信じたくなくなってしまっ ……

あ、閃いた

「じゃあ唐揚げ作って」

何を隠そうこの火野螢

唐揚げが好物でござる

それに修行したのなら中2の時みたくなならないはずだ
修行をしていれば……

「わかったわ！見てなさい」

そう言つて奈緒が部屋を出ていってから20分が経つた
俺のお腹も今ピークを迎えつつある

《カチャ》

「できたよ」

階段の音を立てずに元気よく奈緒が部屋に入ってきた

「さあ食べて食べて！」

皿を手渡される

見た目は…悪くないどころか良い

だが問題は味だ

震える箸で1番小さな唐揚げを摘み口へ運ぶ

！！

「…うまい」

「でしょ?」

ニコツと笑う奈緒を見ながら俺はあることに気づいた

もう1つ食べてみる

やはりそうだ

この味はいつも弁当に入ってる唐揚げと同じ味だ

第11話

「あの～奈緒さん……」

螢はなぜか急にしゃべり方が敬語になった

「毎日弁当作ってんのお前じゃねえ？」

「え?!」

心臓がドキンとした
驚いた

「やつぱり……」

「あう……」

表面温度も急上昇
あつい……

「『なんでわかった?』って言いたそうな顔だな」

彼は呆れ顔で私の心を読んだ

「じゃあ聞くけど何で分かったの?」

彼は唐揚げがのったお皿を指差す

「味だよ。あ・じ!」

「味？」

「弁当に入ってる唐揚げと全く同じ味がしたんだよ」

そう言つて唐揚げを指でつかみ口に運ぶ

「うん、旨い」

ニツと笑いながら感想を言ってくる

「ありがとう」

彼は一瞬だけ…

悲しい瞳をした

それを私は見逃さなかった

「気づかなくて悪かったな」

ごめんと言つて頭を下げてくる

私は焦った

こんなことになるとは思っていなかったから

「そんな謝らないでよ！」

焦ったからかな？

声がいつもより大きくなる

「いやだつて」

「私が！…私が初めにママが作ったなんて言ったのが悪いんだし」

そう……

私が嘘を言った

彼はそれを信じていただけ

「ね？だから謝らないで」

「…わかった」

うん、顔は全然納得してないね

「新学期が始まったらまた作ってくるから感想聞かせてね」

「おう、約束する」

「はい！じゃこの話はお終い」

《コンコン》

いきなりの音にビックリして体が少しビクついた

「あ…開いて…る」

螢はそれがツボに入ったらしく俯いて笑うのを我慢している

《カチャ…》

やはりきたか…

「螢さん風邪大丈夫ですか？」

我が妹でありライバルの紫織が部屋に入ってきた

その後ろには……怖い顔をした優君がいた
何でそんな怖い顔をしてるのかな？

「兄貴…バイト行ってくるから」

螢は視線を紫織から優君に移して引きつった笑顔になった
こんな顔をする螢初めてだ

「おおっ…気をつけてな」

「ちっ！」

《ボタン》

今舌打ちしたよね？

あの文字通り優しい性格の優君が舌打ちする不機嫌だなんて……目
面しい

「優の奴どうかしたんですか？明らかに不機嫌でしたけど」

紫織は不思議そうに螢に尋ねる
てゆうか私は完全に無私なわけ？

「さあ？わからないな」

そう言って苦笑して前髪をイジった時点私は嘘だと確信した
前髪をイジる…螢が嘘をついた時にする仕草だ

「そうですか。って風邪の具合は？」

「だいぶ良いみたいよ。ねえ？」

「おう！」

「そうですか！良かったですね」

だから私をシ・カ・ト・しないでよ！
ム力つくなあ…

「お腹空きませんか？私が何か作ってきましょうか？」

「ありがとう。でもさっき奈緒が作ってくれたから大丈夫だよ」

「あ、そうですか。ちょっとすいません」

友達にメール返さなきゃと言って携帯をポケットから取り出して扱い始めた

「あ、そういえば奈緒」

「ん？なに？」

横からスゴい睨まれてるのは気のせいだよな？

「明後日に試合あるんだけど見に来ないか？」

ちょっと不安そうな顔でのお誘い
もちろん…

「行く」

やっぱ最近になって螢…変わった
以前は試合があることは伝えてくれてたけど誘うなんてこと全然な
かった

この変化は私にとって嬉しいことだ

《 》

「電話なつてんぞ？」

「え？うん」

携帯を開く

メールだ……

え？紫織から？

「螢さん。私も見に行っても良いですか？」

螢に話しかける紫織を睨んだ

『いい気にならないでよね』

これはさっき紫織から届いたメールの内容だ
何でいきなり文句言われないといけないのかな？

『なつてない。へんな言い方やめてよね』

返信

紫織がメールに気づく

そして私を睨みつけメールを返信する

……きた

『五月蠅い。ちょっと料理できるからって調子にのらないでよね』

ムツカア……

『のつてないわよ。できないからって僻まないでよ』

『僻んでなんかない！私だってやればできるわよ！』

『へえ……弁当を食べた優くんは毎回苦しんでたよね？あれは何か？』

『あれは優の舌がオカシなだけ』

『螢も苦しんでたけど？』

『それはお姉ちゃんの弁当食べたてからでしょ？』

『……アンタ消すわよ？』

『あのさあ……2人ともどうした？めっちゃ怖い顔してメールしてるみたいけど』

顔を上げると螢は携帯を右手に持って心配そうにこっちを見ていた

第12話

「整列してください！」

審判に言われるがままにする
てゆうか元気な審判だな…

「では始めます。礼！」

軽く頭を下げ移動する

しばらくして審判がセンターサークルでボールを上に向けて
試合開始！

味方が弾いたボールを隼人がキャッチすると同時に俺がリングに向
かって全力で走る

すぐに気づいた隼人は俺の進行方向や上に向かって投げ、俺はそ
れをジャンプして軽く払いそのままリングに通す

開始わずか4秒

いつきに味方の歓声がわく

「ほーたーるー！いいーぞー！」

体育館2階から声がする

頭を上げると回りに結構人がいたのにワリとすぐに見つけられた

恋の力ってヤツかな？

なんちって

一応ガッツポーズをしてみせて守りに戻る

「よし。隼人…勝とうぜ？」

隼人に呼びかける

「あいよキャプテン」

隼人がニツと笑い応えながら他の部員にも呼びかける

「キャプテンが勝つ気満々だよ！」

「おいおい…」

そんな大声で言わなくても…
アレ？

皆さん目つきが変わっちゃったよ？

「螢！俺も勝ちてえぞ！」

「僕も！」

「自分も勝ちたいです！先輩…！」

なるほど…

新チームでの初めての試合という緊張がなくなっただけね…

「よつと！」

隼人が相手からボールを奪う

そしてすぐさま俺に渡す

ドリブルをしながら皆に問いかける

「よっしゃあ！勝つぜ！？」

もちろん応えは

「」「」「おう！」「」「」

勢いづいた俺達は結局 8 6 対 3 1 と圧勝だった

体育館を出て隼人マネージャーと美帆と部室を目指していると

「ストップ！」

大きなバッグを持った奈緒が現れた
いったい中身は何だ？

「奈緒　！きてたの？！」

美帆が奈緒に抱きつく

隼人……

奈緒に嫉妬するな！

てゆうよりそんな目で俺を見るな！！

前方では奈緒と美帆が会話を続けている

「うん！応援にきたよ」

ここで悪戯な笑みを浮かべ俺を見ながら奈緒に問いかける

「だ・れ・の応援？」

「俺だよ。誘ったの俺だし。なあ？」

「え？うん……」

なぜ頬を赤める？

意味分からんわ……

そしてその2人！

驚きすぎだ

「誘ったの？」

「螢が？」

なんだその目は？

何が言いたい？

「はあ……誘ったって言ってんじゃないよ」

「へえ……まあ上出来ね」

上出来？

なにが??

「だから気合い入ってたのか。納得」

なかなか良いところくな隼人

「奈緒：そのバックの中には何が入ってたんだ？」

ひとまず話を逸らしましょう
でないと身がもたん

「それは中庭へ行ってからのお楽しみ」

と奈緒が言うので今中庭で円になって座ってます
右に奈緒で左に隼人、正面に美帆ってな感じだ

「じゃ出すねえ」

バックから出てきたのはなんと重箱だった

「これ作ってきたんだ」

奈緒が蓋を開ける

「すい……」

同意見だぜ隼人

「奈緒が作ったの？」

「そうだよ？」

中身は俺の好物ばかりだった
唐揚げにエビフライに卵焼きetc.

まさか俺のために作ってくれた？
……まさかね

わり箸を皆に配って

「……いただきます」「」「」

どれを食べようか悩んだが結局箸は唐揚げにいった
パクリと……
うん

「旨い」

約束通りに感想を述べる

「ホントに？」

途端に奈緒は可愛い笑顔になる
「ホントだよ」

「よかった」

「はい2人の世界に入らないの」

ちっ！

またよけなコトを…
話逸らすしかないな

「ところで奈緒さん。紫織ちゃんの風邪の具合はどうですかね？」

「重症みたい。ベッドから動けないほどのね」

「それはまた…悪いコトしたな」

100%俺の風邪がうつたとは思えない
ホントごめんね…

俺は心の中で紫織ちゃんに詫びるのであった

「はい、あ〜ん」

「あ〜…どは!?!」

踵落としが見事に隼人の頭に決まった

「目の前でイチャツくな!」

「てんめえ…もう手助けしねえぜ?」

へえ……

そんなこと言う?

言っちゃう?

「なんだよその顔は?」

隼人に近づき耳元で囁く

「そんなコトしたら無限地獄を味わうことになるぜ?」

離れると隼人は涙目で俺にこう言ってきた

「俺等親友だよね？」

第13話

「お袋！起きねえと遅刻するぞ?!」

夏休みになっても俺の日常は変わらず朝誰よりも早く起きて朝食を家族分つくり階段下からお袋を呼び起こす

毎回思うんだけど……

普通逆じゃない?!

まあそれは親父が早くにしてこの世を去ったからだろう

原因は知らないし、今更知りたくもない

べつに親父が嫌いだったとかじゃない

理由はお袋が話さない、ただそれだけのコトだ

《ガチャ…》

ドアを開け外に出ると雲1つない綺麗な青空だった

「よし!」

気合いを入れて学校へ向かった

部室に入るとすでに何人かの部員がきていた

「おはよう」

バスケ部の心得その壱

学年関係なく必ず挨拶すること

嘘です

今かつてに俺が作りました
ごめんなさい

「おっはよう」

朝からテンション高いなこの野郎は…

「暑いから離れろ」

後ろから飛びついてきた隼人に向かって威嚇する

「はあい」

いつもなら泣き真似の1つでもするが今日は素直に身を引く

「お前のそのテンションはキモいぜ…」

「なにを言うか！？今日は年に1度の祭りだぞ！テンション上がらないでどうする！？」

と力説する隼人をただのアホにしか見えないのは俺だけだろうか？

「祭りというだけでそこまでノボせるなんて小学生かお前は？」

いや小学生でもそこまでないんじゃないだろうか？

俺の発言など気にもとめずに笑顔で隼人は部屋を出ていった
シューズも持たずに

練習が終わり部室に戻る頃にポツポツと音を立て雨が降ってきた
やがて朝の天気が嘘のような豪雨となった

「こりゃ祭り中止だな」

「くっ！なんでだよ…」

振り返ると制服に着替えた隼人が握り拳を作り、唇をかみしめていた

「なんで雨が降るんだよ…」

「いやいや、なんでそんなに悔しがってんだよ？」

これがフザケているなら良いが恐らく隼人は本気だ
これは精神年齢4歳だな

「愚痴言つてないで帰るぞ。部室の外で美帆が待ってんだろ？」

「マイハニー今行くよ！」

美帆はコイツのどこに惚れたのか本気で気になった
外に出ると部室前で雨宿りをしている美帆がいた

「みっほー！！」

隼人は美帆に抱きつこうと両手を大きく開いて走りだした

「ウザい！！」

美帆は咄嗟に横にずれて低姿勢になり右足を横に出す

それに見事隼人が引つかかりハデに転んだ

1回・・・2回・・・3回

と回って起きあがった

「美帆痛いんだけど？」

「隼人が悪いんだから自業自得よ？それより傘持っていないの？」

「ない・・・」

くるりと体を反転させて俺を見てきた

「螢は？」

「ねえよ」

あるわけがない

なんせ天気予報では今日1日晴れだと言ってた

「どうすんのよ？」

「嘆くな。状況は変わらん」

「でもどうする？コンビニに買いに行こうにも遠いし・・・」

隼人が正論を言うとは・・・

精神年齢は中学生に格上げしてやろう

「タクシー呼ぶ？割り勘ならあんまりお金かかんないし」

「そうすつか…」

てなワケで電話しようとした時だった

「あ！いたいた」

聞き慣れた声が聞こえた

しかも上機嫌だ

後ろを振り返ってみるとやはり居た

「紫織ちゃん？どうしたの？」

俺の問いに紫織ちゃんは笑顔で応えてくる

「螢さん傘持って行ってないんじゃないかなあ〜と思って向かいにきました」

えへへ と笑う紫織ちゃんの右手を見ると傘が2本あった

「え？マジで？」

「マジっす！だって螢さんこの前雨に濡れたのが原因で風邪引いたじゃないですか。だからです」

その風邪、紫織ちゃんにうつっちゃったもんね…
ごめんね

「ありがとう」

紫織ちゃんの頭をナデナデする

「あのさあ申し訳ないんだけど……」

横に目をやるとホントに申し訳なさそうにする隼人がいた

ヤバイ…

コイツが言いたいこと分かってしまった

「1つ傘貸してくんない？」

お願いと言って手を合わせてくる

「え！？いいですよ　むしろ大歓迎です！」

「ありがとう」

紫織ちゃん大歓迎は間違ってるよ

てゆうか何で大歓迎なんだ？

でも傘を貸して正解だよ

でないと鬼が君臨してたよ

「じゃ美帆帰ろうか？」

「うん」

2人は仲良く腕を組んで相合い傘で家に帰りましたとき
めでたし、めでたし

「螢さん帰りましょ？」

「ああ…」

と2人で傘に入っ
て思った
これ優に見
られたらヤ
バくね？

第14話

私は今、気をつけていないとニヤケてしまいそうなくらいのご機嫌だ
だって…

横に目をやると近距離で隣に螢さんがいる

相合い傘……

夢にまで見た螢さんとの相合い傘

嬉しくて堪らない

「つで隼人のヤツがさあ」

螢さんは笑顔で話してくる

私は彼の笑顔が何よりも大好きだ

たぶんお姉ちゃんも……

お姉ちゃんが螢さんのことを好きなのは知っている

お姉ちゃんも私が螢さんを好きなことを知っている

「紫織ちゃん？」

「え？あ、何でしょうか？」

「いや…なんか難しいこと考えてるような顔してたから。悩み事？」

「いえ、そんなんじゃないありませんよ」

手をひらひらとフリながら、笑ってごまかしてみる

「なにか悩みがあったら言いなよ？相談にのるから」

彼のこういった優しさも私が好きになった1つのうちだ

「はい！ありがとうございます」

譲れない……

螢さんだけは誰にも譲れない
例え相手がお姉ちゃんでも

「そついえば今日祭りだったのにな……」

「え？そうなんですか！？」

初めて知った

螢さんは素で驚いてる

そんな顔されたら多少傷つきます……

「ホントにそのお……知らなかった？」

「……はい」

苦笑しながら『雨だから明日に延期だよ。よかったね』と言つ螢さ

んを見ながら私はふと思った

彼は誰と行く予定だったんだろう

まさか……

不安が募る……

私は思い切って聞いてみることにした

「螢さんは誰かと行く予定があつたんですか？」

「うん、奈緒と2人で行く予定だったよ」

「え……」

私はお姉ちゃんと2人ということにも驚いたけど、それ以上に螢さんの顔を見て驚いたホントに……

ホントに嬉しそう笑っていたから……

もしかして螢さんはお姉ちゃんのことを……

好き？

いや、それはあり得ない

去年フザケながらにしろ試しに聞いてみた時真剣に拒否をしていた
そうだそんなコトない

あるはずがない

そう私に言い聞かせ落ち着かせる

「そうだ！明日行く人が決まってるなら」

私を誘ってくれる？！

そんな夢のような願望は

「優と行ってあげてくれないかな？」

厳しい現実によってかき消された

「……はい」

誘って欲しかった…

一緒に行こうと言って欲しかった

「あ、家に着いたね」

気がつけば家の前に着いていた

「じゃあ今日はホントにありがとうね。今度なにかお礼するから」

「いえ…そんな」

「いいから。何かない？」

だったら今度こそ……

「再来月に上映される映画を見に行きたいです」

「わかった！じゃ映画ね」

ありがとうと言って彼は家に入っていた

それを見送った私は家に戻った

リビングに入るとお姉ちゃんがソファに座ってテレビを見ていた

「さっき私」

「知ってる」

「……なんで？」

「何でしょうね？」

そう言ってお姉ちゃんはリビングから出ていった
私も部屋に戻ろうと階段を上ろうとしてあることに気づいた

お姉ちゃんの傘が濡れている

第15話

「兄貴？俺もう行くけど？」

「おう、気をつけてな」

行ってきましたと機嫌良く家を後にする優を見送る

昨夜、優は紫織ちゃんからメールで祭りに誘われたと大喜びで騒いでた

勿論すぐにお袋によって沈黙させられたけどね・・・

家のことをアレやコレやとしているうち時計は6時を指していた

急いで用意をして奈緒を迎えにくくために家を出た

はい、意味が分かりません

俺が何かしましたか？？

全く心当たりないぞ？

下田家のインターホンを押して姿を現したのは白色に花模様の浴衣を着て・・・

私は今とても怒っていますオーラを全身から発している俺の想い人だった

俺を一度睨みつけ、俺の横を通り抜けて行った

つで今前方約1メートルに奈緒はいる
ってゆうか歩いてる

祭り会場に着いたのだが現在も無言で俺の前を歩いている

「奈緒さん？どうして怒っていらっしやるんでしょうか？」

「・・・・・・・・。」

「奈緒さん？」

「・・・・・・・・。」

「おい」

「・・・・・・・・。」

はい俺のスイッチがオンになりました

「おい！」

「なによ?」

振り返った奈緒の顔を見て怒りは何処かへ吹っ飛んでいった

「なんで泣いてんだよ」

「うるさい! 螢のバカ!」

そう言つて奈緒は人混みに紛れ込み、見えなくなった
急いで追いかけたのだが結局見つけれなかった

ああもう!

何なんだよ!?

俺が何したつて言つんだよ!?

「はぁ……」

とにかく見つけてから話を聞くとしますか?

「ハアハア……隼人? お前・ハア……どこにいる?」

40分間ずっと走り回つたが見つけれず、祭りに来てるであろう
隼人に助けを求めようと電話をした

「ハアハアつてお前は変質者か?」

耐える・・

耐えるんだ俺

「・・・・・・・・お前どこにいんだよ？」

「祭りだ。何かあった？」

俺の今の状態を告げた上でもし奈緒を見つけたら電話をしてもらえよう頼む

「いいけどよ・・お前さぁ奈緒がどこ行ったか心当たりないわけ？」

「・・・・・・・・あ！」

「行つてらっしゃい」

通話は切られた

俺は再び走り始めた

肺が痛い

全力疾走ぶっ続けは流石にキツイ
だけど・・・・・・・・

携帯のサブ画面を見る

歩いてたら間に合わない！

俺は祭りの会場からでて歩いてきた真っ直ぐの道を駆け抜けて行き、
途中で右に曲がると目的地である西小学校見えてきた
校門を通り抜けてグラウンドに着いて走るのをやめた

「ハアハア・・・奈緒」

暗くて周りが見えないせいでどこかに人が居るのかわからない
もし奈緒がいるのなら

そう思いながらグラウンドの端にある遊具、ブランコに向かってあ
る来だした

周りは静かで俺の歩く音だけが聞こえる

「いねえか・・・」

ブランコには奈緒の姿はなかった
溜息を吐き、ブランコに腰を下ろす

「ドコにいったよー!!」

思いつきり叫んで俯く
マジでドコに

「なんで・・・」

「あ？」

顔を上げると驚きの表情をした奈緒がいた

「お前さあ」

《ヒュルルル・・・ドン》

「「あ」

夜空には色とりどりの花火が咲いては散り、また咲いてを繰り返していた

「綺麗・・・」

呟く奈緒の瞳はとても輝いていて少しドキツとした

「座れば？」

視線を隣のブランコに移しながら言ってみる

「う、うん」

奈緒が隣のブランコに座つたのを確認すると夜空に一瞬だけ咲く花に視線を移した

そして、そのままの状態で奈緒が怒っていたワケを聞こうと口を開く

「ごめんね」

前に謝られた

「べつに良いけどよ・・・」

いや、良くないか？

「なんで怒ってたんだ？」

「うつ！そそそれは・・・」

動揺丸出しだ

眼が左右上下に動きまくっている
多少面白い

「『そ』の回数多いぞ？」

「あう……」

チラリと横を見ると奈緒は俯いてた

「言いたくないなら言わなくてもいい」

「うん……」

まだ俯いている奈緒の頭に手をのせ、優しく撫でる
そうしながら黙って2人で花火を見る

「俺さ」

奈緒が好きだ

そう言いたかったのに口が動かなかった

「なに？」

頭を上げて俺の目を真っ直ぐに見てくる

すいません、言おうとしたことと別のことを言わせてもらいます

「去年のことギリギリまで忘れてた」

「それって・・・此处で美帆達と4人で花火見たこと？」

「うん」

「ひどー!!」

「「え？」」

バツ！と前を向くと声を出した乱入者×2がいた

お前らいつの間に来たんだよ!？

第16話

「お前ら何時来た？」

「あらあら、これは電話の向こうでハアハアと興奮していた変質者じゃありませんか」

隼人の発言に螢のスイッチが入ったのがわかる
だって笑顔なのに眼が笑ってないんだもん

「ヤッバ！」

「逃ーがーすーかー！」

危険察知して逃げる隼人を鬼の形相で螢は追っかけだした
2人ともにジャングルジムを上って飛び降りて、次に滑り台を駆け
上がったもう片方から滑り降りる

「きゃはは！」

「おかしー！あはは」

走り回る螢と隼人を見て私と美帆は笑った
そういえば、中学時代はよく4人で走り回ってたなあ

気がつけば螢も隼人も笑いながら走ってる
何だかんだで楽しいんだね

あ、とうとう捕まえた

「捕まえたぞコラー！」

「あ！それはダメだって！い．．いやああああ！！！」

「審判カウントしろ！」

グラウンドのど真ん中で寝技を決めた螢が私達にカウントを求めた

「ワン！．．．．．ツウ！．．．
．．．．．」

「ワザと遅く言ぬああああ！」

螢が力を入れたみたいで語尾が叫び声になる

「どうだ？！」

「ギブギブ！」

「却下」

「奈緒の鬼！！！」

「螢．．．」

「ラジャー！」

「ギャー！！折れる折れる！！」「折れる！！！」

「ノオーーー！」

花火そっちのけで《今》を私達は楽しんだ
ホントのホントに楽しくて、ずーーーーと笑っていた

「ねえ！もうそろそろ花火やろうよー！」

美帆は持っていたビニール袋から花火セット、定価780円を取り出した

「そつえば打ち上げ花火終わっちゃったみたいだね」

夜空には星達と月が輝いていた

花火を中から取り出して、まず手持ち花火で楽しむコトに決定したので各自手にとり火をつけ・・・

「イェーイ！」

「ヒャッホー！」

ハイテンションの2人は両手に花火を持って走り出した

「あ・・・」

何かに気づいた声が横から発せられ、視線を移すとブラックな笑みを浮かべる美帆が普通の花火より太くて長い花火を手にとっている

あ・・・確かそれ・・・
去年と同じアレだね？

私は同じ物を手に取り、取り扱い上の注意を読み始めたと同時に男
2人が戻ってきた

「次はどれにしようかなあ」

「ん？あ、美帆さん？まさか、それは」

螢は美帆が持っている花火の存在に気づいたので、注意を読み終えた
私が代わりに頷いた

あ、顔が引きつってる

「隼人逃げろ！」

「え？あ、うつそおお！」

隼人も気づき螢と一緒にになって逃げるが・・・火の玉が連発で襲い
かかってきた

《取り扱い上の注意

火の玉が勢い良く出ますので人に向けないでください》

「避けないと火傷しちゃうよん」

美帆は既に悪魔となっている

笑っている眼がヤバい

「あ、危な！うお！？」

「うわ！彼氏にする行為じゃねえ！！」

なんて文句を言ってる割には2人とも完璧に避けてるね
さすが現役部活生
スゴい

数分間に美帆は天国に、螢と隼人は地獄にいた

もちろん、この後は安全に打ち上げ花火を楽しみ・・・

「トリはやっぱりコレでしょう！？」

と言う美帆の発案で線香花火を1人1つ持ってしゃがんでライター
で火をつける

「綺麗だねえ」

「・・・だな」

決して勝負をしているわけでもないのに螢の目は真剣そのもの
だが私と目が逢うと優しく微笑んだ

「また来年も4人で此処にこような？」

「うん」

気がつけば2人の火の玉は地面に落ちていた

「私ね」

螢が好き

「なんだ？」

「の、のど乾いた」

「それじゃ買いに行くか？」

「うん・・・」

私の小心者！
今言えばよかったのに・・・

「ほら！行くぞ？」

螢は私の手を取って立ち上がらせて、そのまま引っ張って歩きだした
私は手を繋いだということが嬉しくて・・・

「なにニヤケてんだ？」

「うるさい馬鹿！」

ニヤ・・笑っていた

今日の嬉しかったことNo.1だね

今となつては昨日から螢に苛立っていた自分はバカだったと思う

螢は何も悪くないのに1人で勝手に怒って、無視して、泣いて・・・

・最悪だよね私

螢・・・ホントにゴメンね

それと・・・大好きです

第17話

朝起きていつものように家事をしてお袋を見送ると俺は2度寝するために部屋に戻った

ベッドに入ると直ぐにウトウトし始め、

もう寝る……

そう確信したときに

《ドタドタドタ!》

階段を勢いよく駆け上る音が俺の耳に入ってきた

そして俺の部屋のドアがものすごい速さで開かれる

俺にプライバシーはないのですか？

「螢　！お姉ちゃん達から手紙が届いたよ！」

「げはっ!?!」

上半身を起こした俺に嬉しそうに笑う奈緒が手紙を見せようとして振り下ろした手が頭にヒットした

「な……に……お・まえ」

頭がグワングワンとして声が思ったように出ない
どんだけの喜びパワーだよ?!

「……えへ」

笑って誤魔化すんじゃない！
って言いたいのに声が出ない

「螢？大丈夫??」

「心配する前に謝れや」

言っておくけど僕ちゃんかなりカッチンときてますから
いくら奈緒でも謝ってもらはないと納得いかん

「ごめんごめん。それでさ」

謝り方かる!!

「なんだよ？」

もう起こる気力がなくなってきた・・・

「お姉ちゃんから手紙が届いたよ！」

奈緒が握っている手紙にまず目を向け、次に奈緒の顔を見ると笑顔
でウンウンと頭を縦に動かす

「マジで!?!?見せて!!」

奈緒から手紙を奪い取る
ええ・・・と

『急に手紙が届いて驚いたかな？』

実は毎度のコトながら瞳が急に、ほんとに急に沖縄に行こうと言いついて、その時に皆を呼ぼうと言ったことになりました

電話で言えば良いはずなのに何故か手紙で教えることになったかったことは気にしないでね

返事は手紙ではなく電話をお願いします。

椎名薫

「沖縄？」

「ビックリだよな？つで、どうする？」

いや……

そんな目を輝かせながら俺を見るな

「ひとまず優と紫織ちゃんに」

「行く！！！」

タイミングを見計らったようにドアが開かれたと同時に男女2人の声がした

「だよな てゆうか皆行くってもう電話しちゃったんだよね」
「はあ?!」

お前それはないでしょ？
俺に拒否権ナイじゃん……

「っでいつから行くんですか？」

もはや俺は蚊帳の外状態で話は進んでいる

「明日だよ」

「は!？」

そこ笑顔で言うところじゃないから!!

「じゃ今から用意してくるね」

「俺もしてこようっと」

いやいや2人ともツツコメ!

100歩譲ったとしても驚くぐらいしろよ!
急すぎるにも程があるだろうが!!

そんな風に思っている俺を余所に2人は部屋を去っていった

「螢?どうしたの？」

「どうもこつも・・・誰か1人くらい明日つてところに疑問を抱けよ」

「なんで??」

ダメだこれは・・・

みんな浮かれて脳が正常に作用してないんだな

「いや、だから明日ってのはオカシいだろ？」

奈緒から笑顔が徐々に消え始め・・・
あ、このパターンは耳を塞がないとな

「あ・・明日　　！？」

ほら叫んだ

「気づくの遅すぎ」

「だってお姉ちゃん達と旅行に行けるのが嬉しくて・・・」

「明日　　！？」

今度は1階と窓越しで外から2人の叫び声が聞こえた

第17話（後書き）

いつも読んでくれている皆さんありがとうございます。【光】の前に「RAN&JUMP」を読んでもくださった方々には通じると思いますが、近日あの6人が登場します。お楽しみに。あ、新キャラもです

第18話

「着いたあ」

自分の荷物をもって空港から外に出て、最初に奈緒が元気よく発した言葉がコレだった

確かに着いたねえ・・・

福岡県に

昨日あの後、俺の部屋にもう1度全員集合させて話し合った結果・・・俺が代表で再度、薰ねえに電話することになった

つで電話してみると、1日だけ椎名家にお世話になり、後日に沖縄に行くというような予定だとわかり今日は福岡に訪れた

「兄貴。迎えの車ってまたアレ？」

「そつだろな」

「螢さん！迎えの車がきましたよ」

紫織ちゃんと言わなくても俺は気づいていた

なぜなら、その迎えの車は明らかに浮いていたから

「なげえ・・・」

優がそう呟くと同時にに車・・・いや白のジムジンが俺達の前に止まった

そして運転手が降りてきてお辞儀をしてきたため、慌ててお辞儀を
仕返す

「お荷物はもう1台がお運びいたします。ですので、その場に置い
たままで結構です。では、お乗りください」

とドアを開き、俺達が乗るのを待つ

何度もコレには乗ったことあんのに、この人達の態度には慣れない
なあ

「失礼します」

と誰もいない車内部に言って乗る

全員が乗るとドアは閉められ、運転手が乗って動き始めた

「なあここから・・・はや」

お前等寝るの早すぎだ
乗って間もないぞ？

「この2人寝るの早いですよね」寝てない紫織ちゃんは苦笑しながら2人を交互に指さす

「まあ朝早かったから仕方ないかな？」

「まあそうですね。螢さんは眠らなくてもいいんですか？」

「俺は」

大丈夫だよと言おうとして中断した
自分の肩を見ると奈緒の頭があった
なんか良い香りが……
はっ！

なにをしてるだ俺は！？

邪念よ消えされー！ー！！

「螢さん……」

ゾクッ！とした

紫織ちゃんの俺を呼ぶ声がいつもと違い、冷たく感じたから
てゆつか、むしろ殺気？

少し怯えながら紫織ちゃんに焦点を……

「すみません。迷惑な姉で」

「イヤイヤ全然大丈夫デスヨ！？」

敬語で早口、かつ片言になってしまった

それは紫織ちゃんが奈緒を見る眼が恐ろしかったから
なんて言うか……殺意に満ちた感じ

いかん何か話題を出さねば！

でないとこの空気から脱出できない

初めて紫織ちゃんに恐怖する俺は頭の回路がウマく作動せず、むしろショートしかけていた

「兄貴、あとのくらいかかりそう？」

マイ・ブラザーよ……

お袋の攻撃から守ってくれた時並みに兄は嬉しいぞ！
起きて俺に話しかけてきた優にホントに感謝です

「ああと1時間くらいじゃないかな！？ね、紫織ちゃん？」

「え？はい、多分それくらいだと思います」

急に話をふられて、驚きの表情を見せたが直ぐに返事をしてくれる
眼はいつものように戻っていた

「あ、そうだ。紫織、宿題でさあ」

優は持っていたハンドバックから宿題を取り出し、紫織ちゃんに質問をし始めた

「ふう……」

なんとか危機を脱した

まあ9割以上は優のおかげだけど

しかし理由はわからないにせよ、紫織ちゃんがあんな眼をするとは
驚いた

そしてビビったあ

冷や汗かきまくりだよ？

「うーん……」

頭をおく肩の場所が気に入らなかったのか不機嫌そうな声を出しながら、眠っているにも関わらず奈緒は少し体全体を動かし頭を俺の首あたりに近づけてきた

正直ドキッしました

そぉ〜と起こさない程度に首を動かし寝顔を覗き込む

それは『天使』という言葉が似合っていた

俺はつついっつい笑顔になる

が！それもつかの間で、また殺気を感じとった

恐る恐る首を90度曲げ・・・

ああ冷や汗が止まらないよ

紫織ちゃんは奈緒を（例の眼で）見ていたので目が合わなかったが、代わりに優と眼があった

『せっかく助け船だしてやったのに何やってんだよ？』

『は？俺何かしたか？てゆうかお前初めから起きてたのかよ！？』

『いや殺気を感じて起きた』

『ああ・・・なるほど。つで俺は何かしたか？』

『自分で考えるバカ兄貴。俺はもう寝る』

以上アイコンタクトでの会話でした

つてマジで寝るな！！

この状況を俺にどうしろと？

神様、俺何かしましたか？

教えてください

いや訂正します

助けてください！！

だがそんな都合よく神様が助けてくれるはずはなかった

第19話

夏だから汗をかくのは当たり前だが今の俺がかいている汗は熱さとは無関係なもの
通称『冷や汗』だ

1時間前

紫織ちゃんの態度に対する恐怖も段々と薄れつつあり、ドキドキワクワクといった感じになり始めている

外の風景を見る

この公園を右に回れば・・・見えた！

青色の屋根に白色の壁でできている家
その家の前でリムジンは止まった

「奈緒。着いたから起きな」

そう呼びかけながら左手で奈緒の頭を軽く揺さぶる
やがて不機嫌そうな声を出したながら目が開かれた

そして、なぜかフリーズした
あ、瞬間沸騰してるね

「奈緒」

「なななに！？」

「起きたのなら頭を退けてくれ」

ホントは退けて欲しくないけど……
いい加減その部分だけが痺れて痛いんですよ

「ううううめんー!」

慌てた様子ですぐに頭を離す

「ほら降りようぜ?」「え?着いたの!？」

「着いた。だからもう降りよう?」

「うん」

元気のいい返事をして奈緒と一緒に降りて、玄関前にいる優と紫織ちゃんと合流……

「螢君と奈緒ちゃん!元気だった!？」

相変わらずのハイテンションだなこの人は

玄関前には優と紫織ちゃんと薫姉がいた

「お姉ちゃん!久しぶり」

「薫姉久しぶり」

「みんな久しぶりだな」

家の中から声を出しながら1人の男が出てきた

「拓兄！久しぶりだね！」
優と被ってしまった

「お兄ちゃんこんにちは！」

下田姉妹も被ってしまったようだ

言うておくが、この夫婦の片方が俺の本当の兄だったり姉だったり
ってわけではない
また親戚でもない

下田姉妹も俺等同様だ

昔、俺が道路に飛び出して車にひかれそうになった時に偶々旅行で
訪れていた拓兄に助けられたんだ
つまりは命の恩人ってこと

「外は暑いだろ？2人とも早く上がりなよ」

「……は？2人？？」

今度は4人の声が見事にハモってしまった
拓兄はそんな俺達の反応を見て無表情になった
そして錆びたロボットのようにギギギと音がでるような感じで薫姉
の方を見る

「薫……お前まさか言っていないのか？」

「え？何を？？」

薫姉はキョトンとしている

それを見た拓兄はガツクリと肩を落として、溜息を吐く

「すまんコイツが説明してなかったみたいでさ……ってだいた
い薫が誰を泊めるか決めたんだろうが！！」

「え？それは拓也もでしょう？」

「いや……まあそうだけども、あれだけ言っつけよって注意したの
に」

「……ごめんなさい」

薫姉は俯きながら謝る

仕方ないなと言っつて拓兄はこちらを向く

アンタ相変わらず薫姉には甘いな

「はぁ……で説明するけどこの間台風がきたときに和室の窓が割れ
て大量の雨が入り込んで畳み部屋が使えなくなっただ。それで今
4人全員が泊まれるだけの部屋数がなくて半分はケンの家に行っ
てもらうことになってるんだ」

ケン兄のところに？

絶対にいやだ！！

アソコは行きたくない

「っで誰がこの家に泊まるの？私とお姉ちゃん？それとも螢さん達？」

紫織ちゃんが核心に迫った

そして我思う・・・俺はこの家がいい！！
なぜなら、ケン兄の家には閻魔大王がいるからさ！！

「えつと実は」

薫姉が申し訳なさそうな顔をする
マズい・・・

俺を見ている「俺と優は地獄行き
なんて簡単な公式なのでしょか？
畜生・・・

「螢君と奈緒ちゃんの2人なの」

「「「「・・・。」」」」」

沈黙

「「「はあ?!」」」

優以外の俺を含む3人が叫んだ

「え、えへ」

笑って誤魔化すな

「『えへ』 じゃない。とにかくそう言うことになってるから」

「なってるからって……」

奈緒に視線を移すと溜息を吐いていた
そら吐きたくなるわな

「ちなみに2人には同じ部屋に泊まってもらうからな」

空気が凍ったのがわかった

ってなわけで、

今晚泊まる部屋に奈緒と荷物を置きに来ただけど……

「……………」

非常に気まずい!!

あの後、必死で椎名夫妻に反論したもののアツサリと却下され優と
紫織ちゃんとは地獄に送られた
優は仕方ないと言って再びリムジンに乗っていたのに対して紫織は

やんは最後まで駄々をコネていた
まあ結局、強制送還されたけどね

「2人とも早く降りてきてね」

下から薫姉の呼ぶ声がした

「い、行こっか？」

「そ、そうだね」

うまく笑顔を作れない自分を心底ダメに思う

第20話

気まずい空気を周囲に纏ったまま階段を1段ずつ降りて行きリビングに足を踏み入れた。

拓兄と薫姉はソファーに並んで座りテレビを見ていた。

「はあ……。。」

隣で奈緒がため息を吐いた。

前方ではほのぼの。

こちらではピリピリともモヤモヤとも違った空気が……。

「あ……。。」

何かに気づいた奈緒は横にある幾つかの写真立ての中から1つを手にとった。

気になった俺は後ろからのぞき込む。

「懐かしい……。何年前だっけ？」

「8年前だよ。」

「俺ちっせえ……。。」

「そりゃ小学4年生だもん。」

写真に写っていたのはタキシードを着た拓兄、ウエディングドレスを身に纏った薫姉と当時4年生だった俺と奈緒だった。

「10歳の俺って何してたっけ？」

「号泣。」おい固羅

「身に覚えがありませんけど？」

「いや確かに号泣してたよ？お兄ちゃん、螢が」

「してたしてた」

拓兄が奈緒の声を遮りながら同意をする。

アンタ盗み聞きしてたな？

「何時したよ!？」

「俺が実家に帰るって言ったときに泣きながら『いやだ!』を連呼してただろ？」

「ぐっ!」

反論できたない……。

確かに怪我が完治して、試合でも負けたがら家に帰るって言われたときに拓兄が居なくなるのが嫌で泣いたな。

ふと隣に目をやると奈緒と薫姉が写真を見ながらヒートアップしていた。

「この時のウエディングドレス素敵だったよ。」

「でしょ？これはね」

「ストップ！！」

拓兄が薫姉の口を後ろから両手で押さえた。
ものすごい焦ったような形相で……。

「お姉ちゃん？」

拓兄は薫姉の体を反転させ必死に眼で何かを伝えている。
ウエディングドレスで知られたくない事でもあるのかな？

「奈緒ちゃん、また今度話すね。」

と言って奈緒に向けてウィンクする。

「ええ……わかった」

なぜに上機嫌になる？

「そっいえば拓兄と薫姉って高校3年で結婚したんだっけ？」
「うん」

「いいなあ……私も早く結婚したいな……。」

ドキリとした。

奈緒は誰と結婚したいと思っているんだ？

「相手はもちろん螢だろ？」

拓兄の発言は俺だけでなく奈緒をも固まらせた。

「えっと・・・何故そうなるのですか？」

俺の問いかけに薫姉は笑顔で答えてくれた。

「昔、瞳の別荘いた時に言ってたじゃない。」

隣では奈緒が顔を真っ赤にさせて突っ立っていた。

だが俺は1人顔を強ばらせていた。

その当時の記憶は幼い頃にしてはよく覚えている。
いや・・・・・・・・。。。

忘れてはいけないんだ。

俺の不注意で拓兄は1度夢を諦めたてしまったのだから……。

幼かった俺は両手に抱えていたバスケットボールをうっかり落とし、慌てて拾おうと道路に飛び出した。偶々その場に居合わせた拓兄が俺をかばって車に引かれた。その時後ろから奈緒が『危ない!』と叫んだことを覚えている。

俺をかばった拓兄は意識不明の重体だった。母さんが俺を抱きしめ奈緒は隣で泣いていた。

俺はその5メートル離れたところで泣いている薫姉の顔を一生忘れない。

必死だったであろう、あの顔を……。

拓兄の意識が戻ったのを知った俺は病室に訪れて謝った。
そんな俺を拓兄は笑顔で許してくれた。

そしてその数日後、別荘に訪れた時に拓兄にとって【大切なもの】である赤のリストバンドを俺にくれたんだ。

あの時はただ単に俺がバスケットを好きだからくれたと言った拓兄の言葉は年が経つにつれ重みを増していった。

よくよく考えてみれば、あの時2度とバスケットができなくなっていた拓兄は俺に夢を引き継がせたんじゃないかな？

自分の代わりに・・・と。

「おゝい螢？」

「え？」

気がつくとも3人とも心配そうな目で俺を見ていた。

「あ・・・何の話をしてたんだっけ？」

俺の発言に奈緒が瞬間沸騰した。

なぜに？

「だから・・・。」

「だから？」

「薫が螢に奈緒が好き？って聞いたらお前『結婚する』って言ったじゃん。」

「は？」

脳内メモリーにそのような記憶入っていませんよ？

「覚えてないの？」

頷く俺に薫姉は驚いた様子で俺を見たのちに奈緒を見て『あっ』と言った。

それは拓兄も同じだった。

その『あっ』ってなに？

「最低……」

この鳥肌が立つ感じは……？
ゆっくりと首を90度回転する。

「もう1度言ってあげようか？」

そう言い微笑む奈緒から怒っていると瞬時に悟った。
しかもかなりキてますね。

「遠慮し」

「最低!!」

耳が痛くなるほどデカい声で俺を最低と罵る。

「覚えてないことは仕方ないだろ？」

俺の発言がさらに奈緒を逆上させてしまったようだ。
まさに鬼の形相。

「私の思い出返してよ！」

「は？」

「だから！」

「はいストップ」

拓兄が俺等の間に割ってはいる。

「近所迷惑だからヤメろ。」

《プルルルルル》

家の電話がなり薫姉がすばやく手に取る。

「もしもし？……………え？時間なら……………うん……………イ
ヤでもちよつと……………そうだけど……………わかった。」

きれた電話を薫姉は元の場所に戻しこちらを見てきた。
申し訳なさそうにして。

「薫、誰から？」

「瞳からで……………」

「瞳？なんて？」

「それが……。」

メチャメチャ嫌な予感が……。

「肝試しするから8時に神社の前に集合だつて。」

泣きそうな顔で薫姉はそう告げてきた。

てゆうか肝試し？

余裕……何だとけど瞳姉の発案なのならば不安です。

「ちなみに瞳の発案。」

薫姉は俺の心の声が聞こえているのか？

「せいぜい泣かないようにね？」

にやろ……。

あからさまに奈緒が挑発してきやがった。

「その言葉そつくりそのまま返す。」

「返品はできません。」

「まあせいぜい泣くなよ？」

「螢じゃあるまいし。」

自分の中の何かがキレた音がした。

「よく言っぜ。中学生の時にクラスで唯一、夜の校内での肝試しで泣いたくせに。」

「誰の話？自分かな？」

「もと西中3年2組出席番号7番の下田奈緒さんの話ですけど？」

「そんな事言うんだ？だったら中学の1年の時にあった体育祭でのクラスリレーのアンカーで最後の最後に抜かれて負けたのは誰だっけ？」

うっ！

思い出したくないことをよくも！

「・・・その後にあったブロック対抗のダンスで盛大に転けて恥ずかしい思いしたのは誰だっけ？」

ふ・・・どうだ？

「いい加減にしないと家から追い出すぞ？」

「だって奈緒が」

「言い訳は聞かない。わかったのなら仲直りしろ。」

「・・・わかった、すいませんでした」

謝ってはいるものの言い方は嫌みたっぷりだった。

「私こそすいませんでした。」

それは奈緒も同じだ。

今、冷戦が開戦した。

第20話（後書き）

次回とうとうケン達4人が登場します。たぶん・・・

第21話

「拓也、薰！こっち。」

寺の前には椎名夫婦を呼びながら手を振ってくる閻魔大王……瞳姉達がいた。

近づく瞳姉の夫であるケン兄が俺を見て不思議そうな顔をしていた。

「久しぶり……夫婦喧嘩でもしてるのかな？」

「誰が夫婦だ！？」

重なる叫び声が怒り混じりであることに全員が気づいた。

「螢達。」

元希さんは落ち着きのある声で俺達を指さしてきた。

ちなみに、その落ち着きのある雰囲気から特別に『さん』づけだ。

「誰がこんなヤツと。」

「はいヤメヤメー！」

少し落ち着きなさいと言って瞳姉は俺を睨む。

こわい……。

暗に『謝れ』と言いたいんだろうか？

「すみませんでした。」

「よろしい。じゃあ行くわよ?」

「はあい」

あれ?

「桜姉いたの?」

「ちょっと久しぶりに会ったのにそれは酷いわよ!?」

「兄貴たしかに今は酷いぞ?」

「そつだそつだ!もっと言ってやれい」

ちっ!

ウルサイ。

「いくら桜姉が珍しく静かだったからって気づかないなんて酷すぎる。」

そう言うお前の言葉も酷すぎるぞ?

あ、ニヤツいてるって事はワザトなんだな。

「そつだそつ……は?」

そして、この人は気づくの遅いな……。まあ反応が面白いんだけど……って元希さんから殺気が……。

「ほら早く行くわよ!？」

瞳姉の眼は元希さんの殺気を上回った。

「「「「「「「はい。「「「「「「「

皆さんコノ眼には逆らえないんだよね・・・。

「っで？これは何だ？」

拓兄の質問は

「「「「「「「以下同文。「「「「「「「

真田夫婦以外の全員が思ったことだった。

「何って看板よ？」

「瞳姉さんだつてここお寺だよ？」

「だから？」

「Welcomeって看板はおかしいって事!！」

「桜姉が珍しく正論を言ったね。」

「あ、それ俺も思った。」

さすが兄弟。

思ったことは一緒か。

そんな事を考えている俺の隣にケン兄が近づいてきた。

「奈緒となんで喧嘩したのかな？」

「……………」

「まあ早く仲直りしとかないと後悔するよ?」

俺は目をパチクリさせた。

「後悔?なんで?」

「人は時として悪魔になるんだよ。」

ケン兄の視線の先には瞳姉がいる。

どう言うことだろ?

「ほらルール話すから全員集合して!」

「今いく。」

ケン兄に続いて俺も近寄っていく。

途中奈緒と視線があつたがお互いにすぐに逸らした。

「じゃ話すわね」

上機嫌ですね……。

「ここから離れた所に石段があるわ。その石段を登りきつたら鳥居があつてその前にテーブルを置いてあるの。っでテーブルの上に蠟燭ろうそくがあるからこの提灯の中の蠟燭に移して帰ってくる。簡単でしょ？」

「わかった。誰から行く？」

元希さんもしかして早く帰りたいのか？
まさか怖いのか？

「まあまあ慌てない。まず皆この割り箸を1人1本引いて。」

瞳姉が再度あの眼で見えたため、全員無言で割り箸を引く。

「色が付いてるでしょ？同じ色の」

「暗くて色が分かりません。」

今は夜だよ？

色の識別なんて無理だつて。

「携帯の光で確認しなさい。」

命令形ですね。

まあ皆従うんだけど……。

《カチ……》

周りから見れば変な光景なんだろうな……。
寺の入り口付近でこんなことするのは。

「皆わかった？まず青の人は誰？」

「僕だよ」

「あ、俺だ。」

「じゃあ1組目は健太と拓也ね、次緑！」

緑は薫姉と桜姉、紫は優と紫織ちゃんだった。

優良かったな……と普通なら小声またはアイコンタクトで伝えるんだけど、この状況では言えない。

あと残るのは俺、瞳姉に元希さんと……喧嘩中の奈緒。
元希さんを希望します。

何故かって？

瞳姉みたいに俺に危害を与えないからだ。

あと喧嘩している奈緒は論外だ。

「次は赤。」

「俺……です。」

果たしてパートナーは誰！？

第22話

肝試し。

それは文字通りであって、たいてい怖がる人、怖がらない人と別れる。

だが俺のパートナーはどちらでもない。

「ふっ！」

「ぐふ！？」

ああ・・・またお化けに変装した人が地面に倒れた。

コレで何人目だろ？

「よし、次。」

「ちょっと元希さん！『よし』じゃないですよ！！何で変装した人が俺達を脅かそうと現れる度に鎮めるのですか？！」

そう俺と同じく赤色であったのは元希さんだったのだ。

そして、

いざ石段を目指し歩き出してから数分、瞳姉の家で働く使用人達所々で俺と元希さんを脅かそうと『がああ！！』やら何やら声を上げ近づいてくるのだが。

「バアアア！！」

「出たか・・・。」

元希さんは近づいてきたゾンビの格好をした使用人（肝試しに何故ゾンビ？）に先程までと同じくマジで鳩尾に右ストレートを決める。

「ばは?!」

ゾンビは崩れるように地面に倒れる。

俺にはその瞬間がスローモーションで目に映る。

「ふっふっふ……次。」

不気味に笑う元希さんは楽しそうだが、俺はその声と笑みを見てゾツとした。

ああ、また林から走って近づいてくる音が聞こえる。
可哀想に。

「ハハハハ!」

笑いながら近づいてくるお化けは笑った顔のまま気を失った。
元希さんの拳によって。

違う……。

俺の知っている肝試しはこんなモノではない。

お化けを鎮めるなんて……。

だいたい何で味方相手に肝を冷やさなければならぬ？

「さあ出てこい。」

これは流石にお化け達が可哀想でたまらん。

ズンズンと先に進む元希さんと少し距離をとって歩く。
そしてその距離を保ちながら瞳姉に電話をかける

「もゝしもゝし？」

「瞳姉？あのさあ。」

「もしかして元希が暴走してるの？」

何故わかったのかはこの際どうでもいい。
むしろ助かる。

「そうなんだよ。どうにかして。」

10メートル先では丁度ろくろ首が氣を失ったところだった。

「は？イヤよ。これはアンタへの罰なんだから。」

は？

罰？？？

「罰って何の？」

「奈緒と喧嘩していたお陰で場の空気がピリピリしてたから、その罰よ」

この時になってようやくケン兄の言ってた意味が分かった。

時としてだつて？

アンタの奥さん年から年中悪魔だよ！！

「あつそう言えば先程から奈緒とハグレて困ってるんだよね。誰か一緒に捜してくれないかなあ？」

いやいやアンタ、俺のSOSは無視ですか？

「さつきハグレたのならすぐ近くにいますでしょ？」

「それがイナイのよね。アハハ」

「笑うところではないよ？むしろ笑えない状況だよね？」

「そうなんだよね……捜す、捜さないは君次第って事で夜露死苦 じゃあね」

「ちよつ！？」

《プー……プー》

電話が切れる前に言いたかった……。

いくら何でも夜露死苦は古いよってね。

だいたい高校生になって迷子だ？

アホくさ。

第一に何で喧嘩している迷子ちゃんを俺が捜さねばならん？

そう思ったのに・・・

「・・・・・・・・ああ畜生！！」

叫んでいた時にはすでに俺は走り出していた。

奈緒が迷子？

捜すか捜さないは俺次第だって？

捜すに決まってるだろうが！！

「奈緒！どこだあ！？」

だいたい先程から奈緒の微笑む姿がフラッシュバックを繰り返して

いて頭から離れない。

それに・・・好きな人が慣れない土地で迷子になっていて放って置けるわけがないだろうが!?

「おゝい！奈緒!？」

名前を叫びながらがむしゃらに走る。

ただただ迷子のお姫様を見つけるために。

螢が狼男にコブラツイストをかけている俺の横を走り過ぎていった数秒経ってから携帯を取り出し耳に当てる。

「もしもし？作戦成功？」

電話先からは上機嫌の瞳が声を上げる。

「大成功と言っても過言ではない。」

「じゃ次はアンタの番だからね？よろしくね元希。」

「おう。」さて第一段階成功
次は

「もしもし奈緒？非常に言い辛いのだが実は」

さてどう転ぶか・・・。

楽しみだな。

電話を切ってからニヤツく俺がいた。

「ふふふ」

まさか計画通りにすべて事が進むとは思わなかった。

奈緒はさつき真剣な顔つきで私の隣を走り去っていったから元希のヤツ上手くやったんだろっな。

とにかく後は本人たち次第だ。

こっから先はもう手助けはしない。

ただ上手く行かなければキレちゃうけど

まあどう転ぶか楽しみだね。

第23話

奈緒の搜索を始めてから10分経ったが未だ見つけられずにいた。

「おい奈緒！」

叫べども叫べども返事はなく木が揺れ葉の擦れあう音だけが聞こえてくる。

「ああー！くそ・・・！」

1人嘆いても見つかる訳じゃあない。
嘆く暇があれば探さんか！
と死んだ爺さんが言ってる声がした。

「ったく。」

愚痴りながらも再び走り始めたが体に異常を感じた。

「なん・・・だ・？」

こんな感覚初めてだ。
体が重い。

視界が歪む。

なんだよコレは！？

そう思った時には地面に倒れていた。

「うつ・・・く。」

必死に体を動かそうとするが全く言うことを聞かない。

脳からの指令は途中で何かによって遮られてでもいるのだろうか？
周りの風景は徐々に見えなくなっている。

いや違う。

瞼が俺の意志とは関係なく閉じられているんだ。

「・・・る・・・たる！？どう・・・の・・・。」

すぐ目の前で誰かが叫んでいるのが辛うじて分かり何とか少しだけ
瞼を開く。

目に映ったのは必死な顔で何か叫んでいる・・・。

「な・・・お。」

そこで俺の意識は途切れた。

「う・・・う・・・ん？」

目を開くと見知らぬ世界だった。

わけではなく見知らぬ部屋で白いベッドの上にいた。

「ここは・・・病室?？」

白い天井に白い壁、そして白いベッド。
間違いなく病室だ。

ってアレ??

俺どうしたんだっけ?

ここで俺は右手の自由が奪われていることに気づいた。
サッと首を曲げ見てみるとベッドに頭だけをのせてイスに座っている奈緒がいた。

眠っているにも関わらずしっかりと俺の右手を両手で握っているけどね。

訳の分からない事ばかりで完全に脳がノックアウト状態の中、病室のドアが開かれ見知った人が入ってきた。

「おはよう。目が覚めたみたいだね」

「ケン兄?! って事はもしかして此処」

「お察しの通り真田病院の一室だよ。」

「・・・何で??」

「まず奈緒を起こそうか?」

「・・・わかった。」

左手で奈緒の肩を揺らす。

数秒後に不機嫌そうな声を上げて奈緒は目を覚ました。

「おはよう。」

時計は12時を回ってるけど……。
ん？

「奈緒？」

なぜ俺を見て固まってるのですか??

「奈緒も起きたことだから説明するね？」

ケン兄タイミング良いな……。

「螢が倒れた原因は……。」

「……。」

「……。」

「……?？」

「……。」

「?????？」

「……。」

「！」

おいコラ。

「勿体ぶるな!!」

「あはは、ゴメンゴメン 原因はね疲労だよ。」

「疲労??」

「うん、少し休みが必要だよ。今日はもうタクの家に帰って何もせずに体を休めること。いいね?」

うつ・・・。

目が怖い。

「はあい。つで?お前はいつまで固まっているつもりなんだ?」

「え?いや・・・その。」

だから何だよ!?

「だって君達は喧嘩の真っ最中なんだろう?」

ニヤリと笑うケン兄の笑い方は奥さんそっくりだ。
ってそう言えばそうだったけ?

奈緒と喧嘩してたなあ・・・。

「でも奈緒に感謝しなよ？ 偶々近くにいた奈緒がすばやく僕達に連絡してくれたから重い症状に成らずにすんだのだからね。しかも夜中遅くまでずっと螢に付き添っていてくれたんだよ。手をつないだ状態で」

言われて気づいた。

未だに奈緒は俺の手を握っていた。

「あわわわわ！」

今離れました。
少し残念。

「じゃ椎名家まで送るからついてきて。」

ケン兄について行くためにベッドから立ち上がろうとしたが体思うように作用せず、バランスを崩す。

「危ない！」

が奈緒によって地面とのキスから守られた。
危ない……。か。

昔の事故を一瞬で思い出した。

あの時も奈緒が叫んでいたなあ。

「奈緒。」

「うん？」

なんとか自分の力で床の上に立つ。

「ありがとう。」

俺の感謝の思いは

「どういたしまして。」

微笑む奈緒を見て伝わったんだとわかった

あ！

「お前迷子に」

「その話は体の調子が戻ったときにね。」

「なんで？」

「何でも！」

疑問に思いながらも下で待つケン兄のもとへと歩き出した。

第24話

送ってくれたケン兄に礼を言ってから（タク兄の）家に入った。

「「ただいま。」」

「おかえり。」

中に入ると薫姉が笑顔で迎えてくれた。

「お風呂いれてあるから入って。もちろん上がったらベッドで大人しく寝ること。」

「はあい。」

なんかお爺ちゃんになった気分だ。

螢がお風呂に行くのを見送って完全に姿が見えなくなってから、ついため息を吐いてしまった。

「ため息つくと幸せが逃げるぞ？」

リビングで食事を摂っているお兄ちゃんが私にそんな事を言ってきた。

「だって……。」

「まあ好きな人が倒れたのだから心配でたまらないか？」

「そうだよな。好きな人が倒れたりしたら心配で心配で居ても立つてもいられないもんねえ？」

好きな人を強調するあたり、冷やかしとしか思えない言い方だ。

「うん……。」

でも私は首を立てに動かす。
この2人は知っているのだ。
私が螢が好きであることを。

「2・3日安静にしていれば体の重みも消えるってケンが言っていたから大丈夫。アイツただの優男に見えるけど医師としての腕は確かだから安心しな。」

「うん……。」

それでも私の気は晴れずにいた。

30分としない内に螢はお風呂から上がってすぐさま今日泊まる部屋に移動した。

私はと言つとやることなくてお姉ちゃんから小説を借りて読み始めたが、

「……………」

2階に居る螢が気になって集中できずにいた
半分程読んだ（内容は頭に入っていない）ところでお兄ちゃんに言

われて螢にお茶を持って行くことになった。

《コンコン》 念のためノックをするが返事はない

《キィ・・・》

扉を開き中に入ると眠っている螢が目の前にいた。
彼の寝顔は前に風邪を引いた時に見て以来だ。

持ってきたコップを近くにある小テーブルの上に置き、螢に近づく。

「螢・・・。」

寝ている螢に呼びかけるが当たり前のように返事はない。
私はそつと彼の頭を撫でる。
癖のない真っ直ぐな黒い髪。
前に螢が風邪を引いた時にもやったっけ？

「奈緒。」

「え？」

いきなり螢が私の名前を呼び、驚いたが彼はまだ眠っていた。
だが私はまた彼に驚かされた。

「なん・・・で？」

なんで泣いているの？

その涙は・・・

その涙は何故、流れているの？

悲しくて？

嬉しくて？

「奈緒！！」

次の瞬間、彼は・・・螢は私の名前を叫びながら上半身起こした。

「ハアハア・・・夢？」

螢は私が居ることに気づいてはいないようだった。

「螢？」

私が声を出すと、驚いたのか体をビクツとさせた。
そしてゆっくりとした動作でこちらを見てきた。

「奈緒？アレ？？俺は？」

パニック状態の彼を私は初めて見る。

だが直ぐに彼がどんな夢を見たのか知りたくなった。

「さっきまで寝ていた。ねえ・・・どんな夢を見たのか教えて。」

一瞬のうちに螢は固まった。

がそれもつかの間で笑顔で私を見てきた。

「夢なんて見てないぞ？」

嘘だ・・・。

その仕草はアナタが嘘つくときのものなんだよ？
だから私には嘘だとわかる。

「嘘なんて格好悪いよ？」

またまた彼は固まった。

そして重みのあるため息を吐く。

「悪夢。」

「どんな？」

「・・・。。」

「ねえ？」

「言いたくない。」

そう言い残し彼はまた眠る体制をとったが私の追求はまだ終わらない。

鬱陶しいかもしれない。

でも私はあの涙の訳を知りたいんだ・・・。

「私が夢にでたんだよね？」

再度彼は上半身を起こし私を見てきた。
驚きの表情で。

「なんで知って・・・あ。」

「なんでって・・・私の名前を叫びながら目を覚ましたじゃん。」

「・・・マジで？」

「大マジで。」

大をつけた事は気にしないでください。
とくに意味はないから。

「はあ・・・実は」

彼が夢の内容を明かそうとした時だった。
扉が勢いよく開かれたのは。

「螢さん大丈夫ですか!？」

またアンタ!？

勘弁してよ・・・。

結局その日は紫織と（キレイ気味の）優君の乱入のおかげで話を聞けず
に終わりを迎えたつあった。

第25話

「もう一度お聞かせ願います。」

重なる俺と奈緒の声に優は立ち上がりつつも応える。

「だから明日から俺と紫織と真田夫婦と田中夫婦で沖縄に行ってくるって言ったんです。」

「うつそ　！？」

「ええ！？」

言葉は違えど、驚いていることには変わらない俺達2人の態度に優は微笑みながら言ってきた。

「瞳姉には逆らえません。」

「うつ・・・そうだね。」

「それに私が残るって言ったら『却下！』『却下！』の2文字でダメになったの。」

「ってなわけで、ほぼ強制的に沖縄行きが決まった。」

「ちょっと待て！タク兄達は何で行かない？」

「タク兄達は兄貴の面倒見るから行かないって。」

「うぐっ！」

俺が原因なわけですね？

「な奈緒はどうして？」

「タク兄によりますと『螢には話し相手が必要だろ？』とのことです。」

俺を老人扱いしてるのは気のせいですか？

「それに奈緒さん明日沖縄に行っても心から楽しめないっしょ？瞳姉は行きたいなら行っても良いと言ってるけど、どうします？」

言ってる意味が分からない。

「うん、私は行かない。」

「え？！行つてこいよ！」

そんな俺が原因で行けなくなるなんて・・・最悪じゃんよ。

「だって優君の言うとおり向こうに行つても螢が心配で楽しめないと思う。」

それ言われちゃうと俺としても困る・・・。
気持ちは嬉しいけど・・・。

「でも。」

「残るって言ったら残るの！ーわかった？！」

「はい……。」

女に氣迫負けしてしまうってどうよ？

まあ病人（？）だし仕方ないか。

「じゃあ優君、瞳姉さんによろしく伝えといて。」

「了解です。じゃ下にもう迎えが来てるはずだから帰ります。兄貴。

」

「なんだよ？」

「楽しんでくるから」

嬉しそくだなオイ。

なら、お兄ちゃんが地獄に落としてあげる

「海で泳ぐときは氣をつけなよ？」

「沖縄に鮫なんてでないから大丈夫。」

「鮫より恐ろしい人がいるじゃんよ？」

「……あ。」

ふっ……。

氣づいたようだな。

去年と一昨年は俺が酷い目にあつたが今年は間違いなくお前の番だ。

「俺やつぱり残」

「瞳姉には逆らえない、だろ？紫織ちゃん、優が廃人にならないよう世話してあげてね。」「え、はい」

優が俺とアイコンタクトをしようとしてるが無視だ無視。

「迎えの車待たせたら悪いから早く行きな。」

「はい。あ、絶対にお土産買ってきますね！」

「ありがとう。優。」

静かにドアから出て行こうとする優を呼び止める。

「楽しんでこい」

トドメの一発に優は何か反論しようとしたが止めて空気のように去っていった。

「廃人は言い過ぎたかな？」

「そうでもないと思う。」

「そっか。」

「うん。」

瞳姉って怖い時はホントに怖いからな……。

去年だって、

みんなで楽しくスキーしてたのに俺を・・・俺を・・・
思い出しただけで震えが・・・。
うん、思い出すのは止めにしよう。

「奈緒ちゃん！下にきて！」

階段したから薫姉が奈緒を呼ぶ。

「はあい！ちょっと行ってくるね。」

「いつてらっしゃい。」

部屋を出ていく奈緒を見送って数分で奈緒は部屋に戻ってきた。

「ご飯だよ、お爺ちゃん。」

「すまんのう。」

「良いのよ、お爺ちゃん。もう年なんだから。」

「そうじゃのう・・・っで？何故2人分ある？」

「お爺ちゃんの分と私の分」

ツツコムにも体力を使うため今回はツツコまないでおく。

「そうですか。じゃいただきます。」

「いただきます。」

さすがに薫姉。

このハンバーグ美味すぎ。

どうしたら、この味をだせるんだ？

「美味しい……。」

「スゴいよな……。」

「だろ？薫の料理は天下一だからな。」

「そそんな事ないよ!？」

ちよつと待てえい!!

これはツツコマせてもらおうじゃないか!

「あんたら音も立てず何時きた!？しかもメシ持ってきたのかよ!？」

「まあまあ落ち着け。飯は皆で食べた方が美味しいんだぞ?」

「そうだよ 皆で食べた方が美味しいよ?」

この似たもの夫婦が……。

俺のツツコマを軽く流しやがって……。

でも心のどこかで喜びの声を上げている自分が居るのも確かだ。

「そうだね。」

「それではもう一度・・・。」

もう一度？

ああ・・・。

「「「いただきます。」
「「「」

第26話

晩御飯を美味しくいただき4人で雑談していたが、薫姉が途中で意識が飛び始めていたようなのでお開きとなった。
俺も奈緒も、この家に帰ってから、すぐ風呂に入ったため何時でも寝れる状態だ。

「……………」

お休みとお互いに言い合って背中を向け、布団に入ったのだが、なかなか寝れない。
って後ろからは寝息が聞こえないって事は……？

「ねえ……寝たの？」

やはり起きてたか。

「いや、起きてる。」

そりゃ寝ずらいわ。

2メートルと離れていない所には好きな人がいるのですよ？
意識しちゃって寝れません。

「さっきの続きで聞きたいんだけど……………」

「さっき??」

「うん。どんな夢をみたのか教えて。」

「……イヤだと言ったら？」

アレが夢で良かったと思う。

だってもしも夢じゃなかったら俺は

「それでも教えて！だって。」

「？」

だって何？

体を奈緒が見えるように反転させると目があった。

暗くて表情は読みとれないがなんとなく奈緒が悲しそうな顔をしている気がした。

「だって螢泣いてたんだもん。知りたいよ？その……何で泣いたかを。」

泣いて……。

は？

泣いてた！？

我が輩が！??

「泣いてたって・・・嘘だろ？な？」

今ムツとした顔になった気がする。

雲に隠れていた月が姿を表してくれたおかげで奈緒の顔がハッキリと目に映る。

うん、やっぱりムツとしてる。

「ホントだもん。泣いてたもん。」

もんってガキみたいな言い方だな。

「・・・ホントに知りたい？」

「うん。」

即答かよ！

「はぁ・・・わかった、話す。その代わりヒくなよ？」

ヒくなよの意味が理解できなかったらしくキョトンとしている。

「聞いてますか？」

「え、うんヒかない・・・よ？」

何で最後に疑問符をつけるかなあ？
ったく……。

「初めに言っておくぞ？今から話すのマジで夢の内容だからな！！
真に受けんなよ？わかったのなら誓いなさい！」

「はい、誓います。」

うむ、よろしい。

他に言うことは……ないか。

「っで？早く教えてよ」

少し待てよ……。
はあ……。

「大切な人が消えた。」

「え？」

「え？じゃない。だから、大切な人が目の前で消えたわけ、わかる？
？しかも泣きながら『今までありがとう』って言って消えた。俺の側から居なくなるのがイヤだったからさ……『待てよ』って言うおうとしたら……声が出ない。だから止めようとして消えかかっている体に触れようとしたわけ。でもすり抜けやがった。俺諦め悪いから何度も何度も必死になつて腕を掴もうと、抱きしめようとしてた。でも結局全てすり抜けた。悪夢だよアレは。」

本当に悪夢だった。

声を出したくても出ない。
触りたくても触れない。

でもって夢の最期に『今までありがとう』って言われて俺は声が出ないのに名前を連呼していた。

そして声の代わりに涙が出てきた。

あの悪夢は本当にリアルで俺の今恐れていることだった。

「大切な人って誰？」

ヒドく動揺した感じで俺に尋ねてきた。

「名前……聞いたんだろ？」

俺は少し恥ずかしくなつて体の向きを反転させまた背中を向けた。

「あ……。」

気づい

え？

「ちよつ……奈緒?!」

「今日だけ……お願いだから。」

「おい何故そうなる!？」

「螢を悲しめたお詫び。」

「はあああああ?!」

だからって何で俺の寝ているベッドに入ってきたうえに、ガツチリとホールドしているわけですか!?

お爺ちゃんビックリして三途の川辺りにぶっ飛んじゃうよ!???

「それに今日だけは私がこうしていたいの。」

してたいで済むか!

って俺の理性にも多少我慢の限界が……。

「あのなあ……。」

うっ!

体動かせない。

タク兄に見られたらヤバいつて!!?

「すう……すう。」

寝息?!

アンタ寝たんかい!!

しかもガツチリとホールドしたまんまで。

「私は……消えない……もん。」

え?

「奈緒？」

「すう．．．すう」

寝言？？

全く．．．。

「言ってくれんじゃん。」

声を押し殺しながら少しの間だけ笑い、瞼を下ろした。

アレが夢で良かったと思う。

だってもしも夢じゃなかったら俺は淋しくて．．．

悔しくて．．

悲しくて．．

泣いて泣いて．．．体の水分がなくなるまで泣いてカラッカラになっ
て．．．

最終的には跡を追っていたと思う。

それ程に奈緒の存在は俺の中で大きい。

なあ．．．奈緒。

俺さ．．．

近々決着をつけたいと考えているんだ。

結果はどうだって良いって言ったら、そりゃ嘘になる。

でも俺の奈緒を想う気持ち知ってほしいんだ。

だから、その時は正直なお前の気持ちも聞かせてほしいな・・・。

ああゝあ。

心の中では何度だって言えるのになかなか口に出しては言えないもんだな。

たったの2文字なのに・・・。

第27話

「朝・・・。」

昨夜、彼の腹筋あたりに回した手はそのままの状態だった。

昨日聞いた螢の夢。

彼は悪夢だと言った。

大切な人が消える夢。

その大切な人とは私だと言ってくれた。

彼が私に特別な感情を持って言ったものではないにしても、彼の中で私は『大切な人』になっている。

ただ其れだけで舞い上がり、ドキドキしながらも彼に抱きついたりぎざ抱きついてみると体全体が安心感に包まれた。
だから直ぐに眠ってしまったのであって・・・。

「おはよう。」

まだ眠っている彼に挨拶をして部屋を後にする。

リビングに入るとお姉ちゃんは既に起きていて朝食の準備をしていた。

「お姉ちゃん、おはよう。」

「おはよう　ふふふ。」

挨拶したら笑われた。

私の顔に何か着いてるとか？に何か着いてるとか？「奈緒ちゃんは

分かりやすいね。昨日あの後なにか良いことがあったんでしょ？」

「何で分かったの？」

驚く私を見てまたお姉ちゃんはクスクスと笑う。

「顔に書いてるよ？昨日良いことがありましたって。」

「うつ・・・。」

そう言えば前に螢に言われたなあ。

お前は感情が顔にでやすから気をつけろって。
自分では分からないのに・・・。

「螢君に好き！って言われたのかな？」

そうだったら、どれだけ嬉しいことやら。

「うつん、違うよ。それに秘密。」

でも私の上機嫌には変わらない。

「秘密かあゝ残念だなあ・・・。あ、そうだ昨日のウェディングドレスの話なんだけど聞きたい？まだ拓也寝てるから今のうちなら教えてあげれるよ？」

お姉ちゃんが食器を運びだしたので私は手伝いながら話を聞くことにした。

「うん、聞きたい。」

「じゃ聞かせてあげる。私達が光輝学園第一の出身だって知ってるよね？」

「うん。」

因みに私達は光輝学園第二に通っている。

「っでクリスマスパーティーで学園内のベストカップルのコンテストがあつたの。」

「あ、それ第二でもあるよ。」

去年は見てる側だったけど今年は螢と出たいなあと思っちゃったりしてる。

まあその前に告白だよね……。

「そつなの！？螢君と出てみたら？」

「私達の話はイイから続き聞かせて。」

「はあい。ええと……それで瞳が勝手に私達を参加希望にしちゃつたの。っで私は最初出たくなかつたんだけど、だんだんとヤッパリ出てみたいと思って出場したのね。」

「うんうん。それで？」

まさかと思うけど……。

でも、この夫婦ならあり得る。」

「ベストカップルの投票数1位に選ばれちゃったの。」

やはり……。

さすが美男美女のベストカップル。
私の憧れの人達。

「その賞品がドレスとスーツだったの。」

「凄いなあ1位に選ばれるなんて……。」

「因みに2位は真田夫婦で3位は田中夫婦だったよ。」

「へ？」

それって凄すぎ……。

確かに皆さん美形だもんね。

「奈緒ちゃんも今年は螢君と一緒に出場してみたら？」

また、それですか……。

私だって出たいよ？
でも……。

「無理だよ……付き合ってないし。」

「ふあ……おはよう。」

「「!？」」

「？」

突如、姿を表した人物に私とお姉ちゃんは驚き振り向いた。

そこには

「「おはよう。」」

大きな欠伸をしているが螢いた。
つてアレ？

「螢、体は！？」

「だいぶマシになった。昨日に比べれば軽い軽い。」

「よかったね。それにしても起きるの早いね。」

お姉ちゃんは早起きに感心しているみたいだ。

「早く起きるのには慣れてるから。」

「そっか、螢君が殆ど家事やってるんだもんね？偉い。」

「そうかな？家では普通になってるよ？」

手伝うと言って彼は食器運びを手伝おうとしたがお姉ちゃんによって阻止された。

「まだ体を休めてなさい。」

「はあい。」

意外と素直に引き下がる。

「奈緒ちゃん、悪いんだけど拓也起こしてきて。」

「うん。」

こうして、また新しい今日と言つ日が始まった。

第28話

優達が沖縄に旅立ってから約2日経った今日。

俺の体は至って良好だ。

まあ寝てばかりだったからな。

「タク兄、薫姉ちょっと……。」

奈緒がトイレに入った音を確認し急いで2人に話しかける。

「どうした？悩み事か？」

「うーん……似たような感じ。奈緒にこの間のお礼って意味で何かプレゼントしたいんだけど……何が良かなあ？と思い相談しました。」

「プレゼント？」

「うん。」

2人は3秒ほど悩んだ後に、閃いた！という顔をした。
同時にね。

「たぶん拓也と同じこと考えてると思うなあ」

「ってゆうか、プレゼントと言ったらあの店しか思いつかないさ。」

はあ意志疎通ってやつですか？

「っでその店とは？！」

俺の質問にタク兄は笑顔で言ってきた。

「用意しな。今から行く。」

「は？・・・今から！？」

思いたったら即行動ですか？！
って俺その店が何を販売しているのかが気になっているのだが・・・。

「ほら急ぐ！」

「はい・・・。」

タク兄と薫姉の事だから瞳姉みたいに酷いことにはならないだろう。
むしろ、そうであって欲しい。

「あれ？螢、どこに行くの？？」

玄関で靴を履き替えていると奈緒からどこに行くと言った質問が俺の
耳に入ってきた。

「タク兄と散歩。」

「そう、気をつけてね？」

「おう。行ってきます。」

「いってらっしゃい。」

久しぶりに誰かに見送られた気がした。

タク兄の運転する車は約30分である店の駐車場で停止した。
車から降り、2人で店に入って行くときに看板に店名が英語で書いてあることに気づいた

ハルミ？

「いらつし、拓也君！？」

「お久しぶりです。」

中に入ると美人のお姉さんがタク兄を迎えてくれた。

「本当に久しぶりね。薰ちゃん元気？」

「はい元気ですよ。」

話しを続ける2人を見て思った。

タク兄は俺の存在を忘れ、店員のお姉さんは存在すら気づいていない。

俺なにしに此处へ足を運んだのだろうか？

そんな事を考えてる間も俺の存在に触れない2人に多少イライラしつつもタク兄に話しかけることにした

「タク兄、俺の存在忘れてない？」

瞬間

「あつ。」

「誰?!」

やはりですか？

俺には存在感がないと悟った今日です。

タク兄が店員に何か説明を始めた

「えつと螢君だっけ？」

「はい、存在感のない螢です。」

《ビシ!》

注意：横にいるタク兄が俺の後頭部を叩いた音です

「私はこの店のオーナーの晴美よ。宜しくね　で今日は何を買いにきたのかな？」

ハルミ???

オーナー……。

店名に自身の名前をつけたのか?!
って何を買いにだって???

「えつと……。」

辺りを見渡す。

ジュエリーショップ???

「晴美さん、さっき説明したでしょ？」

「一応どんなモノが良いのかなぁ？と思ってね。要望は？」

「要望と言われましても……。」

こんな女性専門店で足を踏み入れたのが人生初めて混乱中でありまして……。

「うーんと、じゃあ彼女に」

「彼女じゃありません！幼馴染です！！」

《ビシバシ！》

注意：横にいるタク兄が俺の後頭部と額をリズムよく叩いた音です

「落ち着け。」

「はい。」

後頭部が痛い……。

「ええっと、彼……じゃなくて幼馴染が常時何か身につけているモノはある？」

「ないです。」

「なら指輪でもブレスレット、ネックレスどれでもいいわね。そう

だ写真か何か持っていないかな？」

「ない」「ある。」です・・・は？」

タク兄が俺の声を遮って『ある』と答えた。

「どうぞ。」

「どうも。あら、可愛いじゃない」

タク兄は何故写真を持っていたのか気になったが、写真そのものの方が気になった。

チラリと横から覗き見をする。

「これって去年のスキーに行ったときの？」

「そうだ。」

写真には笑顔の俺と奈緒がピースをしているものだった。

「ふむふむ。コレなんてどうかな？」

一度こちらに背を向けて、振り返った晴美さんの手には2つのハートが絡み合っていてできているネックレスだった
奈緒が身につけているところを想像してみる・・・似合っていると思う。

「じゃあコレにします。」

「オッケー プレゼント用にラッピングする？」

「お願いします。」

いそいそとラッピングし始める晴美さんを見たタク兄がふと言いだした

「まあ晴美さんに任せて失敗はまずないから大丈夫だ。」

それって、もしかして？

「タク兄ここで薫姉にプレゼント買ったことあるの？」

「あるよ。2回目の時は……。」

なに??

続きが気になるんですけど？

「螢、晴美さんに値段聞いたか？」

あ、そういえば聞いてない。

俺は首を横に振るとタク兄はため息をついた。

値段も聞かずに決めたのだが……もしも何万もするものだったら……。

「晴美さん、それ幾らですか?!」

「えつとねえ……。」

晴美さんは難問を解いているよいな顔になった。
俺は値段を聞いただけに……。

「まだ値段決めてなかったからなあ……どうしよっか？」

「は？」

値段を聞いた俺に聞き返すか普通！？

「やっぱり……。」

タク兄が小さく呟いた、この言葉を俺は聞き逃さなかった。
やっぱりってことは、タク兄も同じ目にあつた事が……？

「俺に聞かれても困ります。」

「あはは、そうだね。じゃ4000円でいいよ。」

微妙な値段だ……。

高くもなければ安くもない。

てゆうよりあれは俺の見る限り結構、上等なものだ。
細工といい、形といい。

4000円では釣り合わないような気が……。

「まただ……。」

今度はそう呟くタク兄。

まさか俺、タク兄と全く同じ経験をしているのか？

ラッピングを終えて、俺に例のハートのネックレスを、俺は晴美さんに野口さんを4枚渡す。

「また来てね」

「はい。」

微笑む晴美さんに見送られながら店をあとにした。

車に乗り込み、走り出してタク兄は俺に向かって言い忘れてたと言ってきた。

「何を??」

「晴美さんは瞳のお姉さんだってこと。」

「……………」

「……………」

「…………シンジラレナイ。」

「だよな? うん、俺もそう思う」

あの閻魔大王と晴美さんが姉妹??
シンジラレナイ……………」

「あともう1つ。」

「へ? なに?」

信号が赤に変わり車が止まる
と同時にタク兄が俺の頭に手をおく。

「好きなように生きる。その手に着けているモノで自分を縛るな。」

信号が青に変わり車は進み始めた。

第29話（前書き）

拓也視点

第29話

俺は歩けると言うことは幸せなことだと実感した。
なぜなら俺は一度歩けなくなった。

走れなくなった。

跳べなくなった。

夢を諦めた。

全ては今隣に座っている少年を助けた代償。

事故の衝撃から目が覚めると右足だけが動かなかったが不思議と落ち着いていた。

もともと怪我をしていたんだからショックもそれ程まで大きくない。ただ夜空に輝く月を見て思った、もし神が存在するというのは何故に俺をこんな仕打ちをするのだろうか？

大丈夫と自分に言い聞かせる中、何が大丈夫？何故大丈夫？と疑問が次々に浮かび上がる。

その結果、大切な人と一緒になって泣いた。

やがて俺が助けた少年は礼を述べに訪れてきた。

たぶんこの子は俺がそんな目に逢っていると知らない。
知られたくもない。

少年と2回目の対面をはたした後に帰らなければならない時に、ふとアレが脳裏をかすめた。

恋人に頼み少年と2人だけにしてもらい、少年にバックを俺の元に運んでもらう。

いつもお守り代わりに身につけずに持ち歩いていたソレは恩師に貰ったもの大切な物。

その人は俺のバスケットの楽しさを教えてくれた。

俺は少年を見て、僅かながら知った。

バスケットが好きだと言うその瞳は幼い頃の自分以上に輝いていたと言うことを。

だから俺は渡したくなった。

確かに自分はもうバスケットはできない、ならこの子に《上手くなれ》と言う意味を込めて渡そうと。

昨夜奈緒に言われた時久々にショックを受けた。

『螢はアレで自分を縛っている。お兄ちゃんに少しでも近づいてお兄ちゃんの夢を叶えるために。』

俺のかわり彼が夢を??

違う。

そういう意味でかれにアレを渡したんじゃない。

だが彼とずっと過ごしてきた彼女が言うのだから事実なのだろう。

彼はアレで縛っている。

なら与えた俺が彼を・・・俺の弟を縛る鎖を壊してやる。

そう想ったから俺はそう口にした。

一瞬彼の目が揺らいだ。

信号は青になった。

車を発進させながら彼を盗み見た。

彼の瞳は幼い頃にバスケットが好きだと語る時と同じぐらい再び輝いていた。

俺はもう歩ける。

走れる。

跳べる。

夢は叶えられなかったが今は子供たちに学問を教えながら、バスケットの楽しさを教えている。

何だかんだで今の生活に楽しんでいるんだ。
だから螢にも笑って楽しく過ごして欲しい。
そして、その瞳の輝きを失わないでくれ。

く兄として弟への想いく

第30話

家に到着すると誰もいなかった。
たぶん買い物だろう。

案の定、10分も経たない内に2人は帰宅した。
そして奈緒の帰宅してからの開口一番が『祭りに行こう!』であった。

その時見た輝かしい天使のスマイル相手に俺は断る気もなくて今に至る。

「螢!アレしょ!?ア・レ」

テンション高めな奈緒の指の先には祭りの定番である金魚すくいがあつた。

「駄目だ。今はタク兄の家にいるんだから。」

「うう・・・あ!アレは?」

次はダーツですか・・・。

「アレならOK。」

「やったあ 早く行こう?」

「おいおい。」

俺の手を取り、グイグイと前に引っ張る奈緒に俺は苦笑してしまった。

「そろそろ時間だぞ？」

「あ、ホントだ。」

打ち上げ花火は一緒に見ようと言う薫姉の提案により少し離れた場所にある丘の上に7時50分集合。
現在7時20分。

「うんじゃー先ず此処から出るべ？」

「うん。」

出口は3カ所ある内の俺達にもっとも近い南口から出て丘を目指した。

までは良かった。

皆さんもご存じの通り此処はタク兄達の住む地元。

余所者の俺達がこの辺りを知り尽くしている事などあるはずがない。

「此処はどこ??? 私は」

「必要のないボケは止めれ!道に迷ってんだぞ？」

のほほんとしている奈緒は不満げになる。

俺は正論を言っただつもりですが？

「うーん……。」

考える。

どうすれば良いのか考えるんだ螢。

周囲に人影はなし。

さてどうする??

「さて悩んでいる螢さんに問題です。アナタの左ポケットには何が入っているでしょう?」

「は?」

左ポケット??

あ。

「正解は携帯電話でした。」

「その手があつたな・・・んじゃ早速電話するべ。」

《プルルル、プルルル》

「・・・・・・・・。」

《プルルル、プルルル》

「・・・・・・・・。」

《プルルル、プルルル》

まさか……。

《ブツ……こちらは》

女の人の声を聞いたとたんに俺は電源ボタンを押した。

終わった……。

「もしもし、お姉ちゃん？ 実は道に迷っちゃって。」

お姉ちゃん？？

道に迷って？？？

「螢、こっちだよ。」

「あ？ ああ。」

前を歩く奈緒の手には携帯電話が握られていた。

そうか、薫姉か。

「この坂登りきったら到着であります。」

「よろしい。では参るぞ？」

始めは2人共にゆっくりと歩いていたが、だんだんと横の相手より先に行こうとし……。

「あ、走るのずりぞ!？」

「悔しかつたら私を抜いてみれば??」

走り出した。

「ふっ。」

「え!?! ちょ・早いよ! って待ってよお

!?!」

先程まで前を走っていた奈緒は今、俺の後方を走っている。
そして叫んでもいる。

その声に反応して振り向く。

待てと言われて……。

やめれ……。その潤んだ瞳で俺を見るな。
わかったから。

結局待つ羽目になった。

「もう! 私はアンタみたいく化け物じゃないんだから、少しはゆっくり走ってよ!」

「誰が化け物だ!?! 俺はいたって普通の学生だ。」

「グラウンドを全速力で15周走った人が言う台詞じゃないよ。」

「隼人だって走ってたじゃん。」

「それは隼人も化け物だからに決まって・・・あれ？」

「どうした??」

俺の質問など無視をし、周囲をキョロキョロ見だした。
あれ？

ここは・・・いつの間にやら頂上ではないか。

「お姉ちゃん達がない。」

「・・・・・・・・。」

俺も周囲を見してみる。

タク兄達がいらないどころか誰もいない。

なんで?!

「電話してみるか??」

「・・・・その必要はないみたい。お姉ちゃんからメールが着てた。」

「なんて??」

あ、目を逸らされた。

え？

なに??

この気まずい雰囲気は？

「お、女同士の秘密。」

なんじゃそりゃ？！

《ヒュルルル・・・ドオン！》

「「あ。」」

打ち上げ花火が始まった。

色とりどりの花が綺麗に咲き、夜空を照らす。

つい1週間前にも祭りで上がっていたよな。

あの時は隼人と馬鹿やって見ていなかった。

ん？？

奈緒が静かだ。

「あ・・・。」

よく男が何か綺麗なものを見た後に恋人や気のある人に向かって「君の方が綺麗だよ。」等とアホのような言葉を発していたりするが俺はどうやら奈緒に似たような台詞を言いそうだ。

しばらく花火から視線を奈緒に移すことにした。

見られている本人は俺の視線に全く気づいていない。

「・・・ん？」

やっと視線に気づいたのか、こっぴど顔を向け俺と目があつた。

そして笑顔で俺を見ってくる。

俺もつられて笑顔になる。

花火で輝く瞳とその笑顔。

俺は言いたい。

言いたいんだ
でもまだ・・・。

あと少しだけ『幼馴染』のポジションにいさせてくれ。

「奈緒。」

「なあに？」

「これ」

俺の手のひらにはさっき買ったプレゼントがある。

「え？なにそれ？？」

「ん、この間俺が倒れた時に助けてくれたお礼。」

「そそそんなの・・・何か悪いよ。」

「いいから、受け取ってくれ。」

半ば押し付ける感じで奈緒に渡す。

1度俯いて再び顔を上げた時の彼女の顔はさっきよりも輝いて見えた。

「開けてみてもいいかな？」

「ここですか？」

「うん。ダメかな？」

俺は苦笑しながら首を横に振り夜空に咲き続けている花に目を向けた。
気に入ってくれると良いな。
そんな事を思いながら。

「螢」

「あいよ。」

幸せそうに笑う奈緒の胸元にはハートが2つあった。

「これ可愛い。ありがとう、大事にするから。」

「おう。」

それからまた視線を夜空に向けた。
あと1ヶ月以内に。
そう心で呟きながら。

第31話

《2人で楽しんで。勇気をだして告白してみなさい。》

お姉ちゃんなりに気を使ってくれたのだろう。

瞳姉さんと違って楽しんでこんな事をしたんじゃないと思うけど。

「帰るか。」

「うん。」

最近の良いことばかり起きている。

しかも全て螢関係で。

でも・・・だからかな？

怖い。

もし想いを告げてダメで彼が私から離れていってしまったら・・・
そう考えるだけで怖い。

隣で歩く螢の横顔を盗み見る。

胸がギュッと締め付けられる。

え？

自分が驚いた。

気がつけば螢の右腕に自分の両腕を絡めていたのだから。

「奈緒??」

彼は驚いている。
だが私は俯いて絡めた腕に力を入れ力強く彼の腕を抱きしめた。
彼は何も言わず歩き始めた。

「じゃまたね。」

「体につけるんだぞ？」

俺もあんな夫婦になりたいなと思いながらリムジンに体を半分入れる。

「うん、じゃまた。」

別れの言葉をいいながら。
いや違う、これは再会の約束だ。

「またねお姉ちゃん。」

奈緒は名残惜しそうに俺に続いて乗り込む。
発進したリムジンはある1つのデカイ家の前で止まった。
そして俺だけが降りた。
瞳姉に文句を言うために。

「あ、螢さん！久しぶりです！」

「そうだね紫織ちゃん。あと………優??？」

どうしたんだ優！？
なぜ放心状態なんだ！？

「螢、体良くなっただ？良かったじゃない。」

でた……。

優、お前はこの人にやられたんだろ？
こんな燃え尽きるまで。

「ありがとう。でもね瞳姉、肝試しでは良くもやってくれたね？」

「なあんのことかな？」

「昨夜奈緒から聞きましたよ？何でも俺達2人を騙してくっつけよう……ようは恋人同士にしようとしたんだろ？」

「ええええええ？！」

紫織ちゃんが驚いているが今はスルーだ。
てゆうか何故閻魔大王は残念そうにしているんだ？！

「ちよつと違うわね。シナリオでは2人が会った時に不良に変装した使用人が絡んできて螢が戦って勝つ。それを見た奈緒は『螢カッコイイ。大好き！』と言い、螢は『俺もお前が好きだ。』と言って奈緒にキスをするというものだったわけ。」

「……………」

アレだ。

この人はアホだ。

どう考えたらそんなシナリオ通りに事が進むよ？

「さっす人とも早く車に乗った乗った。飛行機に間に合わないわよ？」

「紫織ちゃん優を連れて先に行つてて。」

「ラジャーです。」

優は紫織ちゃんに引つ張・・・引きずられていった。

「さて瞳姉。」

「何かしら？」

「コレなあんだ？」

携帯のメイン画面を瞳姉に向ける。
おおゝ顔が真っ赤だ。

「なっ！？どうしてそれを！？」

ふっふっふ・・・
驚いとるのう。

「タク兄に貰った。次何かしたら皆に見せちゃうからこの高校時代のケン兄とのキスシーン。」

「ギャーやめてえー！！」

こんなに焦る瞳姉はじめて見た。
てゆうか楽しい。

今『コイツSだな』とか思っただろう？

今後はやめれよ？

そんな単純な発想は！！

これは今まで散々人で遊んでくれた閻魔大王への復習なのだから。

「あ、もう時間だから。バイバイ。」

後ろから最低やら鬼やら聞こえてきたが携帯を空に掲げると聞こえなくなつた。

初勝利

螢V・S瞳姉

螢、初勝利ながらも完全試合達成。

リムジンに乗る俺は勝利と言う2文字に酔っていた。

《 》

おつと電話だ。

ん？

隼人？

「も」

《大変だ！》

最後まで言わせろよ！

「何がだ？あと五月蠅い、そして落ち着け。」

《バッカ野郎！騒がずにいられるか！》

俺は迷わず電源ボタンを押した。

「螢」

「ん？なに？」

奈緒は携帯を俺に渡してきた。

「隼人から電話。螢にかわってくれって。」

そうきたか？！

こういう機転だけはきくんだから。

「何がどうした？」

《何でさっき切った？！》

「……切るぞ？」

《わかったから、俺の話を聞け！実はな……》

続く隼人の言葉にハイテンションになる俺がいた。

「マジかよ？！いつだ？！」

《明後日！！》

急だなオイ!!

「わかった。じゃあな。」

《ああ!じゃ明後日な!》

小さくガッツポーズを決める俺を下田姉妹に不審な目で見られた。

第31話（後書き）

この話で拓也と他5名の登場は終了です。あ、でも先の方で出るかもです。たぶん出る・・・

第32話

夏休みも終わり今日から新学期がスタートする。
だから生徒が教室にいることは自然で、いないのは不自然。
でも、このクラスには2名の男子生徒が休みだ。

「もう知っている奴もいるだろうが・・・火野と佐藤は高校生の北海道代表合宿に招集されたため休みだ。」

担任の先生は2人がなぜ休みかを皆に説明をする。
そんな事はもう知っている私はため息をつく。
だが周りの生徒は騒ぎ出した。とくに女子が！

「すごいね。」

「代表？！カッコいい！」

「火野君、素敵。」

「そう？私は佐藤君の方が」

などと螢と隼人を褒めまくる女子達。
目障り＆耳障りでしかたがない。

「因みに2人の写真とコメントが載っている雑誌ここに置いとくから後で見たい奴は見とけ。じゃ今日は解散。」

出て行く先生を睨んだのは言うまでもない。

ほら、雑誌には女子達が群がってキヤーキヤーと騒いでいる。

「奈緒、そんな、あからさまに不機嫌面していると可愛い顔が台無しだよ？」

親友の美帆は私を宥める様によしと頭を撫でる。

美帆さん、全く効果ありませんよ？

「まあ撫でるのが螢じゃないと効果がないか。」

「もう！変なこと言わないでよ?!」

「ゴメンゴメン。ホントに寂しそうだね？気分はブルーってやつですか？」

「寂しくなんてない！むしろ開放感！」

「無理しちゃって。」

「してない！帰る！」

「怒らないでよ。」

廊下に出た私を美帆は笑顔で追いかけてきて横に並んだ。

「どうせ明日には帰ってくるんだから。」

「わかってるよ。」

私にとって《今日》と言うモノまでにたどり着くまでコレ程までに長いと感じることはなかったと1週間だったと思う。

校門ですぐ美帆と別れて久しぶりに1人で歩く。
いつもなら、あっという間に家につくはずなのに今日はやけに長く

感じられた。

「イヤだなあ……。」

早く明日になるば良いのに。

「あ、お姉ちゃん。」

「紫織と優君、帰りに会うなんて久しぶりだね。」

「それはそうでしょ？ 兄貴は部活で奈緒さんは図書室で本読んでから帰るんですから。」

「そうだねえ。」

優君もよくここまで回復したよね。

夏休みに瞳姉さん達と沖縄に行つて帰ってきた時は魂が抜けてたものの。

「じゃ俺はバイトあるんで。」

途中で優君と別れて紫織と2人きりになった。

「何年ぶりかな？ 紫織と一緒に帰るの。」

「小学生以来じゃないかな？ 中学校と高校の時から優と帰ってる気がするもん。」

「そっか……。もう、そんな前なんだ？」

「うん。」

そうだよな？

小学校の時は4人で通ってたけど、中学校からは気がつけば螢と2人で帰ってた。

うっん、私が2人で帰ろうとしていたし、今もしている。

本を読むのは好きだけど、放課後残っているのは一緒に帰りたいから。

「そうだ！お姉ちゃん今からケーキ食べに行かない？」

「昼間からケーキ？」

「うん 行こう？」

私は苦笑しながら頷く。

「やった！早く早く」

「引つ張らないでよ！」

大好きなケーキを食べていても時間は長く感じられる。
やっぱり……

螢がないからかな？

そんな事を考えている私は知る由もなかった。

螢と隼人に身に起きている事を。
気がつけば外は曇が空を支配していた。

天候、

それは人間の手では変えられないものである。

「落ち着いて・・・ね？」

「わかってる！わかってるの！」

激しく降る雨の中、走るタクシー。

車内では私が美帆を何とか落ち着かせようとしている。

「ありがとうございました。」

出来るだけスピードを上げてくれた運転手さんにお礼とお金を払って、病院内に急ぎ足で入っていく。素早く階段を上って螢に言われた病室の前についた。

「美帆？」

前でドアに伸ばした手を途中で止めた美帆。

どうしたの？と言っても返事がない。

私は美帆の隣に移動し、顔をのぞき込んで驚いた。

美帆は今にも泣きそうな、そして恐れている顔をしているのだ。

私は分かった。

美帆はこのドアを開けるのが怖いんだと。

それは彼にもしもの事があつたらと考えてしまったから・・・。

「大丈夫。」

美帆の伸ばした手を両手で優しく包み込むと美帆の体がビクツとした。

「大丈夫だから。」

2度目の大丈夫を言った後に手を離れた。
すると美帆はゆっくりとした動作でドアを開くと……。

「あれ？美帆じゃん！あ、奈緒も！」

「は？」

ベッドの上にいる元気な姿の隼人に迎えられた。

「いったいコレは……どういうこと？」

「だって……あれ？」

「隼人が倒れたって……。」

「奈緒。後ろ。」

背後から誰かが小さな声で私を呼ぶ。

振り返ると廊下に左手の人差し指を立てて口の前、右手で手招きをする螢だった。

私は隼人と話している美帆に気づかれないように廊下に出る。

「ついてきて。」

久しぶりに会った彼の言われるがままについて行く。

少し離れた場所にある椅子に彼が座り、私はその隣に座った。

ひとまず。

「あれはどう言うことか説明して。隼人が倒れたんでしょ？」
そう言うとな彼は苦痛な面もちになった。
そして視線は床に向けたまま

「倒れたよ。」

と呟くように言った。

「だか・・・」

だからどうして？しかも元気なの？
そう言おうとして止めた。

先程まで床に向けられていた視線は今私に向けられている。
真剣な眼差しで。

「3年前の12月21日。」

ヒュッと私が息をのむを音は雨音によってかき消された。
彼は何故今この話をしているのか理解できなかった。
私も螢も・・・皆が思い出さくない記憶だから・・・。

3年前の12月21日。

俺がそう口に出すと奈緒は目を見開いた。

そして今は悲しそうな目つきで俺を見ている。

3年前の12月21日。

俺が最も思い出したくない記憶。

「最近のニュースで何があった？」

瞬時にハッと何か思い出した顔になる。

「・・・でも、そんな・・・。」

「合宿先でそれを見た隼人は昔と被って狂いだした。つで最後は意識無くした。」

誰もが傷ついた。

そして、あの日誰よりも心に傷を受けた隼人と彼奴。
俺達がまだ8人だった頃。

「隼人は・・・？」

「なに？」

「隼人は大丈夫なの？」

『大丈夫だと言っておいでくれな。じゃないと俺また皆に迷惑かけちまう。』

数分前の隼人の言葉が俺の頭に響く。

「大丈夫。」

『それに』

続きがまた頭に響いた。

「よかった。」

目尻に涙を溜めた奈緒は微笑みを浮かべる

「ただそれが原因で倒れた事は美帆には言わないでくれ。」

「何で？」

「言ったら美帆のヤツ錯乱する。奈緒が1番……いや2番目にわかるだろ？」

因みに1番は隼人など言ってなんとか笑顔を作って見せた。

「そうだね。」

「うん、実はこれ隼人から俺と奈緒へのお願いなんだ。」

とうとう声を殺して泣き出した奈緒の体を俺は抱きしめる。

大丈夫…….そんなわけない。

奈緒許してくれ。

美帆も許してくれ。

俺の・・・。

俺達の嘘を。

『それに今度倒れたら2度と意識が戻らないかもしれないなんて言えないさ。』

第32話（後書き）

近日、新キャラ登場予定。さらに螢と隼人に美帆の出会い、そして皆が傷を負ったワケを書いていきたいと思っています。

第33話

奈緒が泣きやんで数分、俺達は病室に戻っていた。

「奈緒もごめんな？」

「うん。それより美帆寝ちゃったんだ？」

「うん、泣き疲れて眠ったみたい。」

「そっか。」

隼人の腕の中で眠る美帆は安心しきった顔だった。

『美帆にはなんて？』

病室に戻る途中で奈緒は俺に聞いてきた。

『前に俺が倒れた時の疲労と言うことにしてある。合宿最終日ならあり得るだろ？』

『うん、そうだね。』

「とりあえず無事でよかった。いつ退院できるの？」

「明日にはできる。」

ここで隼人が目で俺に合図を送ってきた。

すまんが全くをもつて何の合図かわからん。
いや、そんなウイंकされても……。
そして思った

「「隼人キモイ。」」

ナイスだ奈緒。

まさか言葉もタイミングも同じとはね……。
でもナイスだ。

「はぁ……。」

「溜め息吐くな。」

「誰のせいだよ!？」

「お前のウイंक。」

そんな潤んだ目で俺を見てきても無駄だ。
むしろ

「「隼人キモイ。」」

「こんの似た者……。ごめんなさい。すいません。誰も《夫婦》
なんて言おうなんてしてゴフ!？」

右フックがキレイに決まる。

うん、やっぱり俺と隼人はこうでなくちゃな。

「螢さん痛いっす。」

「っでさっきは何を伝えたかったんだ？」

戦闘態勢をとりながら問いかける。

「もう遅いから」「美帆起きて。」てめえら帰れ!!」

語尾が荒くなつたのは奈緒が隼人の言葉を遮つたからと考えて間違いないはず。

あ、起きた起きた。

「美帆帰るよ?」

「うん……。隼人。」

「ん?はいよ。」

「「なっ?!」」

人の目の前でキスをするか普通!?

「2人とも何で固まってるわけ?」

隼人にもう1発拳を入れる。

「俺も明日、合宿先から帰るから。気をつけてな。」

「え?今日が合宿最終日じゃないの?」

「合宿の練習が最終日。だから昼には帰ってくるぞ。」

「なんだ。じゃ私達帰るから。」

「おう、気をつけてな。」

「螢もね？じゃね隼人。」

「うん、じゃね。」

「隼人、今日は早めに寝てね？」

「わかってる。じゃ。」

女2人を見送る男2人。

「手のサインならわかるんだ？」

「当たり前だ。っで俺に《待て》の合図をしたわけは？」

「あの・・・さ、明日」

「迎えに来てほしんだろ？」

「さっすがあ！」

何年の付き合いだと思ってるんだよ？
少しくらいなら分かるさ。

「じゃ11時な？」

「おつす、じゃ」

また明日と言いつて病室をあとにする。

外に出ると雨はやんで、雲の間から月がでていた。

大丈夫……。

そう心で呟きながら合宿先に戻った。

「おはよう。」

「おはよー」

下田家の前で待つこと3分して姿を現した奈緒と並び歩き出す。

「くく」

鼻歌とはご機嫌ですね。

しかもスキップしちゃってるし。

姉妹そろって同じ行動だね。

「何か良いことでもあった？」

前でスキップしている奈緒に問い掛ける。

「うん」

「へえ……なに？」

「えへ、秘密」

「なんじゃそら？」

「なんじゃろね？」

笑顔でスキップをする奈緒はとても可愛らしく、つい俺も笑顔になった。

「奈緒おはよ！あ、あと螢も。」

俺はついでかよ！

「おはよう美帆。あと隼人も。」

朝から校門前で酷い仕打ちにあう男2人。

「全く俺らは……何かさっき視線が俺らに向いてないか？」

「「「は？」」」

各自それぞれの方向を見る。

「ホントだ。」

「なんで？」

「怖いね。」

「なんかした？」

「「「「……」」」」

うん・・・バラバラだね。

呼吸合わなすぎる。

でも相変わらず視線が向いてるね。

「火野先輩と佐藤先輩・・・ですよね？」

「え？うん。」

誰この娘？

襟の刺繍からして・・・1年？

「あの雑誌見ました！良かったら握手してください！」

雑誌？？

ああアレか。

「うん。良いよ。」

「ありがとうございます！」

女子生徒と握手する。

《あ！！》

周りの生徒・・・主に女子が声を上げた。

『あ』ってなに？

次に隼人が握手する。

《あ　！　！》

ええ？！

もしかして俺等に向けての声なんですか？！

「ありがとうございます！！」

笑顔で礼を述べ女子生徒は去っていった。

何だったんだ今の？

そして先程から背中にヒシヒシと伝わってくる殺気は何？
振り向くと・・・般若が見えた。

「奈緒サン？ドウシタノデショウカ？」

「別に・・・。」

上機嫌から一気に不機嫌に切り替わった。
長年の感、かなりヤバい。

「奈緒、な」

「火野先輩！私とも握手してください！」

「へ？」

「佐藤君、握手して！」

「は？」

気がつけば俺と隼人は大勢の女子生徒に囲まれていた。

ああ・・・なんと言ったことだ。
先程よりさらに強い殺気を感じる。

「火野先輩！」

「火野君！握手」

「佐藤さんサインを」

「佐藤君！こっち見て！」

「あの、わつ。」

「ちよつ、待てつて！」

焦る俺達は気づきたくはなかったさ！

男子共からの殺意に満ちた視線を。

《ピー！ピッピッピー！》

Why?!

なぜに笛の音！？

「アンタ達！他の生徒の邪魔だから散りなさい！ほら、散った散った！！」

この人、救世主だ！

ああ段々と女子達と視線が散っていく。

「あの、ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

いまだに背後から殺気を感じますね。

できれば、コッチをどうにかしてもらいたかった。

「アンタ等次は自分で」

《ピッピ―!》

「こらそこ食べながら歩くな!」

救世主の女子生徒は走ってどこかえ行ってしまった。

第34話（前書き）

新キャラ登場っす

第34話

久しぶりの学校は最悪な幕開けとなった。

「火野君、雑誌見たよ!」

「佐藤君の写真カッコ良かったわ。」

「あのコメント痺れちゃった。」

教室に入るなり先ほどと同じ状況となり俺達2人は笑顔と裏腹にゲンなりとしている。

ほくら、また隣の席から殺気を感じるよ。
もう泣くよ??

「ホームルーム始めるから席に着け!」

先生ナイスタイミングです!

初めてアナタを尊敬しました。

散っていく女子達を見て思わず安堵のため息をついた。
でも……。

「何で怒ってんの?」

ぐっ!

眼が……眼が怖くて直視できない。

「私は怒ってなんかいいよ?」

なら殺気抑えろよ!

未だにビシビシと出してんじゃねえ！

3秒後

あ、殺気が消えた。

「はぁ・・・ごめん。」

そして謝られた。

そんな謝られても・・・。

「いや俺が」

「よく聞け！なんと我がクラスに転入生がやってきた！
知るかタコ！

こちらら大事な会議中じゃボケ！

「だから俺」

「女の子ですか!？」

もう後でいいや。

それにしてもベタな質問やな・・・。

「奈緒この話は後でな。」

「・・・うん。」

後回しは嫌いなんだけど今この騒がしい中で話すよりはマシだ。

「ええと・・・女の子。」

男子共の歡喜の叫び声が響いた。
あ、俺あげてないからな！

「じゃなくて男だ。」

《ちっ！》

うわゝ凄い。

舌打ちの音がこんなに大きなの聞いたことなかった。

あ、女子が歡喜の声を。

「よし入れ！」

ドアを開けて入ってきた男子生徒を見て

「なっ？！」

「は？！」

「うそ……。」

「へ？！」

驚きの声を上げられずにはいれなかった。
綺麗な青色をしたその瞳が俺の姿をとらえ、固まった。

女子達が声を出して騒ぐ中、静かに立ち上がった俺のもと男子生徒
が歩いてきた。

「おい、どうした？」

先生の声を無視して、とうとう俺の前まできた。

「螢・・・久しぶり。」

「和樹・・・。」

震える拳を振りかぶった時だった。

「和樹!!」

《ガツ!》

男子生徒の名前を叫ぶ声が聞こえたかと思うと鈍器で殴ったような鈍い音がした。

殴り飛ばされ、驚きの表情になる男子生徒。

「佐藤なにをし」

「3年間ずっと連絡寄越しもしないで何してやがった!？」

隼人の叫び声に静まり返る教室。

場所が場所なだけに、騒ぎになると面倒だな。

素早く奈緒と美帆、続いて隼人に眼で合図をする。

全員こくりと頷く。

最後に男・・・倒れている和樹にウイंकで合図する。

「佐藤!今から職員しつに」

《パン!!》

先生の声を遮り、ありったけの力で手と手を叩き合わせた音をだした。

それを合図に

「あ、こら！お前達またんか！鏡山まで！？」

全員が走り出した。

急いで階段を上る皆とは反対に俺だけが下る。

1
のA

ここだ！

ホームルーム中にもかかわらず加減なしでドアを開く。

「何だ君は？！」

教卓の前に立つ男を無視し俺は2人の姿を捜す。
いた！！

「兄貴？！」

「螢さん？」

「2人ともダッシュ！」

俺の勢いに圧されたのか2人は一瞬怯み、すぐに教室を出た。
背後では怒鳴る先生の声からは焦りが感じられた気がした。

「優、屋上！」

「わかったがワケ話せ！」

「行けばわかる！」

などと言っている間に屋上の扉の前までついた。

「螢さん、いったい何があったんです？」

俺は紫織ちゃんの声を受け流して、無言でドアを開いた。
強い日差しに視界が真っ白になった。

だが、しだいに慣れ4人の姿が目に入った。

「んなつ?!」

「ええ!?!」

驚きの声は外にもかかわらず響いた。

「優君、紫織さん久しぶりだね。」

「和樹・・・さん？」

微笑み頷く和樹とは対照的に隼人は仏頂面だ。
俺の指示で円になって座るが・・・

《・・・・・・・・》

沈黙が続いた。

《・・・・・・・・》

沈黙。

《・・・・・・・・》

沈黙。

「「ごめん！」」

うおい！？

ビックリした。

「殴って悪かった。ごめん。」

隼人・・・・。

「いや3年間連絡しなかった俺が悪い。ごめん！」

和樹・・・・。

「謝るのはもう止めよう。和樹、お帰り。」

「螢・・・・。」

「お帰りなさい。」

「奈緒・・・・。ただいま!!」

屋上にいる7人。

全員が再会を心から喜んでいた。

そして全員が今いない1人を思い出していると思う。

強い風が吹いた時、俺は不覚にも8人になったような気がした。

第34話（後書き）

『RAN&JUMP』で拓也が足の治療のため北海道に行き、過ごした1年半を書いてみたい気が・・・どうしましょ？（笑）ひとまず【光】を完結させてからか、同時にするか・・・迷ってます。

第35話（前書き）

今日までに10000人の方が【光】にアクセスしていただきありがとうございます。これからも頑張って更新していきたいと思いますので応援よろしく願います!!

第35話

「……行ってきます。」

自分以外誰もいない。

でも毎日言ってしまう。

俺は認めたくないだけだろうか？

玄関に飾っている写真を一目見て家を出た。

和樹が俺達のもとへ戻ってきてから早くも1週間が経った。
かがみやまかずき
鏡山和樹は中学で知り合い、わけあって仲良くなった。
てゆうより皆はあの出来事があって仲良くなったもんだ。

「はーやーと！」

「おっと！」

後ろから飛びついてきた美帆に驚きつつ、嬉しくなる。
時々ヒドい目に遭うがそれは俺が原因らしい。

「はやく昼食とろ？」

「おう。螢、はやく飯食いに行こつぜ？」

少し離れた席にいる親友は俺を睨んできた。
まさに鬼の形相で。
俺何もしてないぜ？

「おい。」

「ギャース！」

アンタ瞬間移動でもできるのか！？

「人が楽しくお喋りしてるのに話しかけるとは良い度胸だな？おい。」

怖い！

素で怖いって！

「隼人、奈緒に何かした？」

近寄ってくるなりそんな事を言ってくる和樹。

「何もしてない。」

てゆうより、それどころではない。

「おかしいな・・・なら何で奈緒は隼人を睨んでるんだろうね？」

「え？・・・ひっ！？」

たまらず悲鳴をあげてしまった。
何で???

何で殺意のこもった目で俺を見てくるの？

「シ・カ・ト・か？コラ！」

「アンタ等怖いって！美帆助けて！」

ずっと後ろから抱きついている美帆に助けを求める。

「私は奈緒の味方。」

彼氏より親友を優先ですか！？

「隼人、安心して。」

「和樹……。」

やはり俺の味方はお前しかいないみたいだ。

「螢の一撃なら苦しまずに逝くことができるから。」

どこにですか！？

どこに逝くんですか？！

いや、それより味方はいないんですか！？

ニコリと笑うその顔がブラックに見えたのは気のせいですか？？

ガシッと螢に肩を掴まれる。

「ひっ！」

ああ螢君。

君のその微笑みが世界一怖いです。

「奈緒と楽しく明日の予定を話しているときに声かけたらダメじゃないか？」

理不尽？！

「ごめボハア！？」

川が見えた。

「ん・・・うん？」

意識が戻ってまず見えたのが楽しく食事をしている火野兄弟と下田姉妹＋和樹。

ここ保健室だよな？

「おはよう、隼人。」

「おはよう、美帆。」

今気がついた。

それは美帆に膝枕してもらっているということに。
うん、心地いい……。

「……起きないの？」

「もう少しだけ。」

「もう……。」

口を尖らせながらも頭を撫でてくれる。
ホントに心地いい。

ん？

談笑が消えた気が……。

あ、

「起きたのなら飯食え。」

まだ根に持ってるのかよ？

「美帆はお前が寝てたせいで飯食ってないんだぞ？」

俺のせいじゃなくて君のせいではないのかな？
って

「美帆まだ食ってないの？」

「そりゃそうでしょ？隼人が可哀想だし。」

「ありがとう。」

素直に嬉しい。
美帆はホントに優しい。
だから好きだ。

「はい、あ〜ん。」

あ、卵焼きだ

「あゝガバ?!」

またしても螢によってラブラブモードは強制終了させられた。鬼!!

《バタバタ!》

10数人の走ってくる音がする。
螢と目を合わせて、ため息を吐く。
そして扉が開かれると同時に窓から逃走した。

《螢様と隼人様!お待ちになってください!》

結論。

「無理!むしろヤダ!」

俺と螢を追っかけてくる、自称『螢・隼人ファンクラブ』の人達。
ハッキリ言って迷惑です!

「なに!?!」

そんな・・・。

前からも後ろからもファンクラブの連中が……。挟み撃ちとは卑劣な。

辺りを見回し悟った。

逃げ道がない。終わった。

迫り来る女子達。

隼人LOVEと書かれた鉢巻きが見えた。
残り5メートル……。終わった。

《ピッピ―!》

この笛の音はまさか!?

「コラーまたアンタ達か! いい加減にしないと処分対象として扱うぞ!？」

出た救世主!

「邪魔しないでくれる? 竹内さん。」

竹内と呼ばれた救世主の額には青筋が見える。

……。キレてるのかな?

「アンタ等、停学に……。いや退学にするぞ?」

アナタは何者デスカ?

「くっ! 皆、今日の所はひくわよ!」

リーダーらしき人は他の連中をまとめ去っていった。

「た、助かった〜……。。」

「生き延びたな親友。」

「ああ。」

互いの軽く握った拳にコッソンと当てる。

「ありがとうございます。前もそうでしたけど助かりました。」

あ、俺も言わなくては。

「ありがとうございます。」

振り向いた救世主の額にはまだ青筋がある。
どうしてかな？（汗）

「君達・・・私の仕事増やさないでくれないかな？」

ぬあ！？

奈緒の睨み並にこの微笑みは恐ろしい。

「すすい・・・ません。」

「だいたいね自分」

《ピッピッピ―！》

「そこ！グラウンドで昼食をとるな！」

「行つたな……。」

うん。

「行っちゃったね……。」

「帰るか？」

「そうだな。」

もう鬼ごっこは懲り懲りです。

部活が終わり美帆と手を繋いで帰る。

これは変わらない今の俺の日常。

また明日と言う意味をもったキスをしてから別れるのも今の日常。

そして家に帰りたたいまを言う。

返事のない日常。

そんな日常の中、3日後、俺が再び意識不明になると誰に予想できただろう？

第36話

いつもと何ら変わらない朝の風景。

昨日見たテレビ番組の話しや、最近知った身の回りの事などで盛り上げる俺達。

それは当たり前の事。

笑ったり、少々ムキになって怒ったり、苦笑したり……俺達にとって当たり前の事。

今日だって朝から当たり前な事をしていた。

チャイムの音が教室に鳴り響いた。

「よし今日は終わり。」

先生がそう言うところ者は教室を飛び出し、ある者は悠々と鞆から弁当箱を取り出している。

俺達と言うと……

「まだ大丈夫なはずだ。」

グラウンドの端の芝生で7人で昼食をとろうとしている。

「まだって……ホントかよ?」

「たぶんな。アイツ等さつき中庭走り回っていたから。」

「ふう……見つからない事を願う。」

俺もだよ。

ファンクラブの奴等ときたら迷惑この上ない。
昼食時の場所移しもこれで3回目だ。

「はい、お弁当。」

「あゝサンキュ」

いつもの様に弁当箱を受け取り食べ始める。

「美味い。」

「ありがとう」

最近になって、奈緒といるだけで笑顔になると気づいた。

「2人は相変わらず仲がいいね？」

和樹・・・禁句だそれ。

「結婚しなよ。」

「「薦めなくてよろしい!!」」

ぐっ・・・なんと言うバッドタイミング。

「ほら、息だってぴったりだし。」

昔からそうだ。

和樹は俺と奈緒で遊ぶ事がある。

何と言いつ返そうと思つてを巡らせている時に偶々目に入つた。
奈緒も氣づいたみたいだ。

優と紫織ちゃんが無理に作つてゐる笑顔だと言つことに。

昼休み10分前になつて先に隼人達を教室に歸らせて優達に疑問をぶつけた。

「何があつた？」

ただその一言で優は困つた顔に、紫織ちゃんは泣きそうな顔になつた。

「ねえ、私達に教えてくれない？何があつたのか……。」

奈緒は優しく2人に接する。

優と紫織ちゃんは互いの顔を見てため息を吐いた。

「付いてきて……ください。」

歩き出した2人の跡を無言で追う。

すると2人の教室についた。

「兄貴達はどう思ふ？」

優の人差し指の先を見つめる。

心臓が大きく脈打つ。

「ああ・・・い？」

クラスメートと楽しそうに会話している女の子を見て、自然とそう声に出した。

「そんな・・・でも葵ちゃんは・・・。」

「今日、このクラスに転入してきたんです。私達、驚いて隼人と和樹さんに伝えるか伝えないか悩んでて・・・。」

かすれ声で紫織ちゃんは説明をしてくる。

「兄貴・・・どうする？」

どうする？

俺はどうすれば？

隼人と和樹をあんな娘に・・・会わせる？

「隼人と和樹には・・・教えない。」

「そっか。」

納得する優。

それとは対照的に紫織ちゃんは反論してきた。

「何ですか？なんで教えてあげないんですか？」

教えてあげないんじゃない。

教えてあげれないんだ。

また精神が耐えれなくなつて隼人が倒れるかもしれない。

それに和樹は

「あの女の子は葵じゃない。だから2人に教えたって意味はない。違うかい？」

こんな事なら2人にはあの事は伏せて隼人が精神的ショックで倒れた事を教えておけば良かったと内心想った。
でも、もう遅い。

「その通りです。でもやつぱり」

「紫織！あの子は葵ちゃんじゃないの。」

遮る言葉は紫織ちゃんの大きな瞳から涙を流させた。

「でも……だっ……て」

奈緒に抱きつき涙流す紫織ちゃんを何とか泣きやませて、教室に戻った。

「何してんだ？次は体育だぞ？」

「ああ……悪い。」

「？」

俺は何故か隼人の顔を見ることができなかった。

「ヤバい！」

校門まで残り2メートルと言ったところでバカが叫んだ。

「どうした？トイレか？」

何とか普段通り会話をするが、やはり顔を直視できない。

「違う！小テスト悪くて先生に呼ばれてたんだ。」

「もう・・・私達待つてるから早く行ってきて。」

私達・・・か。

美帆さん勝手に俺等3人巻き添えにしたね。

「はい！」

返事をし走り出した。

「キヤ？！」

「のわ？！」

そして衝突した。
バカ。

そして迷惑だ。

「痛てて・・・あ、ごめ!？」

最悪だ。

俺は隼人と衝突した女の子を知っている。
いや、皆も知っている。

「あの・・・どうかしましたか？」

あまりにも似すぎているんだ。

「あ・・・おい？」

「葵？」

しまった!

美帆と・・・和樹まで気づいてしまった。

「葵? あお」

「隼人! 落ち着け!」

両肩を掴み俺だけが見えるようにする。
隼人の瞳は揺れ動いていた。

マズい!

そう思った時には隼人は叫んでいた。

「葵!!くっ 螢離せ!」

くそっ!

厄介な事になった。

「違うだろ!?!この子は葵じゃない!」

「葵!」

「え?あの私」

和樹!?

くっ……。

「和樹さん!」

「優!」

運良く通りかかった優が和樹を押さえている。
優は必死に和樹に呼びかけている。

和樹は優に任せよう。

「離せ!」

「落ち着けっ!」

「うるせ!葵!」

『駄目だ！言うな！』

そう自分に言い聞かせたの口に出してしまった。

「葵は死んだんだ！」

誰もが俺の一言に凍りついた。

横で騒いでいた和樹に、和樹を押さえていた優も、後ろの奈緒と美帆も、前の紫織ちゃんも皆が凍りついた。

「でも葵は・・・」

「死んだんだ。頼むから目を覚ませ。頼むから・・・。」

隼人の視線は葵にそっくりな女の子に向けられる。

「隼人？！おい！」

力尽きたように倒れる隼人を支える。
顔を見てみると瞼は閉じられている。

脳裏にある言葉が浮かんだ。

『2度ト目ヲ覚マサナイ』

「隼人 ！！」

俺の叫び声が辺りに響く。

まだ暑さ残る9月のできごと。

第36話（後書き）

葵に似た女の子。その子を見て騒ぎ出す隼人と和樹。葵と言つ名を持つ子と2人の関係。そして何故死んでしまったのか？それは近々、回想編で。

第37話

目の前にはベッドの上で眠る隼人。

そして、ベッドの脇に座り手を握る美帆がいる。

『葵は死んだんだ!』

決して口には出してはいけ^ずないはずの言葉。
それを俺が言ってしまった。

『葵は死んだんだ!』

くそつたれ!

控えめなノックをして1人の医師が部屋に入ってきた。

「皆さん今日はもう帰った方がいい。彼はあと2・3日目を覚まし
そうにない。」

嘘だ……。

2・3日?

ありえない。

一生かもしれないんだ。

「また明日、来なさい。」

しづしづと言った感じで皆が部屋を出ていく。
再度、隼人の顔を見る。

そして俺が最後に出ようとした時だった。

「後で戻ってこい。」

俺にだけ聞こえる声で誰かがそう言った。

嘘だろ？

そう思って隼人を見ると先程からと同じ体勢で眠っていた。

「螢？」

目を真つ赤にした奈緒が俺の名を呼ぶ。

「い、今行く……。」

部屋を出る間際にもう一度隼人を見る。

右手が掛け布団から出て親指以外の4本立てていた。

左手のリストバンドを誰にも見つからないように外し、鞆に突っ込む。

病院を出たあたりで今気づいたと言わんばかりの演技する。

「病室にリストバンド忘れてきた。」

変に思われないように自然体で振る舞う。

たぶん奈緒辺りが『待つ』と言うはずだ。

「待つてるから早く取りに行ってきて。」

やはり奈緒がそう口にする。

「いや先に行つててくれ。」

「でも・・・！」

「優、任せた」

優に眼で合図を送る。

すると優は眼で訴えかけてきた。

『何があつたか後で教える。あと演技下手だ。』

演技下手は余計だ。

「分かった。」

それを聞いて歩き出す。

「ちよっ！」

奈緒が何か言っているが無視して歩き続ける。

4本指の示す意味は『戻れ』

病室の前まで来て、ノックするか迷ったがノックしないで中に入った。

「来たぞ？」

「おう。」

確かに隼人は返事をした。

そして目を開けて、体を起こし『うーん！』と言いながら体を伸ばした。

「悪いな。寝たフリしてて。」

俺は何故寝たフリをしていたとか、何故俺だけを呼んだなどの疑問よりも違った疑問が浮かび上がった。
それは・・・

なんでお前が謝るんだ？

謝らないといけないのは俺のはず。

「いや・・・その・・・」

「止めてくれて、ありがとな？」

違うだろ？

なんで……？
なんで俺を罵倒しない？

「俺どうかしてたわ。本当にありがとう。」

「違うだろ？」

「は？」

分からない。

そう言いたげな顔をしている。

「なんで俺を罵らない？怒らない？俺はお前に」

「葵は死んだ。それは事実だ。」

「……もしかしたら、もう目を覚まさなかったかもしれないんだぞ？」

彼は一度ため息を吐いて、呆れ顔で俺を見る。

「お前さぁ……俺が倒れたの自分のせいだとも言いたいわけ？」

「だってそうだろ？あの状況下で葵は死んだんだと口にするべきじゃないかった。」

今度はやれやれと首を振る。

「偶々、葵に似ている子を見て騒ぎだした俺をお前は必死に止めよ

うした。違う?」

「違うない……。」

実際はそうだ。

俺は隼人の暴走を止めようとした。

「だろ? だったら悪いのは俺だけ。」

でも

「……俺にも非がある。」

「いい加減わかれ。悪いのは俺だけだ。」

少し怒り混じりの声。

少しだが真剣に怒る隼人は久しぶりだった。

「俺、今日あの子がお前と衝突するより前に見た。」

「……それが?」

「お前にその子の事を言っていれば、こんな事態にはならなかったはずだ。」

「……それがお前の言う『非』か?」

首を縦に真っ直ぐ動かす。

「バーカ。」

バーカ、その台詞の意図が読めず黙っていると隼人はまた口を開いた。

「普段のお前なら分かるだろ？もっと冷静になれ。例えお前が事前に教えてくれたとしても結局は倒れていたと思うぞ？」

「そん」

「そんな事はない？あるさ。冷静になれ。」

「俺は冷静だ。」

「だったら分かるだろ？もしお前が葵に似た子を見た俺に言つたとする。すると俺はどうすると思う？」

答えは明白だった。

「……その子に会いに行く。」

「正解。そしてその子に会ったとすると、最近記憶が混乱した俺はどうなる？」

「また記憶が混乱して、葵と勘違いして騒ぎ出す……。」

「最終的には？」

「……気を……失う。」

でも、もしかしたら違ったかもしれない。
似てるな……。で終わったかもしれない。

「な？悪いのは俺自身。オツケー？」

「……………」

「オツケー？」

オツケーなわけない。

「冷静になって分かったよ。誰も悪くない。無論、お前もだ。」

「俺も……。か……。ハハ………」

隼人の乾いた笑い声は、俺には異常なまでに悲しく聞こえた。

たぶん……。それは

「明日……。ぶつかった子連れてきてくんない？俺謝った感じがしないから。」

3年前のあの時と

「ああ。でも大丈夫か？」

「大丈夫。明日までに自分の中で整理つけとく。」

「そっか……。なら任せろ。」

「まかせた。ってもう暗いな……。奈緒が心配してるぞ?」

「そのまま、返す。」

「確かにな。……。じゃ。」

「おう。」

同じ笑い方だったから。

病院を出ると携帯がメールを知らせる音を発した。
隼人からだった。

《和樹が心配だ。任せたぞ親友。》

和樹……。

確かに心配だ。

隼人と同じく心に大きな傷を受けた彼は大丈夫なんだろうか?
また心配の種が増えた。

《任されたぜ!親友。》

メールを送信して、どっと疲れが出てきた。

優に真実を言うか言わないか迷いつつ、家に向かって歩き始めた。

第38話

「昨日は本当にゴメン！」

「ああ頭を上げてください!!」

謝る和樹に、あわわと慌てふためく少女。
現在昼休み。

優と紫織ちゃんに頼み、昨日、迷惑をかけた葵そっくりの少女を昼食に誘ってもらった。

そして今に至る。

「和樹、もう頭上げなよ？この子困ってるぞ？」

「うつ・・・重ね重ね申し訳ありません。」

俺の言葉に反応するのはいいんだけどさあ・・・。

「ああああ頭、ああ上げてください。」

さらに頭下げてどうするよ？

「だから、この子が困ってるから頭、上・げ・ろ！」

「うつ・・・まことに申し訳ございません。」

「あああの、頭・・・あう・・・。」

これは正しく永久ループだな。

俺が発言 頭下げる 少女慌てるってな具合に。
ならば和樹はシカトでいきますかね？

「え」と・・・非常に言いにくいんだけど。」

「はい！」

緊張しないように笑顔で言ったのに・・・。

俺の笑顔は0円の価値もないのかと一瞬、悩んだがこれまた一瞬で
脳内メモリーから消す。

「名前、教えてくれないかな？」

「あ、はい。坂本マナです。愛と書いてマナと読みます。よろしく
お願いします。」

「愛ちゃん、俺は」

「火野先輩ですよね？」

エスパー？

「なんで知ってるのかな？」

「えっと・・・有名ですから。」

「・・・有名？」

「雑誌に載っていましたし・・・。」

「・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・。」

よし、軽めにツッコもう。

「あ」

「下田さんのお姉さんと付き合ってるってクラスの皆が噂してましたから。」

ニコリと笑い、さり気なく爆弾投下するのやめてください。
あと俺のツッコミを未然に防ぐのもやめてください。

「私達、付き合っていないから！デマだよ、それ！」

そんな力強く拒否しなくても・・・・・・・・。

「あ、下田さんのお姉さんですか？」

拒否しているんだから、改めて聞かなくても良くないか？

「そうよ？」

返事を聞くと俺と奈緒を何度も交互に見てくる。
なんか・・・・・・・・また爆弾投下しそつだな。

「確かにお似合いですね。」

笑顔で投下。

「ただだから、私達は付き合っていないんだってば!」

今なら血を吐ける。

生まれて初めて、そう思えた瞬間でした。

「あのさあ、飯食いません? 時間なくなりますよ?」

「私も優に賛成。」

賛成なのは良いんだけど何で実の姉をものごつつう睨んでるのですか?

気にするな。

気にしたら負けだぞ、螢。

・・・よし。

「じゃあ食べるか。和樹、いつまで、その状態で居るつもりだ?」

しかも土下座かよ!

「ごめん、っ?!」

何かに気づいた和樹は急に驚愕した面もちで立ち上がった。
何事?

「ど」

「どうしたの?」

美帆、俺の台詞を奪うな。

「パンが．．．潰れて。」

「『『『『『いただきます。』『』『』『』」

潰れても食える。

って俺と優はまだ弁当受け取ってないんだけど？
もしかして？！

「はい。」

奈緒の手には弁当が。
よかったあ．．．。

「サンキュー。」

さてさて．．．中身は？
唐揚げ発見！！
箸にとり．．．パクリと。

「うん、美味いっす。」

「ありがとう。」

いつもの様に感想を述べる。
ホントに美味いわ。
中学時代の悲劇が嘘のようだ。

「本当に付き合っていないんですか？」

「付き合っていない。」

「息ぴったしですね？」

「からかってます？」

「先輩なめんなよ?!」

「愛? 年上をからかったらダメだよ?」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!」

すごい勢いで俺達に……ではなく、笑顔ながら殺気を放つ紫織ちゃんに謝る。

このあと優と和樹の活躍で何とか場を落ち着かせ、平和的に食事（例の通り終始、優は苦しんでいた。）を終わらせ、これまた平和的に自己紹介をすませた。

隼人……君が倒れたのに比較的みんな元気だよ?

理由はね……昨日、優のみならず、いつものメンバーに君が目を覚ましていた事を告げたんだ。

さて夕方どうなるかな?

あ、因みに2人の会話の内容は言っていないから安心しろ。

テレパシー終了。

まあ届くわけないんだけどね（笑）

《ピッピー！》

遠くから救世主が笛を鳴らした音が聞こえて、1人苦笑した。

放課後に予定はないという愛ちゃんと約束をして1年組と別れた。
そして今、先生に呼び出された奈緒と美帆を見送り和樹と2人つきりとなった。

「和樹、」

「俺なら大丈夫だから。安心して。」

綺麗な青の瞳は空を見たままの状態でそう告げる。

「ホントにか？」

ゆっくりと力強く頷く。

「螢も分かっただろ？愛と葵は全く違う人間だって分かっただろ？」

「ん・・・まあな。」

顔はそつくなのに中身はまるで違った。

愛はホントに明るかった。

別に葵が暗かったわけではなくて、言い方を変えるなら物静かな子だった。

「俺はもう割り切れたから。」

「そつか。」

タイミングよく昼休み終了のチャイムが鳴り、慌てて教室に戻った。

第39話

午後の授業は気がつけば終わりを迎えていた。
来週の連絡も終わり、3人が俺の机に集まる。

「よし、行くか！」

行くとはもちろん隼人の所へであり、鞆を手に持ち歩き出した。

「部活は？」

「ブカツ？」

「何それ？」

その言葉の正しい解釈をできた時、部員に対しての、とてつもない罪悪感が芽生えた。

「・・・忘れてました。」

「キャプテンがそれではダメっしょ？」

美帆の口撃は俺の精神に膨大なるダメージを与えた。

「人間は忘れる動物だ！」

苦し紛れの言い訳は

「馬鹿。」

あっさりと切られた。

「・・・奈緒と和樹、あとは頼んだ。俺、部活が終わってから高速で行くから。」

「は？私も今から行きますけど？」

「へ？」

えっと・・・。

「マネージャーの仕事は？」

いや……そんな鋭い眼光を放たないで……。

「放棄！！彼氏が入院してるのに部活に行くなんてありえないから！」

ありえないのか？？

「そつか……。なら行つてこい。」

「言われなくても行くつもり。じゃ部活頑張つて」

ニヤハハと笑い声を発しながら美帆は教室を出ていく。
後ろには和樹が続く。

「っで？お前は何をしている？」

なぜか奈緒はその場を動かず、うーん……と声に出しながら難しい顔をしていた。

「私は……螢を待ちたい。」

ドキツとした。

可愛い顔で待ちたい、なんて言われちゃあドキツとしちゃうって！

「ありがとう。」

だが、そんな気持ちを顔に出さずに会話を続けた。

「急げ！」

「待ってってば！」

焦っている俺は靴を履き替えている奈緒を急かす。

「早く！じゃないと奴等がくる！」

「分かってるから！・・・はい終了。」

よし！

コレで逃げられる。

「見つけましたあ！！！」

「「！」「」

力いっぱい声を張り上げた女子は獲物を見つけたハンターのようにギラギラした目で俺を見ている。

って冷静に解説している場合じゃねえ！

「走るぞ？！」

「うん！」

「あ、待ってください！」

走り出した時だった。

あの嫌な足音達が聞こえたのは。

《きや　　！螢様！！》

刹那

奈緒の顔が曇った。

どうしたんだ？

《待ってくださいあい》

なんちゆうスピードや！？

このままじゃ追いつかれちまう。

ガシッ！

「え？」

「緊急事態だ！手、離すなよ？！」

「うん！」

曇ったと思いきや快晴ですか？

まあ俺はその笑顔が何よりも好きなんだけどね。

握り返してきた手をさらに強く握り、走るスピードを上げる。
それでも病院の近くの交差点までファンクラブの連中はついてきていた

。間違いなく奴等はハンターだ。

「大丈夫か？」

「ハアハア・・・水・・・。」

「お、おう。」

疲れた様子の奈緒を病院の敷地内にある中庭のベンチに座らせ、俺は自動販売機で冷たいお茶を買おうと移動する。

いざ、買おうと財布を開いて絶望した。

何故なら、財布の中には126円しか入っていなかったのだ。

1本しか買えない・・・。

しかたなく1本だけ買い、それを奈緒をに渡す。

「ありがとう・・・。」

美味しそうにお茶を飲む。

後で、

優あたりに奢ってもらおう。

そんな事を考えていると、奈緒は俺が何も持っていないことに気づいた。

「螢、飲み物は？」

ストレートな質問。

「俺は喉乾いてないから。」

上手く嘘をつく。

嘘が上手いって状況次第では最悪だね。
でもこの場合は良いと信じています！

「嘘つき。」

怒って表情とすまなそうな表情を足して2で割ったような顔をする
俺の想い人。

「何言ってるの？嘘なんてついてない。」

「また、ついた。おおよそ、飲み物を買おうとして財布を開いたら
130円しかなかったんでしょ？」

なんと・・・！！

ふっ・・・惜しいではないか。

「残念だけど金額だけが違う。」

「あら？それは、どうでだろうね？」

奈緒は全てを悟ったような顔つきになる。

「左ポケットに手をつ突っ込んでみたら？」

無言で左ポケットに手をつ込む。

・・・ハハハ。

うつそーん？！

掘んだを物を取り出して、鳥肌が立った。

「4円・・・。」

全てお見通しなのでしょうか？

「まだ半分ちよつと入ってるから。」

「サンキュー。」

俺の金で買ったのに礼を言うのは何か違和感があるな。

まあ・・・いいか。

そう思いお茶を飲む。

「あ、間接キス。」

「ブフッ！？ゲホ、ゲホ。」

喉が痛い・・・。

少し涙目で、睨むように後ろを見た。

「隼人！」

殴れ。

何の躊躇もなく脳がそう判断した。

くらえ！

必殺、右ス・・・

「アハハハ、奈緒の顔が真っ赤だ！アハハハハ！」

え？っと思い、奈緒を見てみると真っ赤になってフリーズしていた。

『間接キス』

その単語が頭の中でリピートされた時、俺の顔が平熱を軽く超えた。

「間接キスだけで、その反応かぁ・・・なんと若々しい。」

うん、コイツは鮫の餌にでもしてしまおう。

「貴様〜！」

「逃げるが勝ちってね。」

逃げ出した隼人を捕まえようと、追いかける。

だが部活と先程の鬼ごっこで疲労がピークに達してしまい、簡単に逃げられてしまった。

「畜生・・・！」

ひとまず奈緒の座っているベンチまで戻る。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

目ヲ合ワサレナイデス。

五分後。

「病室に行こう？」

沈黙を破った俺は、やはり目を合わせれなかった。

「うん。」

そして、会話なしの状態で病室の前まできた。

開けたら、まず1発。

開けたら、まず1発。

開けたら、まず1発。

開けたら、まず1発。

開けたら、まず1発。

開けたら、まず1発。

開けたら、まず1発。

呪文のように何度も心中で呟き、気が済んだところでドアノブに手をかけた。

《ガチャ！》

開けたら

《ボタン。》

閉める。

これ我が家の常識ね。

「なに……してるの？」

「え〜と〜……言うなれば自己防衛機能が勝手に作用した。」

「え？」

言えない。

何で閉じたかは、言えない。

「奈緒……今日はもう帰ろっか？ いや、帰るぞ。 って開けるな！」

俺の『開けるな』を無視して、奈緒はドアを開けようとする。

《キィ〜。》

奈緒がドアを開けると、先程と同じ光景が目に入ってきた。

《ボタン！》

ドアを閉じたて少し経ってから、俺達は静かに素早く、その場を立ち去った。

そして今、病院近くの交差点付近。

「見なかったことにしような？」

「それが賢明ね。」

そうドアの向こうは見なかったことにしたい。

地獄絵図。

恐怖のあまり、部屋の角で目尻に涙を溜めて震える紫織ちゃんと愛ちゃん。

必死に止めようとする優と和樹。

そして恐怖の対象である、隼人の胸ぐらを掴みつつ、殴る蹴るの美帆。

殴られている隼人は安らかに眠っていた。

口から血を流しながら……。

あの美帆の笑顔は一生、脳から消えることはない。
恐怖。

そう、あれは恐怖だった。

そして俺達はその恐怖から逃げた。

見て見ぬフリをして5人を見捨てた。

夕焼けが隼人の口から流れる血の色と被った。

「落ち着いてくだグフ?!」

「黙ってて。」

「美帆、落ちガハ?!」

「離しなさい。」

「きゃっ・・・!」

「あう・・・あ・・・。」

「・・・。」

兄貴は鬼を見たことがあるか？俺はある。言っておくが鬼は絶対に怒らせないように努めなきゃ天国なんてすぐそこだぜ？

（火野優、後日談）

第40話

隼人も無事(?)退院し、日常が帰ってきた。

「あ〜ん」

「あ〜グフ!?!」

ラブラブモード強制終了。

「隼人さんノビちゃいましたね。えい」

「あ、私もやるう」

愛ちゃん紫織ちゃんコンビは、そこら辺に落ちていたと思われる木の枝で隼人をつき始める。

「螢、味の方はどう?」

「美味いっす。」

「良かった」

うん、可愛い。

「何で2人は付き合わないの?」

「「五月蠅い!」」

「付き合えばいいのに。」

そう言っただけ息を吐き、またパンを頬ばる。

和樹さん、もうそろそろ告白しようとしてたんだから、そんな事言わないでください。

「コラッ！」

「きゃっ！ごめんなさい。」

「キャハハ！」

笑顔の3人が俺と奈緒の目の前を横切った。

また・・・優が苦しんでる。

もう、これは定番化しているな。

「ふう、痛かった。」

「お前、回復するの早くなったな？」

前は結構眠ってたのに。

「そうなんだよねえ。何か病室で気を失ってから早くなったなみたい。でも、変なんだ。なんで気を失ったか記憶にないんだ。」

俺の脳にはキツチリ残ってますよ？

殴る美帆様の笑顔を。

「そう言えば愛ちゃんと話したのか？」

「うん。でも・・・葵の事を聞いてこないんだ。」

「そう・・・なんだ・・・？」

そう言つて笑顔で走り回る愛ちゃんを目で追つ。

「聞けないんだよ、きつと。」

「俺も奈緒に同意見。たぶん愛ちゃん聞きたいんだと思うよ？でも、また隼人が倒れると嫌だから聞かないんだよ。」

和樹の言葉に奈緒はウンウンと首を縦に動かす。

「かもな・・・。」

俺は曖昧に答えた。

だって人の気持ちや思っているは本人以外には分からないから。

「今日部活ないよな？」

「おう・・・どうした？」

真剣な顔つきで俺を・・・いや、俺達を見てくる。

「放課後、話すから。いいか？」

「何で俺に同意を求め・・・。」

分かってしまった。

俺は隼人が次に発するであろう言葉が分かってしまった。

ゆっくりと隼人の前に手を出す。

「引き受けた。」

それだけで充分だった。

意味を理解した隼人は苦笑しながら、俺の手を握った。

「ありがとう。」

「おう。」

なんか・・・友情って感じがする。

「私達にも分かるように会話してくれない？」

「「以下同文」」

いつの間にか優まで混じって俺達の意図を知ろうと睨んでくる。

「放課後になれば分かるさ。」

俺はそう言って、また食事を再開した。

時間が経つのは早く、只今の時刻、午後5時。
場所、学校付近のファミレス。

「つで何で全員集合してるんですか？」

今から何があるのかは分からない優は疑問の声を上げた。
俺は隼人に目で合図を送る。

「俺達の出会いを愛ちゃんに話そうと思う。どう？」

「いいんですか？」

キラキラと目を輝かせる愛ちゃん。

明るく対処する隼人とは裏腹に暗くなる俺以外の3人。
知っているから。

この後、に隼人が口にする言葉を知っているから。

「それと葵の事……知りたくないか？」

愛ちゃんの目からは輝きが消え、戸惑いの色になる。

「あ……でも……」

「どうする？」

「……」

愛ちゃんが俯き、10秒ほど沈黙が続いた。

「葵さんの事……聞かせてください。」

上げた顔は真剣そのものだった。

「もちろん。螢。」

ここから俺の出番ですか。
意外と早かったな。

「あいよ。さあてと……初めに言っておくぞ？後で話すが俺と隼人は皆に隠し事をしている。美帆に関しては嘘までついた。」

「嘘って……何を？」

「後で話すって言っただろ？まずは俺達の始まりと今を愛ちゃんに話してからだ。」

「わかったわよ。」

ブスツとした顔になる。
当然と言ったら当然かな？

「んじゃ、昔話……っても4年前だけど……まあいい始まり始まり。」

「ちょっと待って！」

和樹が止めに入った。

「何で隼人じゃなくて、螢が話すのさ？」

ああその事ね。

「記憶上の問題。コレだけ言えばわかるだろ？」

「・・・理解した。」

そう・・・記憶上の問題、そして誰よりも隼人の近くにいた俺が話すのが妥当なんだ。

「じゃ・・・始めるな。俺達の出会いは最悪だった。」

そう言うと2年組は全員苦笑した。

「あれは入学式の日・・・」

4年前

桜の花びらがが舞う季節、当時新1年生として俺は入学式を迎えていた。

とある教室の壁に貼られたクラス割りの紙をドキドキ感を楽しみながら自分の名前を探していた。

「私と螢は同じ2組だよ」

俺の楽しみを奪ったのは言わなくてもわかるだろうが、あえて言う。

現在の想い人だと。

「また一緒かよ！」

ツッコまずには居られなかった。

生まれてこの方、奈緒と違うクラスになったことがないのだ。（現在進行形）

「わ私だって、好きで毎回螢と」

「分かったから早く教室に行こうぜ？」

「ムウゝ・・・。」

頬を膨らましながらか俺の横を歩く。

何に怒ってんでしょうね？

教室に入ると他に生徒は来ていなかった。

どこに座ればいいのか分からずキョロキョロしていると黒板の文字が目にとまった。

《席は自由だよん》

なぜに？

そう思いながらも1番奥の1番後ろに座った。
隣には当然のように奈緒の姿がある。

「どんな人達がいるのか？」

「さあ？」

興味のない俺は適当に答えると奈緒はツマラナそうな表情になる。

「アンタにはワクワクとかドキドキと言ったら感情がないの？」

失礼な！

「ドキドキと言った感情なら先程のクラス割りの時にあったけど、奈緒によって消された。」

「なっ！？ちょ」

「火野螢！」

奈緒の声は俺の名前を叫ぶ声に遮られた。
てゆうか

「どちらさんですか？」

ドア付近で俺の名前を叫ぶ少年は間違いなく新1年生なのだが見たことがなかった。

「パア ス！」

俺の言葉は無視ですか！？
てかパスって……

パス！？

少年は手に持っていたバスケットボールを俺めがけて投げた。
俺はキャッチできるように構える。

いきなりだっただけど・・・取れる。

そう確信したときだった。

ボールの軌道に本を読みながら歩いている別の少年が入ってきた。

「危ない！」

奈緒が叫んだが時すでに遅し、ボールは少年の頭に直撃した。
少年は持っていた本と一緒に倒れていく。

《ゴツ！》

骨と骨が衝突したような鈍い音がした。

「痛ったあい！」

「痛たた、大丈夫?!」

解説しよう。

本の少年は勢い良く隣に座っていた少女の頭に頭を衝突させたのだ！

「大丈夫じゃないわよ!？何すんのよ？」

そうだよねえ・・・。

いきなり頭突きされちゃキレちゃいますよねえ・・・。

「あの人達がボールで遊んでたらしくて……頭に当てられて、倒れた先が君の頭の上だったわけで……。」

うんう……

あの人達？

もしかして俺が含まれてる？
って何でこっちを指さすの？！

「ちょっとアンタ達、教室でボール投げ合ってんじゃないわよ！？」

明らかに怒っている少女は俺と奈緒のもとへ歩み寄ってきた。

「ちょい待ち！俺達は何もしてないぞ？！」

「嘘をつかない！アンタ」

「螢は嘘ついてないよ！」

援軍！

これで勝てる。

まあ戦ってるわけではないけど……。

「彼女さんは引っ込んでて！！」

「誰が彼女だ！？」

しまった！

ついいつもの癖で・・・！

「だいたいアイツが急にボール投げてきたんだって！」

「「どれ！？」」

「「アレ！」」

必死になってボール野郎を指差す。

「でも君はあの友達とボールを投げ合ったって事には変わらないよ？」

本野郎も明らかにキレていた。

「君、瞳が青なんだ？」

場違いの台詞がさらに彼をキレさせてしまったらしく青筋が見えた。

「ちちょっと待って！ホントのホントに螢は何もしてないんだって！」

「親しい人の証言は当てにならないから。」

「いやだから！俺じゃなくてアイツが悪いんだって！」

「だいたい瞳の色は今関係ないだろ？」

コイツ手強いっす。

あ、あっちでも何かしてる。

「ねえ・・・痛かったんだけど?!」

「いやゝゴメン。ついウツカリ。」

ボール野郎は今ウツカリって言いましたか？
ウツカリ??

ピーピー!

日常モードから処刑モードへコードを変更します。
ピーピー!
変更完了。

「おい、お前。」

「何かな?」

コイツ空気を読めないんだな?
よく分かった。

「俺を巻き込んでいて謝罪なしか?」

「ちょ!?!? 螢落ち着いて。」

とりあえず今は奈緒をシカト。

「あ、ゴメン。」

頭を下げて謝罪の言葉を述べるが許す気は始めからない。
あるはずがない。

「天国逝けや。」

殴ろうと勢い良く手を振り上げた時だった。

「痛！」

後ろにいた本野郎の顔に拳がヒットした。

ヤバイよね？

これ流石にヤバイよね？

「飽きるほどに三途の川を・・・見てきなよ！」

完全にキレた本野郎は俺めがけて拳をつきだしてきた。
俺は体を横に反らして攻撃を避けた。

「痛つてえ！」

本野郎の拳はボール野郎の顔面に直撃。

「おゝまゝえゝ！」

ヤバイ・・・。

何とかしてこの危機を乗り越えなくては！

「痛ったあああ！？」

「さっきのお返しよ！」

振り返ると少女が本野郎の後頭部を殴ったと思われる図になっていた。

「貴様等！何やつとるかあ？！」

あ、もしかして俺終わった？

そして現在職員室。

本当ならば今頃は体育館の中なんですけど？

そんな事を説教の最中に考えていたら、また怒られた。

「「「「失礼しました。「「「「

説教が終わり、職員室をあとにする。

「あのハゲうるさかったあ。」

「確かにウルサかったねえ。」

奈緒は少女に同意する。

「もとはと言えばアンタが全て悪いんでしょ？」

そう言われてボール野郎は笑顔で頷いた。

「まったく。私達はいいい迷惑だった。ねえ螢？」

「奈緒の言つとおりだ。」

「「「ねえ君達付き合つてんの？」「」」

「「ただの幼馴染！」」

当時の俺は奈緒に対して恋愛感情はなかった。

「まあどうでもいいけど。」

どうしても良いのなら言つな！

「そうだ。本野郎さん。」

「誰が本野郎だよ?!」

「だって名前知らないから。」

「俺の名前は和樹。鏡山和樹だよ。」

「和樹、殴つて悪かった。ゴメン。」

「いや俺こそ殴りかかってゴメン。」

よくよく考えてみれば俺と奈緒は無傷だ。
奈緒は当然だけど、俺は奇跡じゃねえ？

「君の名前は？」

「火野螢。螢って呼んでくれ。」

「うん。悪かったね。コレからは宜しく。」

和樹からは完全に怒りはなくなっていた。
綺麗な青の瞳はいつまでも見ていたい、そんな風に思った。

「和樹・・・だっけ？叩いてゴメンね？」

「いや俺こそ頭突きしてゴメン。」

「良いのよ。全部コイツが悪いんだから。」

そう言ってボール野郎を指差す。

「ごめんなさい。」

ボール野郎は深々と・・・本当に深々と頭を下げた。

「もう頭あげなよ？えゝと・・・。」

「佐藤隼人が俺の名だよ。」

「隼人、顔殴って悪かったね？」

「いいよ、事の発端は俺だし。」

「そうだね。じゃあもいいや。」

「ひどい！」

「君達の名前教えてくれない？」

和樹は女子2人に話しかける。

「私は松本美帆。」

「私は下田奈緒だよ。ねえ和樹ってハーフ？」

「うん、イギリスと日本のハーフだよ。」

3人は仲良く話し始めた。

すると必然的に俺の話し相手は

「螢よろしくな！」

隼人か……。

「なあなんで俺の名前知ってたんだよ？」

「いやいや、お前は俺覚えてないの？」

は？

何言っただコイツ？

「初対面だろ？」

そう言っただ隼人はガックシと肩を落とした。

「何回……いや何十回試合したと思ってんだよ？」

試合した？

試合・・・・・・・・試合・・・・・・・・。

バスケット・・・・・・・・隼人・・・・・・・・。

あ。

「東小の隼人か?!」

「やつと思い出したか。」

「ユニフォーム着てないから分からなかった。」

「鬼!」

いや事実だって。

「螢、美帆がら人でカラオケ行こうって。親睦会だってよ?」

「おっ! いいね。行く」

「俺も行く〜。」

「決まり」

出会いは本当に最悪そのものだった。

でも隼人があの場所から、あのタイミングで、あの速さでボール投げてなかったら俺達は今みたいに一緒に居なかったかもしれない。出会いは最悪。

でもその後は全て最高だった。

あの12月21日さえなければ・・・・・・。

第40話（後書き）

次回、愛にそっくりの葵という少女が登場します。そして12月21日に何が起きたのか・・・作者頑張ります！

第41話

「これが俺達のはじまりなんだ。」

何度思い返しても、あの時の隼人はアホだったと思う。

「隼人さん・・・アホ？」

「優よ、そんな変なモノを見るような目で俺を見るな。そしてアホ言うな。」

だが隼人を『変なモノ』として見ているのは優のみならず、紫織ちゃんや愛ちゃんコンビも、そんな目で見ていた。

あ、隼人落ち込んでいる。
・・・どうでもいいや。

「じゃ続けるね？」

4年前

入学式に騒動を起こした5人はカラオケ以来、気がつけば、いつも一緒にいた。

逆にいない方が不自然と言っても過言ではない程に、仲が良かった。

「「お邪魔します。」」

1階の玄関付近から下田姉妹の元気のいい声がした。

「来たか……。」

只今の時刻は11時3分。

俺はベッドから立ち上がり、ジャケットを羽織り、必要な物をポケットに突っ込み階段を下る。

「オッス。」

「オッス！」

奈緒が元気よく俺を真似る。

一方、紫織ちゃんは

「こんばんわ。」

実に丁寧だった。

お辞儀までしています。

恐縮です。

「兄ちゃん、間に合う?。」

この頃は優は『兄貴』と呼んでいなかった。
可愛かったなあ……この年までは。

（よけいなお世話だ! by 優）

「余裕余裕 じゃお袋、行ってくる。」

「気をつけてね？もし優や奈緒や紫織が怪我でもしたら・・・分かってるよね？」

なぜ俺に全責任があるのですか？

そんなお袋を無視して家を出たら、後ろからフライパンが飛んできて頭にヒットした。

「あんのクソ婆！」

後頭部を抑えながら歩いている俺はスッゲー格好悪いと思う。

「クスクス。もう皆来てるかな？」

そんな俺を見て奈緒は笑っている。
笑うんじゃないねえ・・・！

「かもな。さつき美帆から着いたメールがきたしな・・・。」

怒りを抑え、冷静に対処する。ふ・・・大人に近づいた気がするぜ！

「兄ちゃん、僕達も来て良かったの？」

この頃は優は『俺』ではなく、『僕』だったのだ。
可愛かったなあ・・・この年までは。
(よけいなお世話だパート2！by優)

「大丈夫だから、心配寸なつて！なあ？」

奈緒に同意を求める。

「そうだよ？皆良い人達ばっかだから。ねえ？」

また俺？

「そうそう、友達も楽しみにしてるって言ってたぞ。なあ？」

「うん。それに友達の1人が妹連れて来るって言ってたよ。しかも
紫織達と同じ6年生だって。ねえ？」

だから何故また俺に戻す？

「噂をすればは？！」

突如、背後に現れた人物の顔に俺の裏拳がめり込んだ。
振り返り顔を確認。

「すまん、つい癖で。」

「その癖直せ！殴られる俺の身になれ！」

だったら普通に登場しろ。

毎度奇妙な登場するから、そんな目に遭うんだっつもの。

まあ今回は口に出さないでおこう。

「口に出てるよ?。」

呆れ顔で奈緒に言われる。

「おおよ?。」

「おおよ?じゃない!鬼かお前は!?。」

「まあまあ落ち着け隼^{はやぶさ}。」

「俺は隼^{はやぶさ}人だ!。」

「ワザとだ。気にするでない。そこでそちらの子は?。」

「ワザ・・・!?まあいい。コイツは俺の妹で葵^{あおい}って言うんだ。ほら、挨拶しろ。」

「・・・佐藤葵^{さとう あおい}です。よろしく・・・です。」

似てないなこの兄妹。

「よろしく。俺は螢^{はな}で、こっちが奈緒。」

「奈緒です。よろしく。」

「つでコイツが俺の弟の優で、こっちが奈緒の妹で紫織ちゃん。」

「初めまして。優です。」

「紫織です。よろしくです。」

「コイツ等は葵ちゃんと同じ年だから。」

ん？

品定めするみたいに俺達を見てくるんですけど……。

「仲良く……なれる？」

首を傾げて実の兄に問う。

「なれるなれる。なあ？」

だから何故俺にばかりフル？

「なれるさ。」

「螢さん、間に合うの？」

紫織ちゃんに言われ、バツと時計に目をやる。

……。

「遅刻だ……。」

急いで集合場所である、神社の入口に行くと、

「「遅い！」」

半ギレの美帆と和樹がいた。

「あれ？その子達は？」

キョトンとする美帆。

仕方なく再度自己紹介する。

「んじゃ、行くべ！？」

「「「ガッテン！」」」

このノリにツいて来れない3人は『え？』てきな表情になっていた。

《3・・・2・・・1！HAPPY NEW YEAR！》

叫ぶ。

みんなが叫ぶ。

とりあうず叫ぶ。

「イヤッホー！」

そして隼人がまた叫ぶ。

「ヨッシャ！願掛けに行こうぜ?!」

この男は何でこんなにテンション高めなのでしょうか？

理由はどうであれ、ウルサくて耳障りであり、目障りでもあった。

賽銭箱の目の前まで来て、さあ10円を投げようとモーションに入った時だった。

「あ、小銭がない。」

「おいおい。」

和樹が小銭がないと言い出した。

何やってんだか……。

もう1度財布を開き、10円玉を取り出す。

いざ渡そうとして、

「これ……あげる。」

渡せなかった。

って葵ちゃんが話してる！

「ありがとう、葵さん。」

「……………」

「???」

シーン……。

何……？

何で気まずくなってるの？

え？

何この空気？

この空気を作り出してるのは間違いなく葵ちゃん本人だな。

なんせジー……っと観察するように和樹の瞳を見ているから。」

えっと……あの……………」

困った様子の和樹。

対して葵ちゃんはと言つと……………。

「……………」

まだ和樹の瞳を見ていた。

和樹はハーフで瞳の色が青だ。

それも宝石のように綺麗な青。

まあガン見したくなるのも分からんでもない。

「そ、そろそろお金入れよつか？」

「そそうね？」

奈緒と美帆が何故か戸惑っていた。

そんな事はどうであれ、そろそろ投げるのには賛成だ。

「せえ・・・の！」

俺のかけ声で一斉に投げる。

そしてお願いする。

とくに願いがなかった俺は、お袋がもつと家事をする事を願った。

「ヨッシャアアア！次は御神籤つしょ！？」

バカはまだウルサかった。

テンション高過ぎ・・・。

妹を見習えと素で思う。

そう思いつつ御神籤を引く。

「やった 見て見て」

と言って御神籤を見せてくる奈緒さん。

「大吉か。俺もだぞ？」

と言って見せつけると

バツ！

「！？」

超スピードで奪われた。

そして瞬きもせずに読み始める。

「恋愛・・・できるはずがない。すれば災難にあう。」

そこだけ読むと奈緒は崩れた。

・・・意味が分からん。

てか大吉なのに、災難にあうのかよ！？

しかも、はずかないって・・・えらい強調してやがるな。

「螢さん、御神籤見せてください。」

と言うので紫織ちゃんに御神籤を渡す。

「恋愛・・・できない。」

そう言っただけで奈緒と同じく崩れた。

下田姉妹の周りに魂が見えるのは気のせいだろうか？

「お兄ちゃん・・・元気・・・です。」

声に反応して視線を移すと異様な光景が目にとまる。

「葵はどうだった？」

「大吉・・・。」

カパッと開いた隼人の口から魂が出てきた。
気になって隼人の手から御神籤を奪い取る。

「プッ！アハハ！」

見て笑った。

「アハハハ凶だ！アハハハ！！」

言っておくが笑ったのは俺だけじゃないぞ！？
佐藤兄妹以外の全員だ！

凶

願望、叶わない。

恋愛、ありえない。

失物、出てこない。

など最悪なものばかりだった。

隼人の近くにずっといた葵ちゃんは、愛想を尽かしたのか隼人から離れ、和樹の前へ移動した。

「……………」

そしてまた観察する。

俺だったら耐えられないな。

「珍しいかな？」

和樹の言葉にフルフルと首を動かす。

「綺麗な……色。いい……ね？」

あ……………笑った。

「葵、アンタ笑うと可愛いじゃない！」

葵ちゃんは美帆を見る。

そしてまた和樹を見て、首を傾げる。

「可愛いと思うよ？」

和樹がそう言っていると顔を赤くした。

「こら！！俺の妹に手を出すな！」

バカが復活しやがった。

俺の妹に手を出すな？

シスコンか？

「お兄ちゃん・・・嫌い。」

「ぬあ！？葵、なぜだ？！」

シスコン確定。

「・・・みんな帰ろうか？」

「」「」「」「賛成」「」「」

コクンと頷く葵ちゃん。

「ちょっと待って！」

隼人を無視して神社をあとにした。

第41話（後書き）

最近更新が遅れ気味ですいません。今、【光】の誤字などを直している最中でして・・・少しの間は更新が遅れると思います。本当に申し訳ありません。

第42話（前書き）

更新遅れてすいません！！しかも今回は短め・・・すいません！
！ m (| |) m

第42話

中学2年になると必然的に優達が中学1年生になるわけで……。

「あの……やっぱり珍しいのかな？」

現在昼休み。

ジーツと葵ちゃんに見られていた和樹はとうとう声を出した。

「違……う。」

そう呟くように言って赤くなる葵ちゃん。

「葵が照れてる！」

紫織の声に隼人のカット目が光った。

なんとも無駄なアビリティーをお持ちで……。

「和樹……葵に」

「黙れシスコン！」

俺と和樹の声が隼人の声を遮る。

「シスコンで何が悪い！」

あ、開き直った。

「私……が……いや……！」

おお、実の妹が拒否の意を表明した。

隼人に（精神的）大ダメージ。

これは昼休みは復活できそうにないな。

あ、体の穴という穴から煙が・・・。

ホント無駄なアビリティー持ってるな。

「兄貴、隼さんは何で顔は良いのにこんななの？」

「いや、俺に聞くな。本人に聞け。むしろ今更その疑問を抱くな。」

「はい。じゃあ俺の中の七不思議に入れとく。」

「ああ好きにしろ。」

と冷静に言ってますが『お前の七不思議って・・・？』と気になっている。

「お兄ちゃん・・・嫌い・・・！」

トドメ刺しちゃう！？

あ、煙の量が増えた。

ホント無駄な以下略。

「でも・・・和樹さん・・・好き。」

今何と!?

葵ちゃんの告白(?)に一同フリーズした。

「・・・・?」

葵ちゃんは『どうして固まってるの?』と言いたげな顔だ。

「俺も葵さん好きだよ。」

はい？！

みんな頭で理解できた後に騒ぎ出す。
むろん俺も例外ではない。

「それは異性としてなのですか！？」

優が叫びながら和樹に問いかけ、皆が息を潜めて見守る。

「うん。」

即答！？

なに、その満面の笑みは？！
でも・・・何故だか

「ま」

「眩しい・・・！」

奈緒が俺の台詞を奪った事は気になさらないでください。
むしろ忘れる！

「葵は異性として和樹さんが好きなの！？」

「うん。」

迷いはないのか？！
うつ・・・こちらも

「ま」

「眩しい。」

何で皆俺の台詞奪うかな？
因みに今は美帆が奪った。
あ、葵ちゃんが

「わ」

「笑ってる」

トドメは実の弟ですか？
ふ・・・5秒もあれば泣けるぜ？

「付き合ってくれる？」

「・・・うん・・・！」

この時の葵ちゃんの笑顔は1番輝いていた。

「」「」「」「」
おめでとう。」

皆でお祝いの言葉を述べる。

それに笑顔で答える新生カップル。

でも・・・何か大事な事を忘れている気がする。

何だっけ??

考え中

分からない。

「あれ？隼人が静かだね。」

それだ!!

奈緒さんナイスです！

「てつきり騒ぐかと思った。」

奈緒の言葉にウンウンと相槌をうつ。

だってその通りだから。

隼人を見るとそうとうショックだったのか、固まっていた。

「ったく！いつまでも固まってんじゃない！」

そう言つて俺は隼人の背中を思いっきり叩く。

いつもなら叫び声が木霊するのだが隼人は沈黙したまま、体制も変えず倒れた。

「おいおい。」

と凍っている隼人を起こそうとしてある異変に気づいた。
まさか・・・と思い口の前と鼻の下に手をかざす。

「螢？」

「マジで？」

奈緒に呼ばれハツとし、口を動かす。
って皆隼人を指さして笑っている。だが……

「コイツ息してねえ!!」

俺の叫び声に笑いが止まった。

「はあああああ!?!」

美帆の叫び声が屋上に木霊した。

「ちちちよっ!?!どうすんの?!」

和樹の言うとおり、どうするば!?!

この後、唯一冷静だった葵ちゃんが体育のマッスル先生を呼び、マッスル先生の救護のお陰で隼人は一命を取り留めた。

ヤツこそがMr・シスコンキングだ。

そして葵ちゃんは何故、保健の先生ではなくマッスル先生を連れてきたのか疑問を抱かずにはいらなかった。

第43話

いつも8人だった。

何をしてても8人。

流石に登下校はバラバラだったが、イベントには毎回8人で参加していた。

夏祭りではイチャイチャする和樹と葵ちゃんにシスコン隼人が嫉妬したり、皆が金魚すくいで競ったりと結構バカをやっていたりして楽しかった。

8人だから楽しかった。

「クリスマスどうしよっか？」

美帆から突然の質問。

「私、北海パークに行きたい！」

説明しよう！

奈緒の言う、北海パークとは電車で1時間程かかる遠い場所にできた最新の遊園地なのだ！！ただ・・・ネーミングセンスを疑うけどな。

「あ、私も行きたい。」

「賛成でよくないですか？」

美帆が1票入れ、紫織ちゃんがもう1票入れる。

「螢は・・・どうするの？」

不安げな顔で俺を見ないでくだらない？

「良いんじゃないの？なあ？」

隼人に話をフルと笑顔で頷いた。

「じゃあ決定！」

「あのく俺達の意見はなしなのかな？」

決定にした美帆に和樹が無駄な質問をする。

全くをもつて無駄だ。

もう1度言おう。

無駄だ。

「強制参加。」

「ハハハハ・・・だって。いいかな？」

和樹は自身の腕に抱きついている葵ちゃんに聞く。

「・・・うん。」

葵ちゃんは和樹とつきあい始めてから笑顔になる回数が増えていた。
順調に交際しているようだ。

うん、良いことだ。

「・・・・・・」

また親友が体操座りをしてブツブツと呟きだした。
何を言っているのか気になり、耳に神経を集中する。

「笑った・・・ああ、俺以外の男に笑いやがった・・・昔は俺にしか・・・ブツブツ。」

最後の方は聞き取れなかったが、聞き取れた範囲に感想を言わせてもらうと・・・
ただ一言、バカ？

「外・・・暗・・・い。」

君の兄殿も暗いです。
この世の終わりみたいな顔です。

「今日は解散！」

つで隼人以外の全員が俺の部屋から出て行った。

「明日何時に起きればいいんだ？」

「6時だ。」

「早いな・・・。」

明日から部活の合宿に行く俺達は隣町まで我が母上様の運転する車で移動するため隼人は今日は家に泊まるのだ。
なぜワザワザ泊まるのかと言うと

「迎えに行くのがメンドクさいから泊まらせなさい。」

以上母上様の命令にて御座います。

つで晩飯（俺が作った）を食べ、風呂（俺が洗い、入れた）に入り
もはや寝るだけとなった。

「電気消すぞ？」

「イヤン。」

カチツとな。

聞いた俺がバカだった。

「嫌だつていったのに。」

苛つくから本気で落ち込むな。

「葵ちゃん、和樹と付き合い始めてから、よく笑うようになったよな。兄としてどう思うよ？」

「うーん……良いことだと思うよ？家でも良く笑うようになったし。それに前に比べて人と会話することが多くなってる。結果としては良い思う。あ、でも相変わらずお笑い番組見ても笑わないけど。」

最後の言葉に俺は苦笑するしかなかった。

「ただ……兄離れしてほしくない!!」

「黙れシスコン！」

首にチョップすると隼人は眠った。

今の台詞がなければ尊敬していたのに……はあ。

この後、眠った隼人をどうするか悩んだ俺は悩むことがメンドクサいと思いますはじめ、そのまんまにして普通に寝た。

12月19日。

体育館内ではボールの跳ねる音、床とシューズが擦れる音、掛け声と色々な音が混じり合う中俺達は練習をしていた。

ハッキリと言わせてもらおう。

なんじゃこの練習量は？！

普通の練習の100000000倍キツイぞ？！

お陰様で部員の半数以上が倒れた。

練習中に聞こえた叫び声は次の通りにて御座います。

「もう・・・ダメ。」

「我が一生に悔いあり・・・。」

「ママあ・・・。」

「足があああああ!？」

他にも多数あったが叫んで倒れた奴らにただ1つ共通点があった。それは・・・。

「何人残った？」

「12つす。」

次の日、監督に現在いる部員の人数を知らせる。

叫び声を上げ倒れた連中の共通点。

それは夜逃げだ。

42人いた部員のうち30名の布団が朝起きると空だった。

「そうか。にしても毎年この時の夜逃げが多い。火野、これいじょう夜逃げさせてはならん。いいな？」

「・・・はい。」

だったら練習量減らせ、この鬼監督!!

「なんだ今のは？佐藤だけダッシュをプラス5往復。」

なぜ俺じゃなくて隼人なんだ？

あ、隼人涙目になってる。

睨むなら俺じゃなくて鬼監督にしろ。

「練習開始！」

その日も地獄だった。

「ハアハア・・・火野先輩・・・」

パタリ

「市川ああ！」

「佐藤・・・俺・・・」

パタリ

「藤堂おお！」

その日の倒れた人数は6人。

練習が終わり、疲れた体に鞭を打ち、旅館に戻った。

「螢・・・クリスマスは遠いな・・・。」

「遠いな・・・。」

そんな事を言っていると隼人は何か思い出したのか布団から飛び上がり、携帯を手取る。

「・・・もしもし？葵？」

こんのシスコンが！！

「もう練習キツくて・・・え？大丈夫大丈夫、怪我なんてしないから。」

どうやら隼人の体を心配しているらしい。

ええ妹さんや。

「おう！あ、螢に代わるから、ほい。」

ええええ！？

なぜチエンジする？！

何を話せばいいと思いながら受け取った電話を耳にもっていく。

「も、もしもし？」

《・・・もし・・・も・し？》

ここでいったん話が途切れてしまう。
隼人に眼でSOSを送るが笑顔でスルーしやがった。

「えっと・・・クリスマス楽しみだね？」

《・・・うん。いつ・・・ぱい・・・遊ぶ。和樹さん・・・楽しみ・・・言うてたから・・・葵も・・・楽しみ。》

愛されてるな和樹・・・。

「そっか。じゃあクリスマスの日にね。」

《・・・螢さん・・・怪我・・・しないで・・・ね？》

「ありがとう。じゃ隼人に代わるから。ほい。」

「代わったよん」

キモイ・・・。

会話は10分以上続いたが終始、隼人は楽しそうに笑っていた。

「おやすみ。よっしやあああ！明日も頑張るぜ！！」

電源ボタンを押した直後、隼人に10個の枕が襲いかかった。
「痛った！なにす・・・ごめんなさい。」

この後は部屋は静かだった。

「…………ん。」

破れた襖から光が入り、俺にだけ……しかも顔に当たっていた。

「あれ？」

隼人の布団が空だ。

「…………夜逃げ？ いやいや隼人とだぞ？！
などど１人で考えること数分。」

ひとまず下に降りて監督と合流しよう。

てなわけで下に降り食堂に入ると監督がいた。

おはようございます、と言う前に

「佐藤は緊急な用事で家に帰った。」

先手をうたれた。

監督の言葉に隼人が逃げたんじゃないと分かりホッとした。

「そっすか。分かりました。テレビでも見ます？」

「おおそうだな。」

監督の様子が変に見えたが何にも言わないでテレビをつけた。

俺は旅館を飛び出した。

「タクシー！」

タクシーに乗り、とある病院の前で降りる。
中に入ると見慣れたメンバーがいた。
皆が皆、魂の抜けた感じだった。

「……………奈緒？」

近寄り名前を呼ぶと奈緒はピクツと反応し、
ゆっくりと下げていた
頭を上げ、俺を見る。

「螢……？……うっつ……螢！」

突如として俺に抱きついてきた。

「うつあぁあ！」

奈緒は俺の胸の中で声を上げて泣き始めた。

それが伝染したかのように俺以外の皆が泣き始めた。

そんな中、テレビのニュースキャスター声が俺の耳に入ってきた。

第44話

「今でも、キャスターの言葉を一字一句間違いにいえる。」

そう言つて俺は目を瞑る。

「今日の午前2時頃、S市の佐藤さんの家に男が侵入し、一家を殺害する事件がありました。」

一旦ここで区切り、息を吸いまた続きを口にする。

「死亡したのは、父親の佐藤哲治さん42歳と母親である佐枝子さん。そして中学1年生の葵ちゃんの3名です。」

言い終わってから、ゆっくりと瞼を開く。

皆の視線は床に向いていた。

若干1名・・・隼人だけは前をしっかりと見ている。

「自分でも忘れたいと思つているのに忘れられないんだ。全て鮮明に覚えているんだ。葬式の日のことも…………。」

皆、知っているのだろうか？

俺と隼人が。

やがて愛ちゃんが口を開く。

「今・・・隼人さんは寂しくないんですか？」

「寂しくない。」

即答だった。

「家では1人つきりだけど……」

1人1人の顔を見る隼人。

最後に俺を見て笑顔になる。

「クサイ台詞かもしれないけど、皆がいるから寂しくなんてない。此処には俺の居場所がある。」

「そう……ですか。」

どんな表情をすれば分らず曖昧に笑う愛ちゃん。

ホントに顔は葵ちゃんそっくりだ。

気まずい空気が辺りを漂うが話を止めるわけにはいかない。

親友から引き受けた、この重大な仕事を放棄するわけにはいかないんだ。

「じゃ続き話すな？葵ちゃんが死んだと分かって俺は戻ってきた。

葬式はその日に行われ、もちろん出席した。俺は隼人に会っていないから大丈夫か心配でなかった。そして式場で隼人を見つけて、

」

チラリと隼人を見ると、一瞬だけ笑顔になり頷く。

「言っちゃ悪いが安心できなかった。コイツ……泣いてなかったんだ。式の最後の最後まで1回も涙を流さなかった。」

皆が一斉に隼人を見た。

やっぱり気づいてなかったんだ……。

「皆ショックで泣いているのに泣きもせず真っ直ぐ葵ちゃんや親父さんにお袋さんを見てたんだ。」

「そう言う螢だつて泣いてなかったじゃん。」

隼人の言葉は皆をさらに驚かせた。

だがそれも事実だった。

俺は泣かなかった。

隼人が心配と言うのもあつたが中々実感が沸かず泣けなかった。

「こつからは俺が話すとしようなか？ 終わりだけ頼む。」

迷いのない、その瞳で俺を見てくる隼人。

俺はここで引き下がる。

「虚勢張つてたんだ。俺は大丈夫だ、1人でも生きていける。笑つて過ごしてやるからつて死んだ家族に伝えるために泣かなかったんだ。ホントは今にも泣きそうだったのな？ いざ式が終わつてみると……なんて言うのかな……？ 心の中にポツカリと穴が空いたつて言うの？ とにかく何もやる気が起きなくて3日間飲まず食わずで仏壇の前にいたわけ。誰も来やしないし、別にこのまま死んでも良いかなあ……って思っていたら玄関から葵の声が聞こえた気がしたんだ。」

「まさか……葵さんに？」

愛ちゃんだけじゃない皆が食いつくように隼人を見る。

今から話す内容は俺と隼人しか知らない。

「ドアを開けたら居たのは怒った表情の螢だった。」

『なっ・・・なんて顔してんだよ?!ちゃんと飯食ってんのか?!』

『・・・関係ないだろ?』

『このバカ野郎が!』

「っで殴られた。」

そんなビツクリした顔で俺を見るな。
なんか怖いから。

『合宿中の電話で葵ちゃんは何て言っていた?!』

『・・・。。』

『体につけろって言っていたんだろ!?!』

螢の言っている事は当たっていた。

だから隼人は何も答えない。

答えられない。

『葵ちゃんが天国で心配するだろうが!!しっかりしろよ!?!なあ
!』

「でも俺さすがにキツくってさ・・・反論も反撃もせず、頷きも

せずに俯いてたら螢がいきなり立ち上がってメシ・・作り始めたんだ。」

隼人を無理やりテーブルに連れて行き、椅子に座らせる。

『ほら、食べ。』

出来上がったのは短時間の定番である焼き飯だった。

ジーツと見た後にゆつくりとした動作で手を動かし隼人は口に運ぶ。

『葵ちゃんの代わりにはなれねえけどさあ・・・。成るつもりもねえけどさあ・・・。俺は死ぬまでお前の親友で居続けてやる。』

ピタリと隼人の手が止まった。

『親友でいてやる。一緒にいてやるから・・・。くっ・・。』

泣いていた。

俯いているから分かりにくいが螢は涙を流していた。

『一緒にバカしてやるから・・・。』

『うつ・・く・・。』

『だから・・。』

『ぐう・・うつ・・。』

『だから、変な事考えるな。』

「2人とも声押し殺して泣いた。あの時の焼き飯の味は分らない。泣いたからってスツキリするわけじゃなかったさ。ただ何かしなきゃと思って螢に言ったんだ。」

『俺は何をすればいい？』

目を真っ赤にして隼人は螢に問う。

『笑え。まず、毎日が心から楽しめるようになれ。それが第1歩だ。』

「そう言われた。もし無理だったらどうすればいいって言ったら」

『俺が絶対に楽しめるようにしてやる。』

「だって。さすがに俺も呆氣にとられた。馬鹿かって。」

「馬鹿はお前だ。」

「ははは、そうだよな。学校始まってすぐだったかな？和樹がいなくなったのは？」

すると和樹は少々慌てた様子で弁解する。

「し、仕方ないだろ？父さんがイギリスに来てくれって言うから！」

「誰も責めてないって。そんで和樹もないし、まだ心から楽しめないでいたんだけどさ……そのお……ほら、アレだ……な？！」

俺に助けを求めるなアホ。

「美帆を好きになっただんだろうが。はい、それで？」

「そ、それで……こう好きって言うだけなのに何かウキウキ、わくわくってな感じで……俺がその事を螢に言ったらさ、笑うんだ。自分の事のように嬉しそうに笑うんだ。」

「嬉しかったんだ。悪いかな？」

仏頂面なのは恥ずかしさを誤魔化すためですが何か問題でも？

「ありがとう……。美帆は俺が告白した時どうなったか覚えてるよね？」

そりゃ覚えていなかったら悲惨だろうが。

「うん。手を眼に押し当てて涙流しながら好きだって言ってくれた。」

うん、知っている。

隼人に頼まれて陰から覗いてから。

「この頃からホント毎日が楽しくなってきたいた。家族との死を受け入れられていたと思っていた。螢。」

バトンタッチだな。

「じゃ話すぞ？最近、隼人は2度倒れた。1度目は合宿所で。2度目は学校な？」

「疲労だったんでしょ？」

美帆の言葉に俺は横に頭をふる。

「最近一家殺害事件が起きたよな？隼人はそのニュースを見て記憶が混乱、倒れた。これが真実だ。」

「え・・・？」

「ごめん美帆。心配かけたくなくて。」

隼人は困った表情で謝る。

「私についた嘘って・・・この事なの？」

「ああ。」

俺がそう答える美帆は悲しそうな表情になった。

悲しいのは分かるが・・・問題は次なんだよなあ・・・。

皆さんショックを受けなければいいけど……とくに愛ちゃんが心配だ。

「その時、2人で秘密にしようと決めた事があった。」

皆が皆、真剣な眼差しを俺に向ける。

「医者に言われてたんだ。隼人は今、精神が不安定の状態にありちよつとしたことで、また混乱して倒れるかもしれない。その時はいつ目を覚ますか分からない。もしかしたら2度と目を覚ます事はないかもしれないってね。」

「そんな大切なこと……何で!？」

机を思いっきり叩き立ち上がる奈緒。

「言ったらまた皆に気を使わせてしまっただろう?だから俺が螢に頼んで秘密にしてもらった。責任なら俺にある。」

「とにかく座。」

奈緒の腕を引っ張り座らせようとした時、奈緒の手は震えていた。長い付き合いだからかな?

奈緒の心が読めた。

奈緒は自分達を信頼してくれていないと思っている。それが悔しくて、泣きそうなのを堪えて震えている。何故かそれを理解できた瞬間、

「え?」

戸惑いの声を出す奈緒。

「「「「「あ?」「」「」」」」」

そして何してんだコイツ?と言いたげな声を出す一同。
無理もない。

俺がいきなり奈緒を抱きしめたんだから。

「奈緒や皆を信頼していなかったんじゃないから。」

「ど・・・どうして・・・?」

「バゝ力。何年一緒にいると思ってるんだよ。」

そつと優しく頭を数回撫でて奈緒を自分から引き離れた。

「皆も信頼していなかった訳じゃ・・・。」

何その目は?

マジ怖いんだけど??

紫織ちゃんからは殺意が感じられますよ?

「なななに?」

我ながら情けない事に声が震えている。

「真面目な話をしている最中に何で抱き合つかなあ・・・?普通はしないよねえ?」「落ち着け美帆!まず拳を下ろすんだ!」

病室での光景を思い出したのは……記憶がない隼人以外の全員だった。

「ししかたないだろ？奈緒が泣きそうだったんだから！」

事実。

事実だから。

だから……ジリジリと近寄らないでくれ！！

「美帆ごめんね。ホントなの。」

ピタリと美帆は止まった。

「分かった、奈緒を信じるわ。」

俺は信じないのか？

へこむぞ？

「真面目な話が兄貴のせいでぶち壊した。」

ぶち壊しをやたら強調する優。

「悪かったって！」

必死に謝る俺。

でも自分では正しい事をしたと信じています！

「なあ……皆で葵に会いに行かないか？愛ちゃんの紹介もあわせて。」

」

隼人の提案に皆が次々と賛成していく。

「螢は？」

全員が俺を見ってくる。

「もちろん行くさ。」

すると皆が笑顔になり立ち上がり、歩き出す。
葵ちゃんの眠る場所に向かって……。

「螢先輩、1つ聞いても良いですか？」

皆と距離をとって歩いていた俺にさり気なく近づき、そう言うてくる愛ちゃん。

「何をだ？」

自然と目で奈緒を追っている自分に『いい加減、好きだと言え』と言いつつ会話に徹する。

「隼人先輩の家族を殺した犯人は……捕まったんですか？」

首を横に動かす。

「じゃ・・・まだ逃亡ちゃうのですか？」

また首を横に動かす。

「死んだよ。」

俺の言葉に歩む足を止める愛ちゃん。

「遺書に『私が殺した。』みたいな事を書いてビルの屋上から飛び降りた・・・らしい。」

「そんな・・・。」

前から隼人が俺の名前を叫んでいる。

「今、行く！行こう？」

「・・・はい。」

佐藤家之墓。

2つの墓石が俺の目の前にある。

1つは隼人の両親のお墓。

もう1つのお墓には彫られた『葵』と言う文字がある。

途中で購入した線香の束に火をつけ墓石の前に置き、みなで合掌する。

「父さん、母さん、葵・・久しぶりだね？」

そう呟いた隼人は最近、身近に起きた出来事を次々と話す。
そして、

「初めまして、愛です。」

愛ちゃんが自己紹介する。

なんとなく葵ちゃんが目を丸くした・・・そんな気がした。
その後また隼人が話し始め、その話を俺達はずっと黙って聞いている。
た。

「じゃあ、また来るから。」

隼人はそう言って立ち上がり、墓石に背を向け歩き出し、皆ついて行くが和樹だけが動かなかった。

「和樹さん？帰らないんですか？」

優の言葉に和樹は微笑む。

「葵さんと話をしてから帰るとするよ。」

「じゃ俺達は待ち」

声を出す優の腕を掴んで連行する。

「兄貴？」

「今は・・・2人つきりにしてやろうぜ？」

そう言っていると優は何も言わず歩き出した。

そう・・・久しぶりの再開なのだから2人つきりに・・・。

第45話（前書き）

今回は和樹視点です。

第45話

「葵さん・・・ごめんね？」

1人残った和樹は頭を下げ謝罪する。

「ずっと・・・此処に來なくて、ごめんなさい。」

謝っても許されるわけがない。

逃げたんだから・・・。

俺は・・・僕は葵さんの死から逃げたんだ。

「正直に言つと父さんがイギリスに來て欲しいって言われた時、イエスと即答したんだ。葵さんの死と向かい合う事が怖くて逃げ出したんだ。助かったとも思つてしまった。・・・最低だよね？」

俯いたまま、自分を最低だと罵る。

「でも僕は・・・僕はまだ葵さんが好きなんだ。」

『もし』と言つ言葉がこの世には存在する。

人は過去を悔やんだ時などにこの『もし』と言つ言葉を使用する。

僕だつて今まで幾度となく使用した。

そして今も使おうとしている。

「僕は思つんだ・・・もし、あの日に戻れたら葵さんとその家族を救うのに・・・。もし、あの日がなければ今頃は葵さんと一緒に幸せに過ごせていたのかもしれない。もしなんて存在しないのにね？」

俯くと地面が濡れている事に気づいた。

雨かな？

そう思つて空を見上げるが雲一つない夕方だった。
まさかと思い自分の頬を触ると濡れていた。

「泣いてるなんて・・・情けないな。」

拳を握り締める和樹。

「好きな人のために涙を流す事は情けないとは思いません。」

声にギョツとして和樹は振り向く。

だが、そこには誰もいなかった。

空耳かな？

「葵さん・・・僕は・・・ホントに貴女が好きでした。今だって好きです。ただ・・・貴女の死から逃げ出した僕に貴女を好きでいる資格はないですね。」

「そんな事ないです！」

再び和樹は後ろを振り向く。

「葵さん・・・？」

そこには死んだはずの葵の姿があった。

「葵さんだって、和樹先輩の事好きだと思います。」

僕は何で勘違いしたのだろうか？

葵さんは死んだんだ。

それに葵さんはこんな大きな声で人と話さない。

「愛さん。いつからそこに??」

「一人称が僕に変わったあたりからです。」

それってかなり前だよね？

「愛する人の死を受け入れる事は難しいことです。隼人先輩だって螢先輩が居なければ立ち直れずじまい・だったのかもしれませんがたしかに和樹先輩が葵さんから逃げた事はいけないことだと思いません。でも今ちゃんと向き合おうとしてるんじゃないですか？死を受け入れようとしてるじゃないですか？」

そっくりだと思った。

この子は……螢にそっくりだ。

「それに私は、どんな理由であれ、好きな人のために涙を流す人は、好きな人を好きでいる資格があると思います。」

螢は他人の事を自分の事のように喜び、悲しみ、怒る。

今、僕を睨む愛さんのそう言う所も螢にそっくりだ。

「だから和樹先輩にも葵さんを好きでいる資格はあると思います。」

最後に微笑む彼女を見て、ますます螢に似ていると思った。

「ありがとう。」

「いえ、もし私が葵さんだったら、そう言いたいと思ったから口に
したんです。」

ほら・・・ね？

螢そっくりだ。

そう思うと笑ってしまった。

「な、なんで笑うんですか？！」

「プ・・・ククク。愛さんがあまりにも螢そっくりだから可笑しくて

」

「誉めているのか貶されているのか分かりません！」

プクーと頬を膨らませる。

顔は葵さんそっくりで性格は螢そっくり。

面白い子だ。

「誉めたんだよ。」

「そうですか。クシユン！」

女の子らしい噓くしゃみをする愛さん。

すでに夕陽はもう半分ほど沈みかけ、街灯が点灯していた。
それに少し肌寒く感じられる。

「葵さん、また来ます。愛さん、帰ろうか？」

「あい。」

『また・・・ね?』

葵さんがそう言った気がした。

「おはよう、螢、奈緒。」

朝学校に到着して2人に挨拶する。

「おは・・・くう・・・。。。」

挨拶の途中で螢は眠りに落ちた。
あ、奈緒が無理矢理起こした。

「おはよう、和樹。」

起きた螢は爽やかな笑顔で最後まで挨拶する。

「和樹、何か良いことでもあったの?」

奈緒は不思議そうに首を傾げながら僕にそう言ってくる。

「うん、僕の周りには良い人ばかりが居るんだって気づいた。」

「へえ……今なんて？」

驚いた顔で僕を見る螢と奈緒。

「だから僕の」

「僕!？」

声をシंकろする。

そう言えば一人称を戻したんだっけ？

「あはは……そつか……僕……か。」

「ふふふ……僕……ね？」

「そんなに嬉しい事なの？僕がまた僕と言うことが。」

「「うん。」」

息ピツタシだ。

何でだろう？

「ねえ……何で2人はつきあわないの？」

「「黙れ!」」

また、今日と言える楽しい日々が戻ってきた気がした。

第45話（後書き）

次回からはシリアスから一転します！・・・あくまで予定っす。

第46話

葵の墓に行ってから、1週間が経った。

あの日に変わったことは和樹さんが、また僕に戻ったぐらいで平和だった。

そう・・・だったのだ。

ついさっきまでは・・・。

「誰と・・・行くって？」

久しぶりに兄貴や奈緒さんと下校している今、つい先程に兄貴から発せられた言葉を合図に、穏やかな下校風景は地獄へと変わってしまった。

そして今、笑顔は笑顔な奈緒さん。

ただジワリ・・・ジワリ・・・と黒のオーラが背後から放出している。

「私とだよ」

勝ち誇った笑顔で紫織がそう言った瞬間、どす黒いオーラが一気に放出された。

俺は・・・兄貴にキレルタイミングを完璧に逃してしまった。

「前に雨の日に紫織ちゃんが迎えに来てくれて、その御礼に映画を見に行く事になってるんだ。」

バカな兄貴は奈緒さんの異変に全く気づいていない。

「残念だったね？お姉ちゃん。」

「何がなあゝ？」

お姉ちゃんのトコを可愛らしく言っている時点で挑発以外、何にもない。

この姉妹はホントに仲良いのに兄貴の事となると犬と猿の仲になるなあ。

何で俺は冷静に感想を述べているのだろうか？

「何だったら奈緒と優も一緒に行くか？」

空気読めよ兄貴。

それは今言ってはいけない台詞ナンバーワンだぜ。

ほら、紫織が俺に殺気を出してきやがった。

紫織の出す殺気に耐えられなかったのだろうか？

飛んでいたカラスが2羽、俺の後ろの民家に墜落した。

バタバタと音がしているから生きてる・・・たぶん。

「俺は行かない。」

正式には行けない。

「私も行かない。どうぞ楽しんできてください。」

嫌みたっぷりの言い方を兄貴にぶつけ奈緒さんは家に入ってしまった。兄貴はやっと奈緒さんが怒っている事に気づいたみたいだ。

「なあ……俺何かしたか？」

したよ。

ええ、しましたとも！

気づけよアホ野郎！

「じゃ螢さん、明日楽しみにしてますね。さよなら。」

幸せいっぱいな表情で紫織が家に入っていく。

さて、俺はアホな兄貴の質問に答えてやりますかね？

「もし俺が奈緒さんと2人つきりで映画見に行ったら兄貴はどう思うよ？」

気づかれていないとも思っているのだろうか？

実の弟である俺には最近の兄貴の行動パターンからすでに分かっている。

間違いなく兄貴は奈緒さんに恋をしている。

ホント……いまさらだな……。

「問題ないだろ？」

平然として顔でそう答える兄貴。

殴っても良いですか？

まあ俺が負けるけど……。

「どうしてそう思う？」

「だって優と奈緒は姉弟みたいなもんじゃなか。それより今は俺の質問に答えるよ。俺は何かしたか？」

姉弟だね・・・。

つまり兄貴は自分と紫織は兄妹みたいな関係だからデートと言っ言葉が脳に発生しないのか・・・。
そんな幸せな脳を持つ兄貴言える言葉はこれしかない。

「せいぜい苦しめクソ野郎。」

この直後、下田家の2階からビー玉が投げられ見事に俺の後頭部にめり込んだ。

どんだけの聴力だよ?!

苦しめと言った俺はその痛みに苦しみ、上を見ると紫織が笑顔で親指を地面に向け立てて、俺を見ていた。

そして翌日。

俺は今、兄貴と紫織をストーキングしている。
べつにしたいくしてしているわけではない。

変態の言い訳に過ぎないだ?
うるせえよ。

そもそも俺は変態じゃない。

「優君、出てきたわよ。」

尾行の十八番であるサングラスを身につけた奈緒さんが俺に兄貴達
が映画館から出てきた事を教える。

そう、ストーキングの言い出しっぺはこの人だ。

1人でしてて見つかったら言い訳できないからと言って俺を強制参
加させたのだ。

まあ俺もデートが気になっていたから即OKしたけど・・・。

「昼食みたいですな。」

2人はファミリーストラン、略してファミレスに入っていた。

「私達も入るわよ。」

俺は奈緒さんに続いて中に入った。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

例の如く笑顔の店員さんに迎えられた。

俺が2人だと答える。

「生憎今、喫煙席が満席でして・・・禁煙席でも宜しかったですか
？」

すると奈緒さんはムツとする。

「この人は煙草を吸いません。見掛けだけで判断するのは間違っています。」

そう言つて奈緒さんは兄貴達のいる禁煙席の方へ歩き出した。

「もも申し訳ありません。」

慌てて謝る店員を無視して俺は奈緒さんの座る席まで歩き出した。いくら俺が金髪でピアスしているからと言って、今の反応には些か頭にきた。

店員は悪気はなかったはずだ。

だからと言って許せるわけでもなく、俺は無視をした。

「ありがとうございます。」

奈緒さんに礼を言うと

「この店にはもう一生来ないわ。」

プンプンと怒りながら、そう返答してきた。

そう言えば去年、場所は違えども同じことがあった。

あの時は兄貴と2人で入って、店に入るやいなや店員が俺に向かって煙草は吸うか聞いてきた。

それを聞いた兄貴はその場でキレた。

最終的には店の経営者にまで怒鳴り散らしていた。

人を見掛けだけ簡単に判断するな！俺の弟はそんなもの吸わない！と大声で叫んだ。

その帰りに

『確かにお前の格好にも問題あるからな・・・少し自重しろ。』

そう言われたが俺は店で兄貴が俺を庇ってくれた事が嬉しくて元気

な返事をしてその会話を終えた。

「優君は何にする？」

メニューを見ながら俺に聞いてくる。

ざっと目を通した俺は無難に日替わりランチのハンバーグにした。後ろに座っている兄貴と紫織を食べながらも監視する。

少し離れているため話の内容は分からないが笑っているあたり楽しい内容なのだろう。

兄貴に向けられている紫織の笑顔。

今まで俺に向けられた事のない輝きを放っている。

そしてコレからも向けられない。

そんな事を思っていると胸がズキンと痛んだ。

痛みと同時に兄貴に嫉妬し、紫織に怒った。

いつも紫織と一緒にいるのは俺なんだ。

なのに何で兄貴が好きなんだ？！

何でそんなに嬉しそうに楽しそうに笑うんだよ？！

何で俺じゃ！

「優君？どうかしたの？」

「何でもないですよ？」

テーブルの下で拳を握っている自分がいた。

「そ、そう？あ、席を立つたわ。」

急いでサングラスを身につける俺と奈緒さん。

2人が店を出てすぐ、俺達も外に出た。

映画も見て、昼食取ったんだから帰れ！とテレパシーを紫織に送っ

たが応答はなかった。

紫織と並んで歩く兄貴。

そこはいつもなら俺の場所なんだ。
誰にも譲りたくない場所なんだ。

「公園に行く道だね？」

「そうですね。」

いつそう紫織を諦めようかと考えた事が多々あった。
だがその度に脳がそれを否定する。

そして、また苦しむ。

・・・気づかなければ良かったのかもしれない。

何で紫織を好きだって気づいてしまったんだろう？

気づかなければ良かったのに。

そうすれば兄貴に嫉妬すること、紫織に苛々すること、胸が痛むこともなかったはずだ。

「ゆ、優君！」

奈緒さんがひどく慌てた様子で俺を見てきた。

「何ですか？」

笑顔を作る。

「手！」

「…………手？」

前を歩く2人から自分の手に視線を移す。

「あは・・ははは。」

握り拳に力を加えすぎた俺の手からは血が流れ出ていた。
コレなら誰でも驚くよな？

「俺って馬鹿ですね……………すみません。」

「そ、それより止血しないと！あ！！！」

バックに手を突っ込んだ奈緒さんは何かに気づいた顔になる。

「ハンカチ忘れて来ちゃった…………。」

「そんな俺が悪いんですから気にしないでください。」

《トン》

歩いていた俺は何かに…………いや訂正、誰かに衝突した。

「すみません。」

さらに訂正します。

衝突したのは兄貴でした。

つまりピンチですね。

「2人で何してんの？」

兄貴はキョトンとした顔で俺の顔を覗きこむ。

ストーリーキングされいた事実には気づかない我が兄上様。

隣の奈緒さんは同様丸出し状態で、紫織は不機嫌になっている。
さて、どうしたものか？

A・事実を話す。

B・偶々だと嘘をつく。

C・逃げる。

個人的にはCなのだが、ここはあえてBでいく。

「偶々だ。奈緒さんともさつきそこでバッタリ会っただけ。じゃ俺は帰宅中だったからコレで。」

俺は回れ右をする。

「優！ちよつと待ちなさい！！」

まさか・・・嘘がバレたか？

再度回れ右でもとの状態に戻る。

「血が出てるじゃない！」

あ、そう言えば。

手からは未だに血が流れ出ていた。

「ちよつと来なさい！」

紫織は俺の腕を掴み水道の前までやってきた。
蛇口を捻ると水がでてきた。

「ほら、洗う。」

俺が返答する間もなく流れる水に手をかざす。
水が沁みて少し痛みを感じた。

「はい、手を出して。」

「は？」

「良いから出す！」

氣迫負けた俺は黙って手を前に出す。
紫織はそれを確認するとバックからハンカチを取り出し、俺の怪我
をしている手に結んだ。

「よし、あとは家に帰ってから消毒しなさい。」

「・・・・・・。」

「聞ってるの？」

怪訝そうな顔で俺を見てくる紫織を見て俺は・・・・今後どうする
か決めた。

「聞ってる。ありがとう。」

「どういたしまして。」

笑顔の紫織。

ただどやはり、兄貴の時とは違った。

俺は握り拳を作らないように気をつけながら笑顔を作る。

そう・・・紫織に対し、初めて作り物の笑顔だ。

今までは自然と笑えていたし、作る必要なんて無かった。

「洗ったらポストにいれとく。あとさ・・・」

「なに？」

「明日から俺、一人で登下校するから。」

紫織から笑顔が消え去った。

「なん・・・で？」

「あと弁当も明日から作らなくて良いから。」

アホな兄貴と違って俺は直ぐに気づいた。

毎日、俺には紫織が、兄貴には奈緒さんが弁当を作っていることに不味くても紫織が作った物だから・・・完食した時に見せるあの嬉しそうな顔が好きだったから俺は毎日食べていた。だがそれも、もう終わりだ。

「そう言うことだから。」

紫織に背を向け歩き出す。

「ちょっと待ってよ！」

手首を掴み俺が歩くのを止めさせる。

「何がどう・・・」

俺の腕を掴んでいる紫織の手を引き剥がす。
すると紫織の声が止まった。
俺はまた笑顔を作る。

「さようなら。」

「え・・・？」

再び歩き出した俺を紫織は止めることはなかった。

もう傷つくのは嫌なんだ。

些細な優しさでも俺は喜んでしまう。

でも最後には傷ついてしまう。

もう、たくさんだ。

兄貴の近くにいる紫織をもう見たくない。

自分に向けられる事のないあの笑顔をもう見たくない。

だから・・・さよなら。

第47話（前書き）

お久しぶりです。なんかもう・・・激しくすいません！

第47話

「紫織と喧嘩でもしたの？」

堂々と前の席に座りジーツと俺の目を見てくる愛。
その席の人が横で困ってるだろうが……。

「喧嘩なんてしてない。」

「なら何で避けてるの？」

コイツ……性格が兄貴そっくりだ。

俺は黙って席を立ち、教室を後にした。

愛が何か叫んでいたが、耳を塞いでいたため聞こえなかった。
階段をダッシュで上がる。チャイムが鳴り響く中、俺は屋上の扉を開く。

久しぶりのサボリだ。

「……へ？」

予想外の出来事にマヌケな声を出してしまった。

「……君は誰だ？」

扉を開くと先客がいた。

しかも美人。

艶のある長い黒髪。

キレイに整った顔。

襟の刺繍からして2年生。

「そのまま返します。」

謎の女子生徒はピクと眉を動かした。

この顔……どっかで見た事がある。

「私の名前は竹内早苗^{たけうちさなえ}だ。君の名は何だ？」

その名を脳内で検索し見つけた。

……とんでもない人と会ってしまった。

「火野優。生徒会長が堂々とサボリですか？」

「どっかで聞いた事のある名前だな……。それと私はサボリではない。」

授業を抜け出し、屋上にいるという現実。

これをサボリと言わず、何というのだろうか？

「授業がツマラナイので抜け出したただけだ。」

「それは……サボリです。」

「……そうなのか？」

この人の常識とはいったい何なんでしょうか？
絶対に普通ではないのは確かだ。

「まあいい。とりあえず座ったらどうだ？」

自分のすぐ隣をバシバシと叩く生徒会長さん。

そこに座れと言うことか？

そう思いながらも、指定された場所に座る。

「君は・・・！」

何かに気づい顔つきになる。

「校則違反だらけじゃないか!？」

今更・・・？

「注意でもするつもりですか？」

生徒会長だもんな？

そりゃ注意するよ。

「私は生徒会長だ。」

うんうん。

知ってるから。

「風紀の事は生活委員に任せているから私には君を注意する義務はない。」

・・・俺の中で変な人と確定。

「それに興味がない。」

なら何故この話題を出したんだ？

「それで君はここでいったい何をしているんだ？」

人生ゲームじゃあるまいし……振り出しに戻るな！

「授業がツマラナイので抜け出してきました。」

「おお！私と一緒にではないか？」

嬉しそうに笑う顔がアイツと被った。

俺は急いで脳から消す。

忘れる……。

そうすれば楽になるんだ。

傷つく事もないんだ。

「おい、どうしたんだ？」

「……何でもないです。」

瞬時に笑顔を作る。

「嘘をつけ。そんな作り物の笑顔では私は誤魔化されないぞ？」

「……。」

なぜバレたんだ？

今までバレなかったのに……。

兄貴にすらバレなかったのに初対面のこの人は何故分かったんだ？

「優……！」

後方から俺を呼ぶ声がした。

だが振り返る気など毛頭無い。

分かったから……声の主が分かったから……。

「優！先生がアンタを呼んでるわよ！」

スタタタ　と急ぎ足で俺に近づき、腕を掴む。

コイツには生徒会長が見えていないのだろうか？

そんな疑問を浮かべながら手を振り払う。

「俺は行かない。戻れ。」

冷たい言葉。

俺だつて分かっている。

だからつて止めるわけもない。

「なんで……？そんな」

「戻れ。」

俺は声を遮った。

今、彼女がどんな顔をしていようと関係ない。

彼女が俺の言葉で傷つこうが関係ない。

俺はもう別れの言葉を述べたのだから。

「私が何かしたの？ねえ！？教えてよ！？」

黙って前を見つめる。

「頼むから……俺にもう近づくな。」

「何でそんな事を言うの！？」

「……“さよなら”と言ったはずだ。」

そう言つと彼女は走つて出て行つた。

「ふむ、先程の笑顔はこれが原因だな？」

今まで黙りきつていた生徒会長は納得した表情になる。
てゆうか鋭すぎでは……？

「君は彼女から逃げたのだな？」

「逃げてなどいない。」

「いいや逃げた。」

「違う！逃げて何ていない！俺は！」

傷つきたくないだけ……。

「君にとって彼女は特別な存在なのだろう？だったら逃げずに彼女を見るんだ。」

「……俺はもう決心した。だからアイツとは前みたいに接することはない。」

腰を上げ、屋上から出ようとドアノブを回す。

「生きているなら傷つかない事なんて有り得ない。それだけは覚え

ておいて欲しい。では、またな？火野優。」

無言でドアを開き中に入った。

傷つかない……それは有り得ない？

ホントに……？

早苗さんの言葉を理解しようと考えながら教室に入ると教師に怒鳴られた。

翌日の昼休み。

毎度なら兄貴達と合流し、紫織の手作り弁当を口に詰め込んでいる。だが今俺の居る場所はグラウンドの端にある部室の屋根だ。さらに言えばコンビニで購入しておいたパンを淡々と口に運んでいる。

《ピッピッピー！》

急に耳に入った笛の音に、食べていたパンが咽に詰まった。急いで水を飲む。

「コラア！屋根から降りないか！！」

もしかしくなくても……俺？

そろりと下を見ると誰の姿もなかった。

「早く降りないか！」

後ろ？！

いつの間に！？

「すいま……早苗さん？」

「君か。まさかこんなに早く、こんな場所で再会するとは思わなかったぞ？」

全くだ。

早苗さんの胸元には昨日はなかった笛がぶら下がっていた。

「因みに早苗さんは何してたんです？」

「生徒を注意し回っていた。食べ歩きしている生徒は停学。体育館裏で煙草を吸っていた教師は減給処分にしてやったぞ。」

食べ歩きだけで停学？！

しかも教師は減給？！

「いったい早苗さんは何者なんです？」

少々ビビっている俺。

だって……停学はいや！

「聞かない方が身のためだが……どうする？」

「聞カナクテ結構デス。」

裏の有りそうなブラックな笑みを見た俺は即座に知ること拒否した。

「賢明な判断だ。話を戻るが君は此处で何してるんだ？」

「何って……メシですけど？」

食べかけの焼そばパンを前に出す。

「こんな場所ですか？変わった趣味だな。まあとりあえず、停学になりたくなければ」

パン入りのコンビニ袋を持って飛び降りた。
だって怖い……。

「おもしろいヤツだな。」

後ろを取る趣味でも持ってるのか？
しかも気配消してるし……。

「そう言う早苗さんも変わってると思いますけど？」

部室前にあるベンチに座り、食事を再開する。

「私は普通だ。」

隣に座った早苗さんの手には可愛らしい弁当箱が……。

こんな行動をしてて、よく普通と言えるな・・・。

「いただきます。」

しかも食べ始めてる。

俺、この人の動きに付いてけないっす。

「美味い。」

感想を述べながら幸せそうな顔をする。
食べることが好きなんだと見た。

「ん？アレは誰だ？」

箸の動きを止め、前方を見据える。
俺はそれに続く。

不意に食事を再会し始めた俺を早苗さんは不思議な感じで見てきた。
その間にもさつき見た人は徐々に近づいてきている。
だが俺は知らんフリをしている。

「何か私に用かな？」

「違います。私は優に用があるんです。」

「ん？ああ君は昨日の？どうぞ。」

俺との間にスペースを作る早苗さん。

「優・・・私何かした？」

残りのパンを飲み込み視線を合わせる。
ただ俺のは攻撃的な視線だけ。

「邪魔……しないでくれる?」

離れた早苗さんの手を掴み、引つ張り抱き締める。

「今、彼女と仲良く食事中なんだけど?」

「え……あの……。」

動揺する紫織。

ただど関係ない。

「邪魔だから早く消えてくんない?」

「っ?!」

紫織は慌てた様子で俺の視界から遠ざかっていき、今もつ姿は見えない。

俺は早苗さんから急いで離れた。

「すいませんでした!」

もちろん謝る。

だって……色々と怖いじゃん?

「ふむ、停学で良いか?」

ええええ？！

「それはちよつと・・・。」

「罪名はセクハラ。良いではないか？」

火野優 セクハラで停学処分。

・・・。

一生の恥だ。

「勘弁してください。」

たぶん俺．．．笑えてないと思う。

「ははは。冗談だ。」

アンタのはマジで冗談にならねえつつの！

「にしても私を利用するとは．．．。」

ニヤニヤする早苗さん。

俺は逃げる準備万全だ。

「罰としてパフェでも奢ってもらおうか？」

・・・罰？

利用した罰がパフェですか？

ブラックな笑みには逆らえず、首を縦に動かす。

「よし。では放課後7時に正門前だ。よいな？」

授業が終わって3時間あるんですけど？

だが逆らえるわけもなく首を縦に動かした。

たぶん・・・今日は厄日だと思う。

第47話（後書き）

この話長くなりそうです……。次回から螢の視点に戻ります。

第48話（前書き）

お久しぶりです。そして、
すいません。

第48話

何でだろう？

胸が痛む。

優に恋人ができただけ……なのに何でこんなに胸が痛むのだろう？

「紫織！」

「わっ!？」

突然名前を呼ばれ、驚く。

目に映ったのは心配そうな顔つきのお姉ちゃんと螢さんだった。

「こんな時間まで、しかもこんな場所何をしていたの？」

「え……?」

言われて気づいた。

私のいる場所は学校近くの公園で空は薄暗くなっていた。

いつ、どうやって此処まで着たのか分からない。

でも何を考えていたのかは、ハッキリと覚えている。

「帰ろうか？少し肌寒いしね。」

優しく微笑む姿はどこか優に似ていて……やっぱり兄弟なんだ
と思った。

「はい……?!」

また・・・胸が苦しくなった。

一瞬、2人の後方の入口に見えた金髪の男と直ぐ側を歩く女。

私は走って公園から出て右を見ると、仲良さげに歩く優とその彼女がいた。

「誰だ？あの人？」

「きゃ！？」

いつの間にか横に立って2人を見ている螢さんにビックリした。
てか移動早すぎでは？

「さあ、分かんない。」

そして、ここにも瞬間移動の使い手がありました。
ちよっぴり怖い。

「・・・優の彼女だそうです。」

「「か、彼女　？！」」

度肝を抜かれたような顔になる2人。

「付けるべきだな。」

「「な？！」」

急に姿を表した隼人さんと美帆さんには私だけ驚かなかった。
だって・・・ねえ？

「ささ！行くわよ」

期限良さそうに2人を付け出したバカカップルに続き、私達3人も溜め息を吐いてから歩き出した。

歩くこと数分。

優達は喫茶店に入っっていった。

「二手に分かれましょう？」

と言う楽しそうな美帆さんの提案により、私達3人は優達の後ろに、バカカップルは優達の斜め後ろに分かれて座った。

「しかし、ホントに優の彼女なのか？」

声を低くして話をする螢さんに私は頷き口を開く。

「昼休みに……そう言われました。」

ドン！

優達のいるテーブルから大きな音が聞こえた。

そろゝっと気づかれないように見てみると………あまりの大きさに驚愕した。

メニュー表を開き運ばれてきたソレを調べる。

……あつた！

超ウルトラジャンボチョコパフェと言っらしい。

えつと重さ……10キロ？！

こんな量を食べれるのか？そう思いながらメニューから顔を上げる

とパカッと口を開けて固まっている2人が同じ方を見ていた。
私も同じ方を見て………どん引きした。

「ふう、美味かったぞ」

「は……はは……。」

苦笑いを浮かべる優。

テーブルには空の大きな器。

あの人……化け物だ。

「さて、停学に……いや退学になりたくなければ正直に答えるんだ。いいね？」

「横暴にもほどが……分かりました。話しますから退学届け……しかも俺名義で書くのやめてください！」

な、なんか普通のカップルがしない話しだよね……。

退学届けが何故会話に出てきます？

これは様子見だね。

「ふむ、よろしい。では聞くが何故、君はあの娘を避けているんだ？」

……あの娘？

「……逆に聞きますけど何故昨日会ったばかりの人にそんな事を話さないといけないんですか？」

え？

ちょ・・・昨日会ったばかり?!
付き合ってるんじゃないの?

「・・・・・・・・。」

「無言で退学届け書くの止めてください!」

・・・・変な会話。

付いていけない。」

「話して損はないと思うぞ? 私は口が堅い事で有名だ。それに」

彼女の笑顔は、私を見るお姉ちゃんのような暖かさがあつた。

「君の力になりたい。そう・・・心から言える。」

「・・・・笑わないで聞いてくれますか?」

「もちろんだ。」

「俺は・・・ずっと前からアイツが好きだったんです。ただアイツは俺の兄貴が好きで・・・・でも俺はアイツが好きで・・・・そんな時に気づいたんです。アイツの笑顔が一番輝いているのは兄貴と一緒にいる時にしか見られないって。俺がどんなに近くにいたって、あの笑顔は見られないんです。だから・・・俺はもう好きで居たくないから・・・あの笑顔で兄貴と話しをするアイツを見たくないから“さよなら”したんです。」

今、優は最近“さよなら”したと言った。
されたのは私だ。

優のお兄さんは螢さん。

私の好きな人は螢さん。

全てが私に当てはまっていた。

でも・・・まさか。

「俺は紫織を想う気持ちから逃げるしかなかったんです。」

頭が真っ白になった。

「紫織ちゃん？」

小声で固まった彼女の名を呼ぶ。

だめだ・・・反応がない。

「奈緒、紫織ちゃんを・・・奈緒？」

隣を見ると姉妹そろって固まっていた。

・・・どうすればいいのかな？

一応SOSを目でバカップルに送るが笑っているだけで助けはなさそうだ。

隼人は後で処刑。

「ほ、螢さん。」

錆びたロボットのようになぎなぎと音が出そうな感じで首を動かす紫

織ちゃん。

「優の好きな人って．．．私ですか？？」

．．．。

へるぷみっ！！

「えつとだねえ．．．だからその．．．なんて言つかさ．．。」

．．．視線を感じる。

いやコレは．．．殺気。

「何してんだよ？」

殺気を体から放出している俺の弟は本気で怒っている。

「アンタら最低だな。盗み見でもしてたんだろ？」

「あ．．優．．あの．．．。」

何か言いたげな紫織ちゃんだが優に睨まれて固まってしまった。

「．．．。」

俺達4人を睨みつけた後に優はこの場から去っていった。

第48話（後書き）

次こそは始めから螢の視点からで。

第49話

最近、優の様子がおかしい事は気づいていた。

昼食の時に顔は出さなくなってたし、口数だつて減っていた。

でも・・・まさか、こんな事になっていたなんて知らなかった。

「以上が私の知っている火野優の情報だ。しかし、どこかで聞いた名だと思ったが君の弟だったのか。」

と納得している女子生徒。

肩書き、生徒会長。

通称、救世主。

本名、竹内早苗。

「話してくれてありがとう。だいたいの状況は分かった。」

分かったけど・・・。

「今君にできることはないと思うが、君はどうする?。」

そう・・・俺には何もできない。

どうする?

俺はどうすればいい?

「・・・君はどうしたい?。」

どうしたい?

俺は・・・俺は・・・。

「優の助けになりたい。」

「兄らしい回答でご立派だが、彼からしたら良い迷惑だろうな。」

「迷惑？」

「たぶん彼は今こう思っているはずだ。兄貴なんか居なければ良かったのに……てね。」

彼女の言葉は胸に突き刺さった。

「優はそんな奴じゃありません！」

怒鳴る紫織ちゃんを早苗は睨む。

「彼は優しい人だから、そんな事は思わない……とても言いたいのか？彼だって人間だ。そう言った感情も持っている。君だってそうだろ？今まで一度も姉が居なければ良かったのにと思ったことがないのか？」

彼女の言葉に身に覚えがあるのか紫織ちゃんは何も言えずにいる。

「君は聞いたんだろ？彼の想いを。そして火野螢、君も下田紫織の想いを知っただろ？そんな君達に何ができる？助けになりたい？一番無理な事だ。」

厳しい彼女の言葉。

だが全てが正しい。

でも……それでも俺は……！

「それでも俺は優の助けになりたい。」

「何故だ？」

早苗の視線が厳しいものに変わった。
怯むわけにはいかない。

「俺が優の兄だからだ。理由なんてそんだけだ。」

「ふ・ふははは！」

気が狂ったのか？

彼女の突然の笑いに皆が皆固まった。

「兄弟そろってバカだな。もちろん良い意味でだ。」

立ち上がった彼女を見上げる一同。

「ひとまず彼女の君への想いに対する返事をしたらどうだ？私はこれで失礼する。」

俺達を再び凍らせて彼女はファミレスを立ち去った。

さて……………どうしようか？

「私は…………もう聞いたからわかっていると思いますが螢さんが異性として好きです。あの日から…………。」

「……うの田。」

・
・
・
神よ
・
・
。

答えない俺の代わりに処刑が確定しているアホが口を開いた。

「迷子になった私を助けてくれた時からです。」

「「は？」」

迷子の紫織ちゃんを助けた？

脳内メモリーにはそんなものは存在しない。

だが迷子で該当する記憶が1つだけ存在するが
でも・・・まさか・・・。

「それって小学生で秋の時の話かな？」

「はい。」

予想は確信に変わった。

「螢・・・。」

奈緒が何か言いたげに俺を見ている。

奈緒の言いたいことはわかる。

「見つけてくれて、安心して眠ってしまった私をおぶって家まで送
ってくれた時から私は螢さんが好きになったんです。」

「あの・・・ね、紫織ちゃん。」「返事はまだ良いです。じゃ私は
失礼します。」

「あ！ちよつと紫織！」

奈緒の制止する声を無視して紫織ちゃんは立ち去った。
そして取り残された俺達4人。

「……帰らないか？」

親友隼人はそう提案した。
もちろん賛成だ。
だけど……ね？

「隼人……処刑。」

右手スタンバイOK

「え？何で……い、いやがばら?!！」

語尾は日本語になっていなかった。
テーブルに倒れる親友。
後悔？ないない。

「美帆、それ取って。」

「ん？はいはい」

美帆は螢にある紙を手渡す。
その紙には機械で文字や数字が打ち込まれていた。
打ち込まれた文字を読むと……ドリンクバー！。
横に数字が4とある。

「美帆、いいよな？」

「お構いなく。」

果たしてコイツは本当に隼人の彼女なのか？と疑問を抱きながらも紙を隼人に握らせる。

「お先に失礼するぜ？親友。」

ポンと肩をたたいて俺達はファミレスを後にした。

途中で美帆と別れ、現在奈緒と2人で帰宅中。

会話なしで空気が重いと言うこの現状は何事ですかい？

「怒ってんの？」

「……不機嫌なだけ。」

回答になってねえし、何故に不機嫌？

「何で？」

「先越されたから……。」

理解不能……。

「誰に何を？」

ピタリと歩みを止めたので、とりあえず俺も止まる。

「……教えない。」

「は？」

「だから・・・教えない！」

プンスカと怒りながら奈緒は前に進んでいく。
て言うか置いていくな！

横に並ぶも・・・何か話題を出さないと!!
何か・・・何かないのか?!

・・・。

あ・・・あつた！

「ど、土曜日に練習試合があるんだけど・・・こないか？」

「・・・来て・・・ほしい？」

この空気で、冗談を言える程に俺の肝はすわっていない。

「うん。」

は・・・恥ずかしい・・・。
明日、隼人で晴らそう。

「じゃ行かない。」

真面目な顔で俺の目を見てくる。

「え・・・？」

人類初の生身で大気圏突入をしてやつても良いぞ？
それ程にシヨックだ。

「嘘 行く。」

エヘへと笑顔な奈緒。
ルンルンと軽い足取りで歩み出した。
結論・・・遊ばれた。

「こ・・・この野郎！」

「野郎じゃないよ？女だもん。」

「じゃからしいわ。」

とフザケている俺だが、今後どうするか不安でいっぱいだ。
優と紫織ちゃん。

この2人への対応は何をどうすればいい？

お袋に相談するか？

・・・ダメだ。

あの人は笑うだけ笑って、それで終わりにしてしまう。
バカップルは頼りにならない。
隼人は今頃どうしてるだろう？

興味がない。

「2人の事なら私・協力するから。だから、そんな怖い顔をして1人で悩まないで・・ね？」

「あ・・・おう。」

1番身近にいた。
頼りになる人。

「じゃ協力してもらえますかね？」

「してやりましょうかね？」

「まず・・どうすれば良いと考える？」

「簡単よ？あのね　。」

・・・神よ・・・。

「ほ、本気かよ?!」

「本気だよ。だいたい螢だって、それが切っ掛けで優君がまた始めたら嬉しいでしょう?」

「それはそうだけど．．．。」

「大丈夫だよ！巧くいくから！」

不安だ．．．。

とてつもなく不安だ。

例えるならば総理大臣が猿になるくらいに不安だ。

「．．．ひとまずこの作戦で決定。異論は？」

「多々ある。」

「却下」

なら聞くな．．．。

遠くにいる拓也に助けを求めたいと考えながら歩き出した螢は電柱に頭突きをするファインプレーで奈緒に大笑いされ帰宅した。

第49話（後書き）

非常にまずい状況です。スランプ・・・なんて言葉は使いたくはないのですが、それに等しい状況です。今後も更新が遅くなりますがお許し願います。

月明かり

第50話

あの日以来、家にいても優とは会話がなかった。
話しかけても無視され、食事も別々。

そんな日が続きながらも土曜日・・・作戦実行の日が訪れた。
今の気持ちは・・・不安で胸がいつぱいだ。
理由？

奈緒に聞いてくれや。

「じゃあ作戦通りによろしくね？」

此処は体育館入口前の階段。

奈緒は紫織ちゃん抜きである、いつものメンバーに作戦内容を伝え
終わったようだ。

「じゃ私と和樹先輩で2人を連れてきますね！」

愛ちゃんは敬礼して、和樹の首根っこをつかんでこの場を去った。
今才カシな表現が入っていたが事実だから。

「じゃ俺等は仕事に戻ろうかね？」

そう言うニコニコ顔の隼人。

「そうだな。じゃ後は応援も含めてよろしく。」

「「はあい」」

良い返事をする奈緒と美帆を残して俺と隼人は試合の準備のため体

育館内に戻った。

「おい火野。」

中に入ると即座に監督が俺を呼んだ。

返事をしながら監督の近くに駆け足で移動する。すると監督はたいそうな喜びの顔になっている。

まあその理由は分からんでもないがな。

「本当に大丈夫なんだろうな？」

大丈夫じゃなかったらアンタ泣くだろっが。だが俺的には大丈夫じゃない気がする。

「それは」

「大丈夫っすよ！」

突如として会話に参加したのは言うまでもなく、我が親友だ。

「そうかそうか。アハハハハ！」

狂ったかのように笑い出した監督を選手達はヒいた目で見ていて。ゆうか隼人・・・。テーマ余計なことを！
急いで笑い狂う監督の元から隼人の首根っこを掴み遠のく。

「もし失敗したらどうすんだよ！？」

俺は作戦が巧くいく気がしねえんだって！！
親友なら察しろよ！

「大丈夫だらは！？」

根拠のない自信にムカついたのでひとまず強制睡眠の刑にしよう。
・・・試合前に起こせばいいさ。

「ちょ・・・火野先輩！佐藤先輩が口から血を流して倒れていますよ！」

「大丈夫だ。」

長い付き合いの人間は皆知っている。
隼人は不死身だってさ。

「『今・・・そっちに行くよ。』と呟いていますよ？」

・・・これはヤバイ。

「ボールかせ！」

近くに来た後輩からボールを奪い取り幸せそんな面もちで寝ていらつしやる隼人の顔面に叩きつけた。

「ギャン！何す・・・あれ？此処は？確か俺橋の上にいたんじゃない・・・。」

間違いなく三途の川だよそれ。
危なかった・・・。

「何バカやってんだ？ささっと準備終わらせようぜ？」

冷静を装う。

あくまでも『俺は悪くないぞ?』空気を醸し出す。
だが数名の目撃者からの視線が痛い。

「ああ悪い悪い。ささつと終わらせるわ。」

笑顔で立ち去る親友の背中にグッドサインを送っておいた。
だがやはり視線が痛い。

「隼人!」

「りゃあ!」

隼人からのナイスパスを受け取り、ボールをリングに通す。

試合も3クォーターに突入し、57対34と勝っている俺達。チラリと監督を見る。

額に青筋がくつきりと浮き出ている。だから心配だったんだ！

続いて2階を見るが目標がない。

どうしましょ??

「ヤバくね？」

困った表情の隼人。

1番困ってるの俺だから！

「お前が無責任に大丈夫などと言うから……見て見る。」

顎で監督をさす。

「うつわ……青筋すげえな。しかも視線がオマエにいつてないか？」

「……………」

「2人共、敵がきたぞ！」

走ってくる敵さん共へ（心の中で）告ぐ。

会話の邪魔すんな。

（試合中に言う言葉じゃないよねえ？ By 和樹）

相手からボールを奪い前を走る味方にパスを出す。

監督……ボールは前にあります。

だからそんなに俺を見つめないでください。

「螢、上見てみなよ。」

走ってきた隼人に言われたとおりに上を見る。

「やつと来たか。」

まず目に止まったのは手を前に空わせた和樹で次に笑顔の奈緒と美帆。

そして最後に。

「優……。」

俺と隼人は同タイミングで一緒に試合に出ている後輩を見る。

視線に気づいた後輩はニヤリと笑い頷いた。ミッションスタート。

「いいから付いてきてよ?」

と和樹さんに言われ付いて行くと何故か学校に到着した。
意味が不明だった。

だがキュツ・・・ダム・・・その音が聞こえた時点で俺は回れ右をした。

「どこに行くんだい？」

つい先程まで前を歩いていた和樹さんはいつの間にか目の前に回り込んでいた。

「帰るんです。」

「そう言わずにさ・・・バスケの試合見ていこうよ？」

試合Ⅱ 兄貴出場。

見たくもない。

それに。

「嫌ですよ。」

だが口で勝てるわけもなく体育館に強制連行された。

「優君！」

体育館内の階段を上がると奈緒さんと美帆さんがいた。
こりゃ計画的犯行だな。

・・・犯罪じゃないけど・・・。

「高校に入って螢の試合見るの初めてだよね？」

「そう・・・ですね。」

単純に見たくないから今まで見なかった。
理由は誰も知らない。
言いたくもない。

2階に到達すると試合が嫌でも見えた。
久しぶりに見るがやはり兄貴は上手い。
ノールックでしかも味方が取りやすい場所にパスを出す・・・流
石だと思った。

「私の彼氏はどう？」

「上手いですよ。」

コメントに困った。

何故なら隼人さんのプレイはまだ見ていないのだから。

「でしょでしょ？」

上機嫌になった美帆さんに苦笑してしまった。
ん？

何か周りが騒がしくなったな。
コートに視線を戻すと兄貴のチームの選手が足を押さえ、苦しんで
いる様だ。

怪我か・・・？

「ドウシタンドロウネ？」

「分カラナイワ。」

女性2人の言葉が棒読みに聞こえた。
まあ……焦ってるのかな？

「あれれ？螢が手招きしてるよ??」

兄貴は確かに手招きしている。

視線は俺に向けられている気がするのは気のせいかな？
右に動く。

兄貴の視線も右に動く。

左に動く。

兄貴の視線も左に動く。

「優君ガ呼バレテイルミタイダヨ？」

奈緒さん……声が変わですよ？

最近まともに話してない兄貴の所に行くたくはないが、呼ばれてい
るからには何か俺にしかできない事があるんだろう。

そう思い階段を下り、兄貴の元へ急いだ。

ドアの前に行くと兄貴が待っていた。

「何の用？」

「はいコレ。」

ニコニコ兄貴の手にはユニフォームが……。
洗濯でもしろと？

「意味が分からないけど？」

「すぐコレに着替える。」

「……………」

まさかとは思うが…………。

「試合に…………出ると？」

兄貴は即頷く。

「出ない。だいたい何で俺なんだよ？意味不明。」

兄貴をマジで睨む。

だが兄貴は怯まずに俺と視線を合わせる。

睨む事数秒。

俺はため息を吐いた。

「シューズがない。」

「誰かから借りればいいさ。」

結局俺が折れる羽目になる。

兄貴からユニフォームを受け取り倉庫で素早く着替える。
倉庫から出るとオッサンと目があつた。

「私が監督だ。急ですまないが頼んだよ？」

て言うか監督よ、何で俺が出なければならん？
控えの奴ら使えよ。

「はい。」

とりあえず返事しておく。

「ポジションはPGだ。ポイントガードよろしく頼んだ。」

「え？・・・はい。」

たまたま・・・だよな？

「優、出るぞ？」

兄貴は肩をポンと叩いてコートに入っていた。

「頼りしてるよ？」

隼人さんはそう言って兄貴の元へ行った。

「あのお・・・。」

「ん？」

横に目をやるとシューズを持った人がいた。
たぶん俺と同じ1年だ。

「コレ渡すように火野先輩から言われてるんだけど・・・。」

「ありがとう。」

受け取ったシューズを履き終え、コートに入る。

久々のこの感覚・・・。

やはり気分がいい。

そう思ったと同時に視界に映ったのは先程までいなかったはずの愛と・・・紫織だった。

第50話（後書き）

更新が遅れましたことを深くお詫び申し上げます。

第51話（前書き）

最近出番少くないか？B Y^螢

第51話

愛に螢さんが試合していると聞いて来てみた体育館。

私は我が目を疑った。

実はまだ寝ているんじゃないのだろうかと真剣に夢落ちまで考えた。だが抓る頬の痛みは現実のもので・・・見ている光景もまた現実なのだ。

優が再びコートの中にいる。

「紫織、こっちにおいでよ。」

「・・・うん。」

お姉ちゃんに呼ばれ、移動する間も優を見ている。

螢さんではなく優を・・・だ。

「どうして優が試合に出てるの？」

お姉ちゃんは凍りついた。

私は呪文を言った覚えはありません。

「怪我人が出たらしくてね。臨時だよ。」

姉の隣にいた和樹さんが代わりに答える。

「あんなに・・・嫌がってたのに。」

優は前もそうだった。

小学生の時からしていたバスケットを中学ではしなないと言い張って

いた。

結局は中学2年生からまた始めていた。

そして高校生でも私が『しないの?』と聞いても『しない。』と言っていた。

「あ・・始まるよ。」

愛の言われてコートに視線を戻すと、螢さんがボールを保持していた。

でもそれも束の間で、ボールはすぐに優へと渡った。

「優・・・。」

私は知っている。

優は本当にバスケットが好きなんだって。

でも私は知らない。

何でいつも優はバスケットをしようとしなかったのか。

「あー！取られちゃった！」

ハッとなり見ると優がボールを奪われていた。

敵はそのまま得点を決めた。

再び螢さんはボールを保持したかと思いきや、素早く隼人さんに渡り、これまた優に渡った・・・と思った。

だが優はキャッチミスをし、ボールはコートの外にでた。

「おしかったね。」

お姉ちゃんの言う通り今のは決定的だった。

それから言うものの優はミスばかりをしていた。

徐々に私の中で苛々が貯蓄されていき……。

《ブー!!》

3クォーター終了のブザーと共に爆発した。

私は階段を駆け下り、体育館入り口に到着した。

1度深呼吸をしてから中に入る。

近くに転がっていたボールを拾い上げ、優に近寄る。

「。。」

「。。」

優と螢さん、そして隼人さんが何やら話しているけど……
関係ない。

持っているボールを

「この馬鹿あああ!」

叫び声と同時に本気で投げつけた。

「だあああ!?!」

ボールは見事に優の後頭部に直撃。

呆然とする先輩2人。

少しスッキリしたがまだ終わっていない。

「何しやがる!!」

優との久しぶりの会話だと私は少し嬉しく思ったが、言わせていただきます。

「さっきのプレーは何?! 何に躊躇してるのか知らないけどね、今は試合中なのよ!」

グツと言葉に詰まった表情になる優。

「君! コートから出なさい!」

審判らしい人が来て私に注意をする。

仕方なく私は下がるうとしたが、優の顔を見て最後に一言。

「アンタはあんなに下手じゃないでしょ?」

再び注意され、私は2階に戻った。

「あんな紫織さんは初めて見たなあ。」

冷やかし1号和樹さん。

「ねえ? ビックリしたわ。」

続いて2号美帆さん。

冷やかしはやめてください。

今更になって恥ずかしくなってきた。

「始まったよ。」

.....

「.....すい。」

眩く愛。

何がスゴいかって？

螢さんと隼人さん・・・それと優の3人がだよ。

さつきとは別人のような動きをする優は皆からの注目的になっている。

ただやはりブランクあるようで少しミスするがそれでもスゴかった。

「最初からやれば良いのに・・・。」

「ふふふ、そうだね。」

私の眩きにお姉ちゃんが相槌をうつ。

お姉ちゃんだって知っていた。

優がバスケットを好きだって。

コートを走り回る優の顔は輝いて見たのは気のせいなのかな？

「ほら、前みたい声・・・出してあげなさいよ。」

「うう・・・恥ずかしい。」

「さっきのに比べたら100億倍マシだから・・・ね？」

た、確かに先程の行為に比べたらマシだけど・・・。

「腹くるくくる！」

バシッと姉に背中を叩かれて、私は覚悟を決めた。

「優ー！頑張れえ！」

叫びました。

はい、叫びましたとも。

小中学生の時は平気でしていたけど・・・恥ずかしい。
私が顔を赤くしていると・・・優が私を一瞬だけ見て・・・。

「おう!!」

そう・・・答えてくれた。

試合は勝利した。

試合後に監督が『またバスケットやってみないか?』と言われたが、
『考えさせてください。』と逃げの回答をした。

そして体育館を出た俺は階段から下りてきた紫織に話があると言っ

て中庭のベンチへ連れてきた。

「話して何？」

少し戸惑った表情の紫織。

「何に躊躇していたか教えてやるのか？」

紫織の顔がマヌケになった。

「バスケ・・・本気でしたらまた始めたくなっちまうから・・・どうしようか悩んでた。」

「また・・・やれば良いじゃない？」

そう言うと思いました。

「何で・・・俺が中学でバスケしようとしなかったと思う？」

「え・・・？」

困惑する紫織。

まあ分かったら凄いがな。

たぶん紫織は覚えてないんだろうな・・・。

「紫織と“約束”したからだ。俺はそれを守るためにバスケをしなかった。ま、お前が吹奏楽部に入ってから俺もバスケに戻ったがな。」

「・・・約束？」

ほら覚えてなかった。

「結局は破っちまったけどな。」

「ねえ・・・何て約束をしたの？」

正直言いたくはない。

自力で思い出してほしい。

でも無理・・・だよなあ。

「教えてよ。」

ジッと俺の瞳を見てくる。

「一緒に居てやる・・・。」

「え・・・？」

確かに俺はそう・・・約束したんだ。

第51話（後書き）

最近は更新が遅くなって申し訳ありませんでした。ですが作者、頑張っていますので【光】をこれからもよろしく願います。頑

第52話（前書き）

更新遅れてすいませんm
――m

第52話

あれは俺がまだ僕と呼んでいた頃だ。

俺は・・・俺達は兄貴達同様にいつも一緒にいた。

登下校は俺がバスケの練習がない限り、いつも一緒だった。もちろん仲は良かった。

だけど・・・1つだけムカついていることがあった。

それは日に日に蓄積されていき、あの日に爆発した。

そして、その爆発の火の粉はアイツにまで降り注いってしまった・・・。

全てはあの日に　　。

「優君帰ろ?」

毎日の恒例である紫織からの帰りのお誘いに当時の俺はコクンと頷く。

「じゃ帰ろつか?」

「うん。」

靴を履き替え、外に出ると少しだけ肌寒かった。
季節は秋。

だが気温は冬に近いものに感じた。

「あ！見て見るよ！」

後ろから声がしたので2人同時に振り向く。

すると見るからに生意気そうな男の子が3人いた。
その中でも一番体格のいい男の子が一步前に出る。

「相変わらずラブラブだな？？熱くて僕近づけなあい。」

瞬間。

俺の眉間に皺が寄った。

コレが当時の俺が蓄積していた苛立ちの元だ。
通称『からかい』と呼ばれるその行為。

「火野は下田が大好きなんだってさあー！！」

度が過ぎていた。

大声で叫び男の子達にもちろん腹が立った。

「行こう。」

紫織の手を握り、走って家まで帰った。

『あんな馬鹿野郎は無視すればいい。放置していればその内やめる。
』そう思っていた。

次の日も無視をしてその場をしのいだ。
そして次の日も・・また次の日もそうやってやり過ごしてきた。
だが・・行為は収まるどころか徐々にエスカレートしていった。
そして徐々に俺の中で生まれた苛立ちも蓄積されていった。

日曜日。

もちろんの事ながら学校は休みである。

この日、俺と紫織はあまり訪れない隣町の外れにあるデパートに着ていた。

「どこにあるんだろう?」

必死になってCDが置いてある棚を見つめる紫織。

「ほらココだよ。」

俺の手には昔流行った1枚のCDが持たれている。
それを見た紫織はパアツと明るい笑顔になった。
レジに持って行き、商品を置くと同時に

「プレゼント用に包んでください」

ハモったのだった……。

「畏まりました。」

ニコニコ笑顔の店員は手際よくCDを包装紙で包み込んだ。
それを受け取り帰ろうと歩き出した。

「お姉ちゃんの誕生日が楽しみだね？」

「うん、そうだね。」

奈緒さんの誕生日プレゼントを手に持っている紫織は仕事を達成したような満足げな顔をしている。

デパートから外に出て駅に向かって近道の裏道を歩く。
その途中だった。

「ラブラブカップルがまた居る。」

あの3人だ。

俺は無視をして帰ろうとした。

けど……

「デートとはお熱いですねえ？何を買いに行ったのかなあ？？」

限界を超えた。

ガッツ！

「痛！！」

俺の拳は一番体格の良い男の子の顔にめり込み、吹き飛ばした。
倒れた彼の腹を足で思いっきり蹴飛ばす。

「ゲホッ！？うう。。。」

「・・・まだ・・・終わりじゃないよ？」

「ひっ！？」

一気に顔が青白くなった少年は残りの2人に目で助けを求めた。

「こ、このー！」

「やあ！」

ハッとなり2人が殴りかかってきた。

所詮小学生の喧嘩だ。

2対1・・・途中から3対1となり俺はボコボコに殴られている。

「バーカ！バーカ！」

キツと睨み付け威嚇するも優位に立った彼は臆することなく俺の腹に蹴りを入れた。

「痛・・・」

避けたくても2人に抑えられているため身動きがとれないのだ。

「最後の一発！」

「やめて！」

紫織の泣く一歩手前の声が木霊するが・・・さっきの仕返しと言う意味だろう。顔を思いつき殴られた。

「ではさようなら。雑魚の火野くん。あはは！」

憎たらしい笑い声をだしながら彼らはその場を去っていった。

悔しかった。

あんな奴らに負けたのが悔しくて悔しくて・・・涙が出そうだった。

「大丈夫！？」

「うるさい・・・！」

元と言えばコイツが・・・紫織が居るからこんな目に遭うんだ。紫織が居るからイヤな思いをしなくちゃいけないんだ。

当時の幼かった俺はそう思ってしまった。
その結果

「ゆ、優君？」

「うるさいって言っている！もう」

絶対言ってはならない言葉を口にしてしまった。

「僕に近づくな！！」

第52話（後書き）

かなり遅れての更新・・本当に申し訳ありません。理由は言い訳になるので言いません。ですが更新したくてもできない状況であったのです。今日からは早め早めに更新していきます。できることならば、最後までお付き合いください。

第53話（前書き）

遅めの更新をお許してください。

第53話

バタン！

力強く閉められるドアの音に続き

「優！おりてきなさい！」

お袋の呼ぶ声がした。

あの後、俺は紫織を置いて走って帰ってきていた。
殴られた体が痛むのを堪え、リビングに移動する。

「なに??」

「あんた紫織ちゃん知らない!？」

慌てた様子で騒ぐお袋に驚き、

「・・・は？」

うまく返答できなかった。

だがお袋はまだ騒ぐ。

「まだ家に帰ってないのよ!!!」

「え?!」

壁にかけてある時計に視線を移すと既に6時を過ぎている。
そして窓の外は真っ暗闇。

俺は慌てて家を飛び出した。

「ちょ・・・まち・・・さ・・・！」

玄関からはお袋の声が聞こえるが無視。

早く・・・捜さないと！そう心が叫んでいる。

・・・。

どれだけ走ったのだろう？

息はゼエゼエ、足はガクガクと悲鳴をあげている。

生憎、腕時計を身につけておらず、現在の時刻が分からない。

「どこに・・・居るんだ・・・よ！？」

俯いていた顔をあげると公園があった。

この公園は家からは決して近くはなく、寧ろ遠くに存在する。

ここまで全速力で走った自分に拍手を送りたいものだ。

いや・・・まてよ？

喧嘩する度に紫織は決まっていたいつも、その公園のブランコにいる。
って事は

だが、そんな期待は裏切られた。

しばし呆然とした後、また走る。

気がつけば隣町付近までできていた。

「ゼエゼエ・・・ゲホ。」

住宅街の外灯の下で、壁に背中をつけ、休憩をとる。
あまりのキツさに頭がガクツとうなだれる。

「あの・・・。」

そんな俺の上から声がかかった。
よく知っている声。

毎日・・・毎日・・・聞いている声。

俺はガバツと勢いよく顔を上げた。
するとどうだろ？

ビクツと体を動かしす紫織が立っていた。

だが俺だと分かった瞬間にその場で座り込んだ。

「紫織ちゃん?!」

「・・・。。。」

紫織は俯いて黙っている。
とにかく無事よか

「ぐす・・・ひつぐ・・・。。。」

泣いて いる!?

「紫織ちゃん!?!」

「優・・・くん。ひつぐ・・・私・・・道わかんなくて、迷子になって・・・
ぐすん・・・歩き回って・・・。」

それっきり黙り込む紫織。

数十秒後、意を決して口を開いた。

「さっきは・・・ごめんね？僕・・・紫織ちゃんに八つ当たりしちゃった。怒鳴って・・・ゴメンね？」

分かっている。

今更謝ったって言った事実には変わらない。

でも本気で紫織に近づかないで欲しいだなんて思っただけだと言ったことを知ってほしかった。

本当は逆なんだ　！？

そこで俺は気づいた。

ああ・・・そうなんだ・・・。

今日の前で泣いている女の子を俺は　。

「・・・近づくなって言うのは？？」

「嘘だから！」

「・・・うん。許してあげる！」

彼女にはやはり笑顔が似合っていた。

「公衆電話があるところまで行こう？そこで家に電話して向かいに来てもらおう？」

そう言って立ち上がる俺だが・・・紫織は立ち上がらない。

「私・・・もう歩けない。」

ウルウルとした瞳で上目遣い・・・当時の俺にはノックアウト寸前にさせられそうになる程に強力だった。

「だったら・・・おんぶしようか？」

「・・・いいの!？」

自分の顔が紅くなるのがわかる。

夜で良かった・・・。

そう思いながら片膝をつき、彼女を受け入れ万全状態になる。

そして背中に重みを感じたので、立ち上がった。

「ぐう・・・迎えの電話で兄ちゃんを呼んで、おんぶ変わってもらうかな？」

「・・・なんでかな？」

「重いか 痛っ！」

頭に衝撃が走った。

ええもちろん痛いですよ。

だが兄貴に変わってもらいたいのには勿論ワケがある。
体が限界を迎えつつあるからだ。

「レディに重いは失礼でしょ!？」

「ごめんなさい。」

それから暫くは無言だった。

だけど今のうちに言わなくてはと思い、沈黙を破った俺だった。

「僕さ・・・ずっと紫織ちゃんの側にいるから。もう絶対・・・1人にしないから！」

今回の出来事は全て俺の責任だ。

道の分らない場所に紫織を置いて帰って・・・つらい思いをさせ

た。

これは罪だ。

罪は償わなくてはならない。

だったら大切なモノを捨てても彼女のそばを離れない。
そう心に誓ったんだ。

第53話（後書き）

いよいよ次回で優の話は終わりです。

第54話（前書き）

久しぶりである早めの更新です。

第54話

思い出した・・・。

あの時、私を背中に抱えて帰った人は螢さんではない。
今、目の前にいる彼だ。

「結局、財布忘れたから電話できないで家までおぶって帰ったんだけどな。」

「・・・・・・。」

何も言えない。

私は・・・・私は忘れていた。

大切な事を・・・・忘れていた。

そして間違った記憶

・・・・最低だ私・・・・。

「バスケをしない理由は約束を守り抜くためだった。・・・・本当はバスケが大好きだ。」

「・・・・ごめんね。」

「紫織が謝るのは間違っている。謝らないといけないのは・・・・俺だ。
俺は・・・・約束を破った。本当に悪かった。ごめん！」

優は頭を下げて謝っている。

「私は約束を忘れていたんだよ？それに優の大好きなモノまで私は奪っていた・・・・。謝るのは優じゃない。私だよ。ごめんなさい！」

私は頭を下げた。
分かってる。

謝っても、謝っても謝りきれない事だって。
結局、私はずっと近くに居てくれた優のことを私は何も分かっていなかった。

私は・・・楽しかった。
毎日が凄く楽しかった。

日々の思い出には必ず優の笑顔あった。
でも・・・私は気づかなかった。
違う、気づけなかった。

笑顔の裏にある優の思いと苦しみを。

「頼むから顔を上げて？」

「・・・ごめんなさい。」

「紫織？」

「ごめんなさい！」

「もう・・・謝らなくて良いから。」

私は頭を上げようとして・・・その場に座り込んだ。

「おい！？どうした！？？」

優の焦ったような・・・ううん。
心配している声が耳に入ってきた。
でも私は絶対に顔を上げられない。

「・・・何でも・・・ない。」

泣くなんて行為は余計に彼を心配させるだけなのに・・・そう思っているのに涙はあふれ出てきてしまう。

「何でもないわけないだろ？」

「本当に・・・何でも・・・ない・・・から。」

呼吸がウマくできなくなってきたしまった。

「・・・紫織??」

もはや返事すらできない。

もう・・・泣いている事はバレているはず。

不意に何か温かいモノが頭に　これは優の・・・手？

うん、絶対にそうだ。

私が泣くと優は時々頭を撫でてくれる。

すると自然と私の涙は止まってしまう。

今回も私の涙は直ぐに止まってしまった。

そして私は・・・俯いたまま口を開いた。

「優・・・あのね？私と新しい約束をして？」

「おは・・・よう・・・?」

「うゝん・・・。」

朝、玄関を出ると眠そうな顔をした優がいた。
あまりにも見た目が変わっているから驚いた。
金だった髪が黒とまではいかないが焦げ茶に、
長かった髪はうんと短くなっている。

「・・・なんだよ?」

「べ、べつに!」

少し(?)動揺したものの、すぐさま彼と並んで歩き出した。

約束その1

毎日一緒に登下校すること。

やっぱり優とこの道を歩かないと1日が始まらない。

学校に向かう足取りはこの前までとは違って軽い。
教室に入ると愛がすでに来ていた。

「まあゝな！おはよう」

「おはよう紫織。あと・・・優？？」
「なんだよ？」

愛は開いた口が塞がらないようだ。
視線は髪に集中している。

「やつぱ・・・変か？」

優はガツクリと肩を落とす。

「うっん！そっちの方が・・・なんて言うか・・・。」

ん？愛の顔が紅いような・・・。

「カッコいいよ！」

その言葉を聞いた優の頬が少し赤くなった。
なに・・・これは？

「ねえゝし・・・おり？」

愛が凍りついた。

「何でお前は愛を睨んでいるんだ？」

どうやら私は今現在、愛を睨んでいるらしい。

約束その2

「うつめえー」

「俺の唐揚げ！かえせ！」

大好物の唐揚げを盗った隼人さんを螢さんは追っかける。

「唐揚げの恨みだああ！」

ドスツと鈍い音がした。

「メロス?!」

螢さんのドロップキックで隼人さんは数メートルを軽やかに飛んだ。
て言うか・・・メロスって一体・・・

《ピーー!》

ホイッスルを鳴らし何処からか姿を現した早苗さんは何かを螢さんの
の突きつけながら駆け寄る。

あれは・・・レッドカード?

つまりは・・・退場?

意味が分かんないよお・・・。

あれ?

螢さんが嘆いている。

「落ち着いて飯食わせろつつうの。」

約束その2とは皆と一緒に昼食をとること。
もちろん・・・

「み・・・水!」

優が食べている弁当は私の手作りだ。

・・・もつとママに御料理習おうかな?

本日の最後である授業のチャイムが鳴ると優はいそいそ帰り支度を始めた。

「じゃ行ってくるわ!」

「頑張つてね。あとで練習見に行くから。」

「おう!」

笑顔で教室を出る優を見送ってから、帰り支度を始める。

最後の約束は・・・バスケをまた心から楽しんでください。

第54話（後書き）

これにて優と紫織の話は無事終了・・・かな？次回からは視点が主人公である螢様に戻ります。

第55話（前書き）

感想を書いていただけると嬉しいです！ではどうぞ本文へ

第55話

「お袋！優！ちゃんと起きろよ！？」

習慣となつてしまっている2人を起こすという行為。
2階からは2人の気の抜けた返事が微かに聞こえた。

「行ってくる。」

ドアを開くといつものように奈緒がいた。

「螢、おはよう」

「おはよー、奈緒。」

互いに挨拶を済ませると肩を並べて歩き始める。

通学中は大抵、昨晚のテレビの内容やバスケなどだ。

毎日同じやり取り。

だが俺は飽きない。

楽しいから・・・奈緒と話すが。

嬉しいから・・・奈緒と一緒に時間を過ごせることが。

「でね昨日ママが」

いつの間にやら話の内容は奈緒の母親のドジな話になっていた。
話をしている奈緒は楽しそうに笑顔だ。

その笑顔が俺は大好きだ。

教室に入るとバカップルと和樹が楽しそうに話していた。

「おっはよー」

奈緒が3人挨拶する。

「おはよう奈緒！」

美帆が奈緒に抱きついた。

ム・・・羨ましい。

と思っていると隣からスツゴい視線を感じた。

やはり・・・お前からの視線か。

すぐそこから俺を睨んでいたのは隼人だった。

睨む相手は俺じゃないだろ？

と理不尽に思えたので

「ゲフオ！？」

とりあえず鳩尾を殴っておいた。

もちろん隼人の鳩尾だ。

「何しやがる！？」

「やっぱオマエ回復早くなってるわ・・・。」

「皆席につけろ。」

教室に入ってきた担任の声を聞いて、隼人は舌打ちをしつつ自分の席に戻っていった。

そして朝のホームルームは始まった。

ホームルームでの話などは聞いてなくても良いような話である事が大半なので、隣の席である奈緒に話しかけようと首を曲げたときだ

った。

「皆分かっていると思うがもうじき体育祭だ。と言うわけで……まず男どもクジ引け。引いたクジの色がteamだからな。」

首は再び前を向いた。

……体育祭の事忘れていた。

そして先生……発音いっすね。

担任の話を聞いた生徒の中には、俺と同じく『そう言えば！』と言う顔をしている者がいる。

すぐ隣にも……同じみたいだ。兎に角、担任に言われたとおりに、まず男子生徒がクジを引いていく。

「次、火野。」

名前を呼ばれたので教卓の前に移動する。

教卓には当たり前だが担任がおり、箱を持っている。

「早く引きなさい。」

「はあい。」

箱に手を入れ中にある物・手触りで紙と判断できた。その紙の1枚を手に取り、箱から取り出した。

黄色の紙が姿を見せた。

ブロックの色は赤、青、黄、白の4種類あり、この紙の色は自分の所属するブロックの色を表しているのだろう。

体育祭を詳しく説明すると学校側の『他クラスや別の学年の生徒と親睦を深めてほしい』と言う願によりクラスメートがバラバラの体育祭となっている。

紙を持って席に戻る途中で奈緒と視線が交わった。

「何色だった？」

イスに座るや速攻で聞いてくる奈緒。
・・・スッゴク迫力があります。

「黄色だ。」

「マジかよ・・・。」

と声がしたので奈緒のいる方向と逆を向くと・・・赤の紙を手につ
隼人が立っていた。

「螢も和樹も敵かよ・・・つまんねえ！」

「まあまあ。良いじゃないか？たまには僕たちがバラバラになって
戦うのも。」

爽やかな笑みを浮かべながら登場した和樹は隼人の肩に手を乗せた。

「でも・・・。」

隼人は余程バラバラになるねが嫌な様子だ。

そんな俺達をよそに、クジは既に女子の番になっていた。

キヤ〜キヤ〜と女子楽しそうにクジを引く。

そんな雰囲気の中・・・ただ1人だけが異様なオーラを発している。

「なあ・・・奈緒だけピリピリとしてないか？」

俺がそう言つと隼人と和樹は奈緒を見る。

そして直ぐに視線を奈緒から逸らした。

「あれ・・・どうかしたのか？」

「ぶっ・・・くくく・・・なんでも・・・ねえ・・・くっ。」

そして笑いを堪える隼人。

和樹をチラ見すると隼人同様だった。

何笑つてんだコイツら？

「いただきます。」

奈緒から受け取った弁当を食べる。
・・・うん

「相変わらず美味い。」

今いる場所はグランド付近の芝生。もちろんビニールシートを敷いている。

「ありがとう。」

ニコニコ笑う奈緒。

いや・・・朝から笑っている奈緒。

「ゲホッゲホッ・・・兄貴は何色になった？」

少し涙目の優。

今日も相変わらずの味なのか・・・？

「黄色だ。」

「げっ！？敵じゃん・・・他の人たちはどうなってんの？例えば・・・魂の抜けた顔の隼人さん。」

隣を見てみると朝から同じ顔をしている隼人が座っていた。
いい加減に正気に戻っていただきたい。

「俺と奈緒は黄色。隼人は・・・赤。美帆と和樹が青だ。」

「はかあはんにやさおひてふんへすね？」

愛ちゃんはパンを頬張りながら言葉を発する。
たぶんだけど・・・こう言ってたんだと思う。

『だからあんな顔してるんですね？』

そつだよ、美帆と離ればなれがシヨックだったらしくてあんな顔してるだよ。

美帆は気にしてなくて元気だけだな。

「愛！食べながら話さないの！」

紫織ちゃんに注意され愛ちゃんはパンを飲み込んだ。

「ん！？く・・・！み・・・み・・・ず。」

・・・ミミズ？

何故に??

て言うか顔が青白くなってるような気が・・・。

「ほら！水。」

優が持っていたペットボトルを愛ちゃんに渡す。
なるほど・・・水が欲しかったのか。

受け取った愛ちゃんは豪快に水を飲み干していく。

「ぷはっ！ありがとうー！」

「おう。飲み終わったのなら返せ。」

「え・・・？」

固まる愛ちゃん。

「おゝいどした？愛？」

美帆がペシペシと愛ちゃんの頬に平手打ちをする。

「これって・・・優の水？」

叩かれた頬がワンダフル・・・ってな感じに赤い。

「は？そうだけど？」

「にゃ？！」

猫が君臨した！

・・・じゃなくて、愛ちゃんの顔が一気に紅くなり、頬の赤さが分からなくなった。

「じゃ・・・か・・・かかか」

「間接キス？」

美帆がブラッくな笑みでそう口にした。

「にゃー！？」

猫 再 臨 ！

ゾクッ！

殺気だと！？

ま・さ・か・・・この殺気は・・・??

ふと優の向いてる反対方向を見てみると・・・ものごつつつ愛ちゃんを睨む紫織ちゃんがいた。

「下田妹よ・・・まあ落ち着け。」

いつ間にやら姿を現した生徒会長様が紫織ちゃんの隣に座った。

「キッ！」

だが紫織ちゃんは生徒会長を睨む。

すると生徒会長はため息を吐いて、立ち上がる。

「はああ！」

と言いながら手刀を紫織ちゃんの首に振り下ろす。

「うつ・・・。」

直撃した紫織ちゃんは・・・気を失った。

紫織ちゃんは気を失ったために前へ倒れる　　が生徒会長がガシッと受け止める。

「ふむ、我ながら完璧だ。」

素直な感想は以下の通りです。

とても恐ろしい！

紫織ちゃんを生徒会長はゆっくりと横にした。

「あれ？何で寝てんだ？」

今頃になって気づく優。

ちゃんと見てろよ！と思いますね。

「昼寝ではないのか？」

「うお！？早苗さん？！・・・いつ来たんですか？」

「なんだ？私に来てほしくなかったのか？」

そんな会話を聞きながら今日の献立を考える俺だった。

第56話

青空の下で今、大勢の座っている生徒の前に立つ俺と奈緒。
グラウンドに居るため皆タオルを持参し、流れる汗をふいている。

「どもー、黄ブロック長の火野螢です。みんな宜しく！」

俺の声に・・・

《はい！》

うむ、元気な返事で良いのだが・・・まず言わせてくれ。
・・・多数決なんて理不尽だ！
と言うわけでブロック長つす・・・はい。

「副ブロック長の下田奈緒でえす。ヨロシクね」

《よろしくー！》

おいコラ男共！

奈緒の時だけ大きな声で返事をするな！

「とりあえず」

話を進めようとしてあの男バカの声に遮られる。

「赤ブロック長の佐藤隼人だあああああ！皆・・・優勝したいかあ
！！？」

《イエーイ！！》

「「！？」」

隼人！？

なんちゅう盛り上がり！

負けられへん！！

「ねえ・・・私、隼人にだけは負けたくない。」

その声を聞いた男共は・・・

《赤には負けねえーぞコラア！！》

赤ブロック長にガンつける。

隼人・・・気付こうよ。

「とりあえず俺の話を聞いてくれ！」

男共の２割が視線を俺に戻した。

・・・悲しい・・・。

「螢の話を聞いてください！」

《はい！》

軍隊の様に視線を戻す男共。

・・・悲しいを通り越し虚しく思いますネ。

「早速だけどブロック対抗リレーの選手を決めたいと思います。」

数分後・・・俺と奈緒は完璧に多数決が嫌いになった。

「今日はこれにて解散。」

《ありがとうございました！！》

瞬く間に散っていく我がブロックの生徒達。

「はぁ・・・。」

ため息を吐くと背中に衝撃が走った。

「痛って！！！」

「ため息つかないの！もう決まったことには仕方ないんだし・・・。」

「

「はい・・・。」

そうだな・・・。

決まったものは仕方ないな。
うっし！

「おーい、お疲れ。」

前方から笑顔で走ってくる敵総大将。

「「何だよ敵。」」

「俺が何かしましたか!？」

いや・・何もしてないよ?
ただの八つ当たりだ。

「みんなお疲れ様。」

「お疲れ」

和樹と美帆が俺達と合流する。

「おう、2人もお疲れ。」

「お疲れ様。」

「ちょ・・反応が違い過ぎません!？」

ああ!？

「」「」「黙れ敵!」「」「」

「・・・ぐすん・・・うがあああああ!!!」

隼人は発狂した。

もちろん俺達は見捨て、その場から去った。

《ナイスシュート！・・・ドンマイ！・・・ドンマイ！》

声が響き渡る体育館。

只今、部活真っ最中なのだが・・・

「兄貴・・・隼人さんは？」

「知らん。」

隼人が来ていません。

心配そうな優だが、あの発狂した隼人を見てしまったら・・・うん、絶対もう心配しないと思うね。

「あ、そうだ。兄貴・・・俺ブロック対抗リレーで白代表で出るから。」

・・・なんですと！？

「まてまて！俺も黄色代表なんだけど！？」

「だと思った・・・。」

「赤代表は俺だぜ?!」

「「!?!」」

突如として姿を表した隼人。

・・・お前は何がしたいんだ？

「監督！今になって隼人が来ました!!」

「ちょ・・・!」

真っ青になる隼人。

・・・ウケる。

「ぬうあにいい!?!」

ズドドド・・・と音をだし突進してくる猪・・・もとい監督。

「佐藤!」

「はい!」

おゝ膝が震えてる。

「体育館を20往復!」

もつと酷いことを想像していたのだろう。

隼人の顔がパツと輝いた。

・・・気にくわない。

「監督、隼人には20往復は楽だと思います。」

「兄貴……。」

「ハップニイング!？」

疲れた顔の優と騒ぐ隼人。
監督は……頷いている。

「そうだな。佐藤、プラス腕立て、腹筋、背筋、スクワットをそれぞれ100回ずつな?」

「クレイジイイ!？」

なかなかの鬼具合だな。

「さっさとしないか!」

「うがあああ!」

なんとも騒がしいコンビだ。

翌朝、いつもの様に学校にきたわけだが・・・。

「せーの！つで螢は右足をだして。」

「ま、まっかせろ。」

仲良く肩を組む俺と奈緒。

近距離のため少し意識してしまう。

あ、今グラウンドの端で2人3脚の練習中です。

「「せーの！」」

まず最初の1歩だけをひたすら練習する。

意外とこれ重要なんだぞ？

「そろそろ歩いてみない？」

「だな？じゃくいくぞ・・・すうく・・・はあく・・・」

大きく深呼吸。

とくに意味はない。

「「せーの！1・・・2・・・1・・・2」」

流石に長い付き合いなだけあり、息はぴったしのようにだ。

「「遅い！」」

「な!？」

後ろから走ってきた和樹と美帆に追い抜かれた。
2人の足は鉢巻で結ばれている。

「「楽勝だね(だわ)」」

基本負けず嫌いな俺達。

奈緒の瞳を覗くと炎が見えた。

「「抜き返す!」」

もはや掛け声なしで爆走。

徐々に2人に接近し

「な!？」

「ええ!？」

直ぐに抜き返した。

・・俺達の勝ち　へ？

「「はああああ!」」

抜き返したはずなのに・・気づけばまた前に2人がいた。

「「僕(私)たちの勝ち!」」

声からして2人は勝ち誇った表情になっているに違いない。
でも・・・

「奈緒、ペース上げるぞ!？」

「うん!!」

また抜き返した俺達。

だがまた抜き返され・・・と繰り返していると、気づけば俺等4人はグラウンドの先生が作ったばかりのコースを走っていた。

「いい加減にしないか!」

と言う先生の怒鳴り声は耳にはいるまで走りつづけた俺達だった。

第56話（後書き）

次回は体育祭本番の話にしたいと考えています。只今執筆中ですの
で、楽しみにしてください。又、《メモリー》君と過ごした日
々《》もヨロシクお願いします。

第57話（前書き）

しばらくの間、更新ができませんでした。今日よりまた更新を再開したいと思います。

第57話

「お待たせしました。コーヒーとミルクティーになります。ではごゆっくりどうぞ。」

コーヒーとミルクティーをテーブルに置くと店員はニコリと笑ってから立ち去った。

「紫織ちゃん・・・話って何かな？」

俺は今、紫織ちゃんと2人で近所の喫茶店に訪れていた。理由？

部活後に話があると紫織ちゃんからメールが着ていたからだ。

その紫織ちゃんとは言うのと置かれたミルクティーを見つめたままでも中々口を開いてくれない。

とりあえずと、コーヒーを口にする。

・・・ふむ、美味しいな。

「あの・・・螢さんは私の気持ちを知っていますよね？」

「・・・うん。」

やはり、この話しか。

呼び出された時点で何となく分かっていた。だから大して驚きはしなかった。

「それで・・・あの・・・。」

とても言いにくそうに話す紫織ちゃんは、やっと顔を上げた。そして、力強い眼差しで俺を見てくる。

・・・威圧感がヤバイ・・・

「あの告白はなかったことにしてください!」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・は?」

脳内にエコーする紫織ちゃんの声。

・・・俺は告白を聞いてからスゴく悩んだ。

なんて断ればいいんだろう・・・断ったら泣くだろうなと、ずっと考えていた。

だから

「・・・わかった。」

不謹慎だけど気持ちが楽になった気がする。

「ありがとうございます。実は・・・今誰が好きなのか分からないんです。だから・・・やっぱり螢さんのことが好きだと思った時はもう一度告白させてください。」

「・・・わかった。その時にはちゃんと答えるよ。」

特に他の話があるわけでもなく、明日は体育祭なので数分後には家のリビングにいた。

ただただ、呆然としていたりリビングの扉が開かれた。

「ただいま。疲れたわ。」

「お疲れ様、母さん。晩御飯はシチューだけどどうする？」

「お願い。」

「はいよ。」

台所に移動し、火をつける。

母さんはさっきまで俺が座っていたソファーに寝転がっている。
数分後・・・。

「できたから食べなよ。」

「ありがとう。もうお腹ペコペコだわ。いただきます。」

「じゃー俺、明日早いからもう眠るから。」

「見に行けないけど明日は頑張りなさいよ?。」

「うん。おやすみ。」

「おやすみ。」

部屋に戻るとベッドにダイブした。

ここで携帯がピコピコと光っていることに気づいた。
開いてみるとタク兄からのメールだった。

《明日の体育祭は頑張れよ。あと怪我にはくれぐれも気をつけるよ
うにな。》

「うん。頑張るよつと・・・送信完了。」

さて寝ますかな？

もつじき奈緒に告白する、自分で決めた1ヶ月の期限だと思いながら眠りについた。

ジリリリ

「・・・ん？ふあゝ！朝・・・か。」

カーテン開くと自然の原理で日差しが俺の体を包み込んだ。

ジリリリ！

「おつと。」

ひとまず今だ鳴り止んでいない目覚ましを止めてから、身支度を始める。

全て（家事）を終えると玄関下から2階に向かって叫ぶ。

「2人とも早く起きろよな！？」

やはり、気のない返事が聞こえてきた。
まったく・・・。

そう心中で呟きながら玄関の扉を開いて、外にでた。
さあて学校に行きますか！？

第58話

湧き上がる歓声。

それがまた俺達を殺る気にしてくれる。

失礼、やる気にしてくれるのだ。

開会式は既に終わっており、今は1年生ブロック対抗の綱引きが行われている。

「……………」

そして、俺は困ったことになっている。

視線の先では、黄色の鉢巻を身に付けた我がブロックの仲間達が相手の白に負けじと綱を引いている。

そこには何ら問題はないのだ。

問題は相手にあるのだ。

「優君と愛ちゃんが出てるね……………」

そう……問題はこれだ。

正直2人を応援したい。

だが『ブロック長』と言う肩書き邪魔をして応援はできないのだ。

バアンとピストルが鳴る。

「白の勝ち！」

喜ぶ白の選手達。

もちろんベンチの者達だって同じだ。

まあ・・・こっちは悲痛な声がでてるけどね。
目に映るハイタッチをする優と愛ちゃん。
・・・昼にでもおめでとうと言おう。

《続きまして、2年生による障害物・・・え！？ちょ会長いつたい何を　ぐふう！？》

シーン・・・と静まり返るグラウンド。
・・・これ何てホラー？

《あゝ失礼。放送部の者が何故か倒れたので生徒会長である私が代わる事になった。よろしく頼む。》

絶対にアンタが気絶させただろうに・・・。
哀れな放送部員よ・・・アーメン。

「螢・・・体育祭大丈夫かな？」

「いや・・・間違いなく荒れるだろうな。」

《では今から障害物&借り物競走を始める。選手入場！》

ハッキリ言おう。

障害物＆借り物競走はかなり荒れていた。

「ギャース！？何やこれは！？」

悲鳴が絶えないグラウンド。

だって・・・ねえ？

なぜグラウンドで跳び箱１８段も跳ばなければならん！？

普通に無理だって！

さらに借り物競走ではお題がヤバいんだもん。

例えば・・・『ブス』。

うん、悲惨な結果になったさ。

１番最悪だったのは在り来たりではあるが『校長と教頭のカツラ』だ。

まあ俺だったら確実に固まっていたな。

ちなみにそれを引いた奴は・・・うん、もちろん悲惨だったさ・・・。

《続いて２人３脚だ。選手入場！》

俺達は言われるがままに入場した。ただ何も起こらないことを願いながら・・・。

《なお、この競技は急遽、障害物を設置した。保護者には予め確認はとつてある。よって教師並びに選手に拒否権はないものとする。》

まてやコラ。

速攻で願いを裏切るな！

「・・・螢・・・あれ。」

見たくない。

だが、そう思う気持ちと同時に見たいと言う好奇心がまたあるのも事実。

そして人間悲しいもので、好奇心がその気持ちを上回った。そして奈緒の指差す方視線を向ける。

「……。」

全米が拍手喝采とはこの事だろう。

コースが昨日とは明らかに違うのだ。と言うよりは早苗の言つとおりに障害物が設置されている。

「……私、自信ない。」

「ミー・トウー。」

そんな気持ちのまま始まった2人3脚（障害物有り）だった。確実に迫ってくる順番。

緊張はない。

驚きと戸惑いは多々あるがな。

「……ついにきたね。」

「ついにきたな……。」

自分の足と奈緒の足を鉢巻きで結びつける。

チラリと隣を見ると……美帆と和樹は余裕の笑みで俺らを見ていた。普段は仲良しでも勝負となれば別なのが俺達だ。

4人で火花を散らしている。

肩を組む手にも、自然と力が入る。

「位置について、よろしい」

パン！

ピストルの音と同時に俺達を含む、5組が走り出した。
負けたくない、その一心で走る。

それは最大の敵である2人も同じで必死な形相である。
始めのカーブを曲がりきった時には他の3組は遙か後ろを走っていた。

「螢、あれ！」

「何故に安全マットが!？」

コースには普通よりも大きめのサイズである、フツカフカの安全マットが敷かれていた。

そんな事には構わず普通に走ろうとマットに足を乗せたのだが・・・。

「きゃっ！」

「ぬお!？」

フツカフカである「足が沈む

この法則により、倒れた奈緒の道連れで俺も倒れたのだ。

「奈緒早く立たないと！」

奈緒の腕を掴み、立ち上がるのを手伝う。

「うん！負けられないもん!!！」

「お先に失礼！」

奴らにリードを許してしまった俺達は直ぐに追いかけるためマットから脱出した。

だが障害物はまだ用意されていた。

だが、それらを何とか乗り越えて最後の一直線を激走する2組。

「負けない！！」

吠える和樹と美帆。

「絶対勝つ！」

叫び俺ら。

ゴールまで後少し！

異常なまでの声援。

黄色ブロックの皆の為にも負けられない！

ゴールテープを切る。

和樹達と同時に感じられた。

どっちが1位なのか知るため審判である生徒を4人で見つめる・・もとい睨みつける。

生徒はビクツとした後に4色の旗の中から、黄色の旗を空高く上げた。

わぁー！と上がる歓声。

俺と奈緒は笑顔になり、喜びの声を出そうとしたのだが・・・

《おおー。1位は火野夫婦だ！》

スピーカーから聴こえた早苗の声に

「誰が夫婦だ!？」

2人で突っ込んでしまった。

見事なシンクロだと思います。

もはや条件反射の域に達しています。

・・・それは横に置いてえ、体育祭はどうなってしまっただろうか？

次回に続く

第58話（後書き）

次回に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3150d/>

RAN&JUMP【光】

2010年10月10日03時05分発行